女學雜誌

第三百二拾號
乙の巻



明治二十五年
六月十一日發兌

注意

社説 **滔々たる世上の母** 多くは其愛兒を殺すと題し、無學なる母が驚ろくべき弊害を世に流がす所以を痛論し女子教育の切要を辨じたり。**女子教育に於る經驗**は櫻井女學校一致女學校等の創立者たる櫻井ちか女史の筆にて同志者を益すると尤も多し。**吾宿の花**の續稿は彌よ細かにホームの狀態を寫し味隨つて多し**開書**には在米國留學山脇女史の綿密眞實なる報道を掲げ、家政**早起快然**の說は當時夏天に於ける朝々の心得を論じたり。**賢母の贊**は、ナポレオン、アウガステン、カーライル等が其母の德化を感謝したる至孝至誠の言葉を集めたる者。**同志社**病院に於ける**石井十次君**の一篇は山室氏の筆にて信仰修錬の**どもり**の匡正法は殊に婦人にて之を患ふる人の注意して讀むべきもの同志者を益すると多し**吾黨之女子教育**に對する序文は我が同志女學校の精神を十分に吐露したり。寄書は數多の短篇を集む皆な實際經驗の說

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 320. JUNE 11th. 1892.

EDITORIAL :—The Mother and Children.

CHILDREN'S COLUMN :—The Flower of the Family. (A Translation.)

MISCELLANEOUS :—Reminescence of Kamakura.
My Experince in Woman's Education. (Mrs. Sakurai.)

BIOGRAPHIES :—Exemplary Mothers. (Mothers of Napoleon, Augustine, and Carlyle.

DOMESTIC :—Early-rising.

CRITICAL NOTES :—Fragments From noted books. How to Cure Impediment of Speech.

CONTRIBUTED ARTICLES :—How to ward off "Kakke." Entertaining without Expenditure. Smelling and Thieves. Jam for Summer. The Price of Rice. How to make Summer Cool. Frugalty. Copying Paper.

OPEN LETTER : —From a Correspondent in America.

CONCERNING WOMEN :—

THE FRIEND OF THE ORPHANS :—

本號(第三百二十號)赤表

●社說　滔々たる世上の母、多くは其愛子を殺す

●兒籃　吾宿の花(第四回中)若松しづ子

●雜錄　鎌倉に妹を想ふ(暗光子)○女子教育に於ける經歷及經驗(櫻井ちか子)

●史傳　賢母の賛(ナポレチンの母、アウガステンの母、カーライルの母。

●家政　早起快然

●批評　「吾黨之女子教育」の序

●拔萃　ごもりの匡正法

●寄書　脚氣預防法○無錢馳走の秘傳○臭氣さ泥棒さの關係の考○夏はジヤム○米の直段○夏を涼しくする法○節儉々約○清書の用紙

●開書　米國の通信(山脇花子)

●女報

●孤友　同志社病院に於ける石井十次君○孤女學院報告

前週(第三百廿號)白表

●社說　無聲の聲、不動の動○關西地方漫遊所感

●論說　俠客論(天知子)○英雄豪傑彼れ何者ぞ(山月子)

●小說　我牢獄(脫蟬子)、

●文藝　西行詠花詞十八首(無名氏、撰)

●雜錄　基督の摸範の序(ベルベツキ博士作、若松しづ子譯)天地管見(小引。鑑識の明)六合學人○立脚の地俊傑を產出ず(畜鋤子)

●批評　木村芥舟氏の三十年史○紅葉山人の二人女

●時事　討論仕合の禮容○日本治安の文明度○學者責任論○大臣さ貴族院○我日本○政府さ保守黨

●女報

●孤兒の友

前々週(第三百十九號)赤表

●社說　宮闕近侍

●兒籃　吾やどの花(若松しづ子譯)

●史傳　僧ルーサアの母(下)

●批評　人物管見を評す(愛山生)

●雜錄　獨逸婦人の教育(ヂツキ女史)

●孤兒之友

●女報

女學雜誌　第三百二十號
明治二十五年六月十一日發兌

社說

滔々たる世上の母
多くは其愛子を殺す

凡そ母たらん仁は、其子の賢こくして且つ健やかならんとを願ふ。たとひ情け淺しとも、之を愚かにして且つ早く之を殺さんとを欲するものはあらじ。然れど、無學にして子を育て又は敎ゆるの道を知らざる母人は、心もとより之を期せずして、行の結果自づから之に似たる處置を爲す。若し三省して大ひに戒しむる所なくんば、不仁之よりも甚しきは尠し。

世の諺に、子は育ちがたしと云ふ。然れども、子は本來育ちにくきものにあらず、至つて育ち易きものなり。惣じて新たに世に成り出づるものは、元氣熾んにして皆な育ち易し。試みに草木の例を以て考ふるときは、此理最とも明らかなり。彼の筍、又に蕗の頭の如き新芽に生氣の盛んなるを見よ。其他何如なる草木にても、凡そ新芽の出づる所ろには元氣集まり、活潑にして自から發達するの勢ひ隆々たるものにあらずや。若し人ありて之を害するとなくば、惣て芽は大方成長すべし。半途枯るゝ如きとのあるは至つて稀れなるもの也。人間の新芽とも見るべき幼兒の生長すると亦斯の如し。彼等は極めて育ち易し。但だ之を育ち惡くゝするは、母親の無學なるによるものなり。

農夫が米を作るには、稻の生ひ立ちの理を知れり。若し之を知らずして耕作せば、稻は乍ちにして枯れんとす。植木屋が植木を養ふには、それ〴〵の植木の性質を知り、之に隨つて相應の手を施こす。若し之を知らずして培養せば、植木は久しからずして倒れんとす。一羽の小鳥を蓄ふにも、夫々の學問あり、一疋の金魚を育つるにも、其養ひ方を知らずんばある可らず。誰か、小供に金魚カナリヤを預けて其亂暴なる手に飼養を任せんや。誰か又白徒に花木稻米を托して其無學なる管理に耕作を一任せんや。然るに、子供の育て方を知らざる母親に、天地間の珍客、万物靈妙の長たる人の子の養育を托せんとす。大方にして育ちにくゝ、不幸にして短命のもの多きは無論の結果なりとす。

先づ産前産后の心得は何如に。呱々として心細げに泣く赤兒は何をか求むる。乳は何如ほどの割にて飲ますべき。衣物は何如ほどの温度にすべき。やゝ長じてのち、齒を生ずる頃の保護は何如に。其頃の食物は何如に。夜は幾時間ほど眠らすべく、晝は如何なる處ろに遊ばすべき。温度何度以上に高まるときは如何に、通じ何ほどに變はりたる時は何如に、凡そ此等變時に於ける心得は言ふに及ばず、常時刻々の間だ、寸分も等閑に附す可らざる心掛筆紙に盡す可らず。而も此等の心掛なき母が其子を取扱ふの手は、喩へば觸るゝ處ろ人の身を傷ふ利き刄の如し。何んぞ此の子を害せずして止むべき。世の多くの子等が育ちにくきは、即はち其母が爲す業とこそ言ふべけれ。

英國に名高き學者スペンサー氏（板垣伯洋行の頃此の人より種々の敎を聞かる）は言ふ、世上、母が殺す所ろの子數十万、たとひ殺さずとも母が病氣にする所ろの子數百万、たとひ殺さず病ひにせずとも、母が手を以て弱くする所ろの子數千万、あゝ此の弱き數千万と、病める數百万と、殺さるゝ數千万とあるは皆な無學なる母の手の爲す業なり、幼な兒を失ひたる母、亡骸を白き棺に納め、暫し時得貌の花を周圍に飾り、線香の烟ほそ〲と立のぼる下に、落涙數行、袖を濕して歎ずるやう、嗟、噫、天道は是なりや非なりや、何如なる無情の風ぞ、此の可愛の吾兒を奪ひ去れると。其聲や悲し、其歎きや憫れむべし、然れども、此子を殺せしは、無情の風にあらず、非道の天に非らず、彼の棺上に涙を落す母その人の爲せる業なりと。

此故に、たとひ子を愛すと云ふとも、此愛を施こすの道を知らずんば、反つて災ひするに均し。母の軟らかき手は毒刄となり、其の優しき抱きは縲絏の繩となり、其膝は死に伴ふ可き墳墓となることもあらん。母に無て成らぬは母としての信切なる愛にあらず、（此の愛は何れの母にもあり）、此愛を當然に現はすべき其智慧にあり。ルッソウと云へる佛蘭西前代の大學者（中江兆民君の尤とも崇拜する人、日本民權論の手本となりし論者）は曰く、母に要するは、單なる其愛にあらず、學びたる智識ある其愛なりと。旨ひ哉此言。

吾愛すべき子の身躰を傷害するは、不仁の甚しきものなり。左れど、其身躰を傷害するは尙ほ忍ぶべし、其心を傷害する

に至ては、不仁一層の事と云ふべし。人の人たるは、其心の立派なるが故なり、心もし其美を失へば、身躰何如に健やかなりとも誇るに足らず。古より相撲取が天下を取りたるとを聞かず。腕力何如に強く、身躰何如に健康なりとも、其心若し痛まば病めるに均し。死せるに均し、然れば、母たらん人は、其兒の身躰に掛念する外に、亦其心の上に注意せずんばある可らず。

然るに、母が、此事に[illegible]せざるは更に一層甚しきものあり。

夫れ、子供には子供の心あり、故に此心を遇するには、亦た之に相應したる一定の處置法に據らざるを得ず。后には均しく大人となるべきものなればとて、初より大人の心を持成すべき法を之に適用するは、喩へば、稲は后に米を生ずるものなればとて、初より稲を煮て食はんとするが如し。必竟「時」を知らざるの愚なり。

玆に一例を擧て右の理を示さんに、子供が二六時中、遊戯奔走するを見て、世人は之を「アソビ」と稱す。遊びと稱するは必らずしも惡しきにはあらねど、此の所謂る遊びは、大人に謂ふ所ろの遊びとは全く意味を異にするを知らざる可らず。大人の遊びは眞の遊びにて仕事にはあらず。左れど子供の遊びなるものは、其仕事なり、其神聖なる勞働なり、勉強なり。宛ら是れ、學校にて書物を讀み、議事堂にて會議し、百工が其工塲にて仕事するもの丶如し。故に子供の遊びを妨ぐるは、其勉強を妨ぐるものなり、其遊びを助け之を善きに導びくは、其學問を好きに計ふに同じ。然るに、母は此の理わりを知らず、子供が遊戯奔走するを見て、之を只だ無益のアソビと思へり。此の誤解より樣々の過ちを生ず。

賴山陽（日本外史の著者）幼なき時、姆に負はれて夜、月を觀、指ざして問ふ、彼は何如なるものぞと。姆が答いよ〳〵不審を增しければ、山陽は庭に下り泣いてます〳〵疑がへりと言傳ふ。凡そ人の幼稚なる時は、常に事々に質問するものなり。試みに幼者の手を引き、又は之を背に負ひ、外に出でて、草木、家居、生物などさま〴〵のものある所ろに行くべし。幼者は見る物ごとに目を圓らにし、事々に不審して之を問ふべし。其問ふは其學問なり、其熱心に事々を問ふは其の勉强の熱心なる也。人もし此の故を知りて、一々親切に之に答へなば、彼はます〳〵勵み、いよ〳〵進みて質問すべし。

三

之れ彼の學力の大ひに進むもの也。然るに、世間通常の母は此を知らず、子供が一々に聞たしとするを、マセたりとし、チコシヤなりとし、ウルサシとし、遂には叱して之を斥ぞく。之れ幼者の心を知らず、其の切角に起りたる勉强心を根より挫き折るものにあらずや。

又た幼者は、人の同情を得んことを欲す。新らしき花を見付け、不思議なる虫を見當りたる時なんど、大聲を發し惶たゞしく走せ來りて母親に告ぐ。此時、母たらんものは、たとひ其虫がなみ〳〵のものにて、又其花は珍らしからぬものなりとも、其子の心を察して深く之に同情を表し、もろともに珍重喜悦の心を現はすべきなり。然るに、母は、此の道理を知らざるが故に、冷々然之をもてなし、益もなきことをせぞと言わぬヨリに、一顧して再たび顧みざることあり。此時子供の失望何如計りぞや。失望とは勇氣を殺ろすことなり。彼が珍らしきものを見出さんとするの心之にて挫かる、則はち其勉强の心を中折せらるゝもの也。

母は斯の如くして、知らず識らず、其子の勉强心を傷なふ。此子七八才となれば、小學校にて怠るべし、十五六才となれば中學校にて惰くべし。此時に至りて、母は其子の怠惰なるを責むるといへど、之を怠惰にせしは則はち此の母當人にてあることを覺らず。

或人は言わく、子供が人形を毀つは、生理學者が人躰を解剖せんとするの心に均し、子供が障子に穴を明けて覗くは、天文學者が望遠鏡にて天を窺ふの心に均しと。眞とに好く子供心を穿ちたるものなり。子供は眞面目にて爲すことを人に笑われ、勉强して爲すことを人に妨げられ、善心にて爲すことを人に叱らる。而して此の人とは他人にあらずして大抵は其母なり。斯て、其子は、情曲り、心ひがみ、氣力挫けたる人となる。而して斯く爲さしむるものは大率ね其母なり。

嗚呼、母の愛は天地間に遺る唯一つの誠なり。其愛蜜よりも甘く、瑱珠よりも尊とし。誰か其愛の切なるを疑ふものあらんや。然れども、學びざるの愛は、愛なきに均しきことあり。母は斯くして、其愛兒の躰を傷害し、亦且つ其心を殺ろす。子を生むものも母なり、然れども之を殺すものも母なり。ただ之を生むは、犬も豕も之を能くす、犬豕の爲すことを得ざるは之を敎育するのみ。然れども、之を敎育せずして其靈を殺

ろし、殺ろしたる靈を懷かせて只だ朽ち果つべき肉躰をのみ與ふるの母は、遂に犬豕と相距る遠からざるなり。畢竟其過ちは元と學びざるが故なり。母は、生理學、心理學、敎育學等を知らざる可らず。之を知らんには一と通りの學問を修めざる可らず。此學問なき女子は、たとひ縫針を好くし料理に精しとも、母たるに適せず、多少恰好せざる衣物を着るとも身躰に害なく、多少味あしくとも料理は尙ほ忍ぶべし、生理、心理、敎育を知らずして、其子の全身全靈を殺ろすに比すべくもあらず。

されば、女生には、一と通りの學問を爲さしめずんばある可らず。妻たり母たらんには、一と通りの學問を知らずんばある可らず。此用意なくして娘を嫁するは父母終生の恥辱なり。此覺悟なくして、妻となり母となるは、人を害し、世を毒し、其の一家に災ひするもの也。

兒籃

我が宿の花

第四回（中）　若松しづ子

有つても一向不思議でないことを氣遣つて、思ず足を早めつゝ油斷なく行手に注意して進み、フト角を曲り升と、兄弟達が一眼に見える處へ來升た。まだ間近く來ない中に、一目見て何事か變事が起つたといふとが分り升た。大道の最中には三四人も人が群がつて居て、何物をか持ち揚げて居り升た。最初には、籠の中に這入つたホレスかと思ひ升たが、息を切り〳〵走り行く中に、さうではなく、弟のアーサの樣だと氣がつき升た。ホレスは抱やうとて手を出し、他子供たちはルーセの顏を見るや否、事の顚末を告やうとして、一時に口を開き升たが、ガヤ〳〵と雜踏する中に漸くにして「アーサ」、「あのいけない人」、「ビックラして死んでしまつた」なんどのちぐはぐの事柄を聞取つた丈でしたが、何よりも逸早く目につひたは、色青ざめ、悶絶したまゝ人に舁れたアーサの姿でした。ルーセの驚き入つた顏附を見て、何事と口から出やうとする

問を迎へて、其中一人が、

挽かれたんです、

ルーセは漸くに聲を發して、

怪我は澤山でせうか？

と問ひ升と、先の人が

どふだか、澤山でもないか知れません、今の處じやア、氣絕して居るんです、直ぐと橇を持つて來る筈ですから、さうすると、家へ連れて行ます。醫者も直き來ますわ。

ルーセは最前から引切らず大聲立てゝ、わめきては、手足をバタ〳〵させて居るホレスを籠から抱き取り、家路さして歸り升た。此通り危急な場合にも母は驚ろかせてならぬといふ丈は、確と心に覺悟して居り升た。そして、總領息子あるヂヤンに、

おまへこゝに番をしておいで。

と命じ升たが、他の子供等は泣ながら跡に續いて參り升た。自分にもさまで重い子供を抱いて、どふして家まで辿り着いたか分らぬ位で、風に持擧げられて、家まで連られたかの心地がし升た。先づ戶を開けて、徐かに這入り升た。一方には廣い台處が有り、他の一方には、客來の折のみ使ふ坐敷が有升て、これは今は鎖して、眞暗に、火の氣も有ませんかつた。ルーセは先窓を開け升て、又台處へ歸り升た。

おつかさまは、まだお休みですか？

といふ尋ねに、ハテが

いゝへ、モウおひなつて、赤ん坊を抱いて入つしやりるの

ルーセは廊下へ退つて、小聲で、

二人とも、こつちへ來て頂戴な、りべカさん、あなたはアーサさんの寐床を下へおろす手傳をして頂戴、それから、ハテさんは北のお部屋へ火を焚いて下さい。それから、トムさんはネ、このお部屋に居て、おつかさんの番をしておいでなさいよ、好子だチ……それでおつかさまには何のこともいふのでは有ませんよ。

震へるルーセの聲と其眞靑になつた顏に自から權威が有つたさうで、一同が機械の如く、云れた通りになり升た。急足ながら靜かに二階の階を上りながら、ハテさ、

マア、何事が出來たの？

アーサさんがどふかしたのです、まだどれ丈のとか分りま

せんが、余程の怪我らしいのです。ですから、おつかさまのお障りにならない處で世話の出來る樣に床を敷なければならないのですよ。二階では何も彼も聞え升もの。

兩人して、リベカの手早く起した火の側へ床を取り終る時分に丁度アーサを舁き入れ升た、ルーセは舁き込んだ人達に、

どふぞ、お靜かに願ひ升、母が病氣ですから。

ルーセはまだ氣絕したまゝの弟の側へ座り、

怪我は何所でせう？

其中の一人が、

多分頭でせう。

といつて窻際へ寄つて、小聲に何か話し合つて居升た。ルーセはアーサの額の上へ掛つた髪を持ち擧げて、黑紫になつた擦傷を見升た。それでまた、

醫者はモウ直き參りませうか

サア、直ぐといふ譯にはいかないんです。實は癲癇の患者を四里先まで診察に行つたのですから。

ルーセはキッとなり、

それでは、どふかして見ないでは、どこかに蛭が有るでせうか？そして、おとうさまが早く來て下さると好けれど。

かふ聞いて、一人の人が

何だと、血を吸ふ奴あら、直つき此近所に澤山有やすぜ、ダガ、おらあ、こんなに死に切た人を生かさうつて、血を吸出させるなんて聞いたことたねいナ。

併し兎に角やつて見度いんです。

とルーセが水を注れて、どふかしらと、躊躇しながら答へました。

誂の蛭は早速に參り升た。近邊の池で獲へたもので、大きいほど氣味悪う御座い升たが、ルーセは慄へる手を以て其中の一ツをアーサの額へ着けながら、嫌と思ふ暇もなく、又その樣な暇を自分に許しませんかつた、二三分經つ中に、空腹な蛭の働きの効能が見れて、アーサの眼が徐かに開いて、幽かにホレスといふ聲が聞こえ升た。ルーセは直ちに其一言に現れた憂慮を汲みとつて、

ホレスは何んともないの。アーサさんの外に怪我をした者は誰もないんです、そして、アーサさんも段々好のですよ。

といふ中に、側の人たちの一人が漸く氣の安まつたといふ調

子で、

ヤア、やつと、お醫者が來た、ダガ、おらお娘子だつて馬鹿にや出來ネイ、隨分醫者の役をすると思ふな。

醫師はアーサを丁寧に診察し、血の流れて居るを見て好しといひ氷を求め、ルーセ一人を除いて、他の人たちは悉皆室から出し升た。それで先づ、手眞似して方角を示しつゝ

あちらの少さいのはどふです？

大丈夫の樣子で御座い升。

と答へながら、ルーセは心の中に、アーサがどの位の怪我をして居るか、なぜいつて聞せて下らないだらう。醫者がまた、

誰が蛭を着たのですか？

私です、宜しう御座い升たか？

上出來でした。併しあなたは今朝何時にお起でした？

夕部は少しも眠りませんでした。

道理こそ。あなたのお顏は丸でお化の樣です。サア行つて今少し横になつて、暫らくお寢みなさい、私がこゝに付添つて居升から、血がも少しでましたらば氷を用ゐませう、手傳はなくて充分間に合い升。

ルーセは心配の非常な處から、却つて勇氣づき、

どれ丈の怪我か承わらない中はどふも眠れも致しますまいと思ひ升。

それでは、先づ今日の中はだめです。どふして一寸にそれが分りませうか？

どこか骨の碎た處が有りませうか？

アーサはこの時モウ一度眼を見開き、

イヽヘ、どこも……………

好し〳〵、豪勢だ、サア、ルーセ孃は早速お部屋へ引込玉へ。

今度はルーセも云つたる通りに弟の許を離れ、母の安否を訪ひに行升た。此時は恰もリベカが寢かしつけに掛つて居たホレスと烈ひ爭をして、居た時でした。ルーセは立止る暇さへなく、急足に母の部屋へ通拔つゝ

あの草子パンの大きいのを遣つて御覽なさいよ。

ホレスは其草子パンを嚙つたり、抱き擧て見たり、お馬〳〵といつたりして居る中に、漸く寢入り着升て、大風波の中に二時間ほど小やみが有り升た。ルーセの部屋へ這入るを見て、母はおまへよく來てお呉れだ、赤んぼが始終泣てるし、それに

どふやら人の話し聲やらドヤ〳〵する音やらが頻りに聞える様な心地がして、ヒョット何事か出來たのではないかと思つたが、わたしはいつも心配をし過す方だからネ。

わたくしも手が空さへすれば、モット早く來る筈でしたがといつて、万一秘密を泄しては、と我ながら危んで、物が言へませんかつた。それ故、たゞ靜かにソチコチと立働いて、母と赤子を樂にする様に心を配り、間もなく立つて、アーサを家へ舁き込んでから一向見えなくなつたハテの探索にと出掛け升た。

ハテさんはとうさま探ねに行つたかも知れませんよ、僕はモウ立つても好いですか?

とトムがいふのを聞いて、ルーセは其顏を眺めて、其言葉の意を解し得ませんでした。

姉さん、僕にこゝに居て、おつかさまの番して居ろつて仰つたでせう、ダカラ、僕、さつきからこゝにヂットして居たじや有りませんか?

おまへはマアなんと音無しい、可愛いゝ子だらうネイ。

とルーセが悦ばし氣な聲をたて、態々立止つて、賞られて赤らむ子供の頰にキスを致し升た。

僕、これからいつでも好子になるの?

といひ升た。ルーセはまたアーサの部家へ拔足しつゝ行升た。醫者は丁度歸る處で、ルーセに二言三言指圖をして日暮前迄には再び來る約束をして、立去り升た。ルーセの切な心の中には今直ぐ其まゝアーサの側へ寄添ひ、心の情愛を打開け、既にと切れた姿になつた處を見た時の心の切なさを語り、これからも、ひどく患でもしたらば、どの様に悲しいか知れぬと申度思升たが、いやそうしてはならぬ、醫師が何はさて置き、アーサは極く靜かに休ませねばならぬと申た言葉もあれば、容易に口は開かれぬと、考へ直し、たゞ枕邊へさし寄つて、青ざめた可愛いゝ顏にキスをし、其まゝ立つて子供の中から一人アーサの側に附添ふ者を撰びに行升た。父を見附けに行つたハテはむだ足して、今戻つた處で、是非に此役目を言つけてと歎願いたし升た。然るにルーセが、

どふもハテさんはお話せずに居られまいと思ひ升よ。

いゝへ、お話しなんかしませんよ、一言も口を開きません。チャンとかふして坐つて居升から、一寸御覽なさいよ。

ハテはルーセに見せやうとて、泣顔を何氣なく取繕ふとし升たが中々さふいかず、こらへた爲に尙ひどく聲を立てゝ泣出し升た。ルーセは

　ハテさんも可愛さうに疲れ切つて居升チ、

といつて、二階へ連れて行つて、横にし升たが、間もなく泣寐入りに眠り升た。

ルーセはこゝに至つて殆んど途方に暮れ升た。父は何處にも見當らず、ハテは寐て役には立たず、母は産處に在り、自分の身は一ツで四方に手配りをせねばならぬといふのでした。子供たちは亦御飯は出來ぬに、おとうさまがお歸になれば直ぐ御飯だとて催促をし升た。

　おとうさまがこゝへ歸つて入つして、ひもじいと仰やる位だと好けれど。

といつて、トムに向ひ、大層音なしくした故、アーサの側に暫らく居るとを許さうといひ升と、トムは大悦びで、姉の頸に抱きついて、嬉しさを現し升た。そこでルーセはトムの出て行つた後で母の寐間の中を殊さら機嫌好げに見遣り、

おつかさま、此節、子供たちの音無しくなり升たよ、格別トムは大層成人らしくなり升たよ。

それは嬉しひチ、さぞ世話が燒けるとだらうと思つて居たに。トムには誰も管つて遣らぬ樣だが、可愛さうに、よつぽど周圍から勵まして遣らないでは………

雜錄

妹の古跡に來て

（社員）暗光子

相見ざる時ほど相思ふ情深きはなく、面あはする時ほど談らひ憎きものはあらず、彼の長き夜を獨りあかし、遠き雲井を思ひやり、あさぢが宿に昔しを忍ぶこそ至情このむとはいはめど、筆を走らせし法師の思ひ切なるかな、最も長き談話は無言の時にあり、凡そ其人居らぬ時其胸の囁きに耳傾くる程滿足なる談話はあらずかし、其心は心の他に聽くべう耳なく、深く其人と談らまくせば其人の古蹟を訪ふに若くものあらざるべし、『雨に向ひて月を戀ふ』の一句情の切々たる實に此一髮の呼吸により、卒塔婆苔蒸し木の葉ふり埋みて、夕の嵐、夜の月のみ訪問ふ時ほど其人の談ふ聲明かに戀しと思ふ時あ

らず、

　あともなき人のことばの何にかは
　　殘りてけふのなみだとはなる

諸行無常と忘れまくせし澤庵法師すら、此言ふ可らざる情を吐きしやいかに、

　はかなしや命も人の言の葉も
　　たのまれぬ世をたのむ別れは

世に叛きたる僻物と思ひ定めし卜部の道士も、苦胸言ふべからざる此凄語を漏せしやいかに。

妹を愛する兄の心を誰か知る、孫女を愛づる祖父に似て而かも感情に走る盲愛ならず、季女を愛づる老父に似て而かも齢隔つる寒枯の無趣味にあらず、或時は同趣味の談らひ手と成り、或時は同等の小兒と成り、或時は慰問の天女と成り、或時は同智識の相談手と成り、或時は師弟と成り、或る時は友どちとなる、好しやレパノンの雅歌を謠ふに至らずとも、正しく夫人に次げる愛の現象なるべきを人知るや。

　吾れ妹少なからず有てり、一つの心散りてに異なる容姿に現はるれども、合ては宇宙をも覆ふべき玲瓏たる愛塊に化すめり、觀音と言はんか普賢と言はんか、ヴエナスと言はんかエンヂエルと言はんか。たま〳〵八重の櫻まだ綻ばぬ頃、妹の胸に耳あてゝ其心と談らはまく思ふと切にも戀し、さらば此妹と曾て心靈の逍遙遊に、昔し暮らせし古跡を訪はゞこれにます談話あらじと、さてこそ旅して其古跡に參り來ぬ。

　妹の心に逢はゞやとて其形骸の妹に別れ、傍を離れて聲なき幻の影おふ吾れぞ審しき、共に暮せし三歳前のこと未だ古きにあらざるべし、されど『時』は落下る一聯の瀑布にも似たるかな、長久に落ちて其音變らざると永しといふべくされど一瞬にして其水落下すると實に短しといふべし、人世六七十年永しとすれば永し、短しと思へば正に飛下一瞬の思ひあらん、人中の『時間』を一跨すれば、生と死と間髪を容るゝに暇あけん、紅顏の妹は早くも三とせを死の淵に追ひ遣られしか、今後五十年、もし爰に訪ひ來しならば、今の紅顏はいかなる變化の悲哀を此跡に描くとを得るか。

玄關より登りて妹等が朝な夕なに笑ひ談りし室に坐すれば言ふべからざる異樣の氣は吾身の膚を犯すなり、兼ては樂しきホームの紀念よとさゞめきし、床の間なる木像も、見慣たる

その軸物も、淋しげに人の魂を喚びやしぬらん、假りの主人が今參りぬと戯れて、つく〴〵と其面を見れば、死相動きて捻華微笑の味ひ深し、力なく默坐すれば室內寂寞として心耳に松風幽かにひゞく、立ちては坐り、坐りては立ち、其角が淋しき述懷に「ふみ月や獨りはほしき娘の子」の句さへ思ひ出らる。心落付く如くにて而かも安からねばや、吾れにもあらで庭の方へ逍遙出でぬ、花さきたる木の下に立ち寄れば、今は躰健かならぬ小妹が、曾ては此傍りに淸らけき歌うたふて、月魂を蹈みつゝ淋しげありし俤、噫彼れが小さき胸の鼓動は今はいかに響やらん、噫彼が病ひは此後いかになるやらん、散り來る花瓣二ひら、三ひら、永遠の靈界を悟りながらも『情』の浮世に、『愛』の衣纒ふものを、誰れか無常を觀ぜざらん、一人の魂白く淸く想の世界に現はれて、老ひ給ふ母上も、意の底に潜める人も、散布く花びらに魂寄するにや、情の眞理含まれて万籟死して寂かなり、思はず口吟む

散る花を涙にヂッと坐禪かな
歌うたふ聲は妹か花のかげ

老木の小高き根元掃ふて妹等が默考の靜坐なりと、曾て定めたる場所を見るに、木の葉さへ掻拂はれて今がた人の居りけん如く見えぬ、今にも妹の微笑もて來るにはあらずやと、我れ知らず見かへるも淋し、思ひ設けぬ場所よと呆れて、暫し妹の姿を見つめし頃のたのしさは、今ぞ幾ばくの感慨とやなりけん、心いよ〴〵濕りて人なき草ばを見返りがちなり、凋然として佇めば、二莖ばかりの菫草あはれに萎みて誰が爲めに咲きたりけん、心憎くも妹の俤見よとてか、墓場に力なき白薔薇見たりし詩人の感慨なからずや、浮世といふ壺中にては『愛』はなべて懷疑に終らざらめやわ、善を爲すを最も樂しといへれど、いかで人を愛するの樂みに增すとやある、愛は小なる門より入りて廣漠無量の靈天に擴ごる、北溟の鯤化して翼九万里に亘るの鵬とや成るべし、形骸より魅して靈大の道に脫化し、微笑顧みて再び形骸を見るにあらずば、いかで言ふ可らざる愛味を知らん、ましてや形骸の小愛を喰ふの俗骨をや、思はずも菫やさしく摘み採りて口吟む、

來て見れば無量をかたるすみれ草
つむ草や武骨ながらも兄ごゝろ

裏手に至れば古井の姿あとを變へず、釣りたるまゝの釣瓶横

はりて、今妹が使ひかけしにあらずや、今にも下駄音しめやかに、物洗ふとて來りやすべふ思はる、井桁に寄りて見下せば心映りて此下に人世埋もれぬ、石を拾ふて物狂はしく打込めば、鎭まりかへりし水の鏡は、破れ碎けて虫愕かす、大騒の下に潜む大閑寂は、此山寺の古井の底に止めけん、投込みし石の閑底に届く音澄みて、幽に響く聲も聞けし。

苔匂ふ古井のぞけば人ふたり　○○○

女子教育に於ける經歴及經驗

（第二）經驗の二三

櫻井ちか子

熱心

「熱心は成効の大分なりと」は誰人もいひ、我も常に口にしたる語なれども、之を身に實撿して確固と心に銘じたるは櫻井女學校創立の時なり、時恰も女學校困難の最中なりし或日近所に用たさんとていで行きけるに途にて、一人の舊友に逢ひたりしが彼の人我に近頃の住所を問はれければ、我は以前の如く番町の女學校の内に在るよしを答へたり、然るに彼の人不思議げに「まだ、彼の所へ御すまいなるか」といひしかば、我は我心のうちにて、彼の人の語こそ不思議なれ、我は學校をやめんために立てたるものにあらざるをと思ひたり、我は此時、別段此事について心付かざりしも、程へて後の日に此難時に當ても此心を持ちいたればこそ、不完全ながらも學校を維持し得つるなれと思ひ付きたりき、

學資金

我れはもと東京に生れ、東京に成長し、横濱以外の地には旅行したることなき身なりしにより、地方の人情狀況に通ぜざりしが、我良人の傳道に伴ふて十有餘の星霜を他鄕にて送りしより、都會に子女を遊學せしむる父母の辛苦を察知することとを得て以前學校に在る際生徒に對するの注意疎かりしを悔ゆることなきにあらず、中にも學資金の如きは生徒を管理するもの丶注意を爲すべきものたることを知りたり、今や中央集權の余弊にて國の富は重に都會就中東京に集まり、從て是等の塲所にては華美の風盛に行はる丶により、人間の弱情なる此の如き悪風には感染しやすく、端衣端袖の健兒、長袖緩帶の都人を學ぶに付ては費用も多く、一圓の金の如きは何のたしにもならざるが如き姿ならん、然るに都會にてかく價

少き一圓も之を衰微したる地方にて、得んとすれば實に都會の十圓よりも尙貴く、容易ならざる辛勞して漸く我手に入るものなれども子女を愛する父母の情とて自分等には出來得べきかぎりの節約を加へて、出來得べきだけ多くの金を其子女に送らんとするなり、斯く多くの勞力と愛情とを含みたる金なれば之をうくる子女は其心して能く／＼おのが務なる學業に從事すべきは勿論なれども又此の如き金をうけて勉學する生徒を管理する人々も其父母の心情辛勞をおもひやりて其生徒に質素、質朴の風を養成する樣に心懸くべき事なりとす

親心の一、

これも地方に在るとき得たる經驗の一なりとす、我地方に住居せしとき、其地より東京或は大坂の如き都會に其子女を遊學せしむる人の家を訪ふに、其父母は子女より越せし書狀を出して示すことと何處にても常例の如し、取て之を讀むに、其書中の記事の善事にあれ、惡事にあれ、之を聞く母の目には涙にうるほはざりしことなし、蓋し其涙を流すは惡事ならば憂ひてならん、善事ならば喜びの餘りならん、兎も角も親が子を思ふ心は人間が其心情に溢れたる時のしるしなる涙にいでゝまでも此の如く切なるなれ、且や地方にては萬事都會とはこと變りて、都會にては隣家には子女幾人あるや知らざる程なれども、地方の田舍にては然らず其町村の內にて都會へ遊學等にいづる者あらんには、其人の朋友隣人は申すに及ばず其村內、町內の居民皆之を知りて遊學者の成功如何に注目することなれば、これが父母たる者の心の中常に其子女の成績の良からんことを祈り、良報を得て之を其親族、隣朋に吹聽し其俊才たるの、譽を得んとするの念は、譽めらるゝ本人よりも之を傍に聞く父母の方中々盛なるものなり、或處に我の知る人ありしが此人其娘を東京に遊學せしめ居りしに其娘過て女德を亂し爲めに學校より退學を命ぜらるゝ始末となりたり其時、母なる人我に語りていふやう、我娘は幼少のときより學事を好み、小學校に入學の間も一度も落第せしことなく、敎師朋友の稱贊のうちに終に高等小學校をも卒業せしが、此上は東京にいでゝ修學したしとの娘の懇望により、我身代は月々拾圓內外の金を送るに堪へざるにも拘はらず、親の慾目にて、此娘ならば成業せんこと疑なしと思ひ、將來を樂みて娘の望に任せしが娘は爾來某校に入り、學に勵み、

試驗の都度も都合よしとの報を得て心嬉しく、他人の相集りて學事を談ずることなどあらんには強ひて其席にいでゝ我娘のことを語り、又娘より豫定外の學資を請ひ來るも嬉しさの余り家事を節して之を送りなどせしに、此く思ふ親の心の甲斐なくてや、近頃過をなせしとか、腹立しきやら悲しきやら、其後は他人が相集りて談學事に及ぶときなども急ぎて其席を退き又友人の娘の安否を問ふものあらば其答に苦しむなり、呼戻さんと思へども今更近隣への手前も悪しく如何せば宜からんと當惑するなりとて終りは涙にくれられしが、我は其あはれさに堪へ兼ねいろ／＼其人を慰めて、其場を辭したることとありき、實に親の手を離れて遠く都會に遊學する子女は其一擧一動も能く父母をして喜ばしめ、或は憂ひしむることあれば、子女たるものは注意の上にも注意して、行を正だし學に勵みて父母を喜ばしむべきことにして且や先進の書生の成績如何は他の父母等が其愛子を遠く遊學せしめんとするに當て取て以て標準とすることなれば尚更注意して後進の人の勉學を妨げざるやうになすべく、又之れが管理者たるものは能く父母の心を思ひやりて其子女を護るべくといたく心に思ひはかれぬ、

親心の二、

こは他人のことにあらで我身の上にかゝりきて經驗したることなり、我は從來多く他人の愛孃を預りしことあれども、いまだ自分の愛する娘を他人に托したることなかりしかば、年ゆかぬ者を親の手より離して遠き所に送るときの親心如何を知らざりしが、去年現住の敦賀に來るに先ち茲に初めて我愛娘を横濱共立女學校に托し置きて自分等は山海を隔つる二百餘里の地に向て旅立せんとするとき、心何となく迫り來り滊車の便は能く我等をして此距離をも一日に運び得ると思ひながら、相別れて出で行くに忍びざりし、我大坂一致女學校に在りし頃父母其娘を送り來りて皈國せんとするに際し相別るに困じたる樣子を屢見受けたりしとき親子の情然あるなるべしと察しては居りつれども、其眞實の感じを受けたるは此時が初めにして曾て他人の子女を托せられしとき彼等の心情を思ひやることの淺かりしごとく、從て彼等を慰愉安心せしむることの骨折の足らざりしことゝを悔ひ居れり、此後我良人所用ありて横濱に赴きしとき、娘に面したることありし

が、其時良人は我に書を送りて左の如く言ひ玉たり
共立女學校に至り娘に面會致候處、心動ろにせぐり來り候に付校外に召連れいで、品物など少々購ひ遣はし、校舍の門前まで送り歸へして自分は歸路につき候節、後をふりむき見ること能はずして其塲をのがれ涙をかくして歸り申候云々
と、我は此書を見しとき同じ涙にくれたりき、而して我娘を托したる學校は我の曾て寄宿したる學校にして其校の教師、幹事等は皆我の舊師或は舊友等にて相親しき間接なれば親の手許にあるも全前にて少しも懸念なきこととなるに親の心は尚此の如し、况して未だ自己の娘を送るべき學校について何事をも知らざる親の心には如何ならん、實に察するに餘あるなり。

史傳

賢母の賛 (社員) みどり

愚かなる父にして、賢こき兒を得たる例しすくなからず、左れど愚かなる母にして、賢こき兒を得たる例し甞てなし」とは、或る名高き人の名言なり、知るべし、賢兒は必らず賢母より出づ。一人物を感化し、教化するに付きては、父の勢力よりも母の勢力の方非常に強大なるとを知る。左に、古來、名高き人々が、何如に深く其母の德を謝したるかを示し、この名高き人々は、何如に明らかに其母の德化を己が立身の第一元因となすかを示し、以て賢母の世に必要なる所以を證しすべし。

(一) ナポレヲンの母

西洋の豐太閤、古今の奇傑、ナポレヲン、ボナパーテの剛膽、勇猛、大志、大畧は、世に知らざる人まれなり。然るに、彼は其勇猛なる性質を母より遺傳し、常に之を覺えて感謝したり。甞て言ふやう、

吾母は優しきうちに嚴格にて、其下し玉ふ賞罰ともに極めて嚴そかなりき、善惡ともに吾母の監視を逃るゝことなし。母は比類なき掛念をもて吾を監督し、唯一つの卑き情を起す時にても、又唯一つの男らしからぬ愛情を起すときにても、些かも假さず斷じて制止なし玉ひぬ。而して吾が年少の智性の上に、宏大雄高なる眞理を深く根ざさしめんが爲めには、何如なる勞苦をも甘んじて取り玉へり。母は僞を惡み玉へり。吾もしこの御敎に背く時は、激怒して之を制し玉へり。母は吾が過の一つをだに苟くも寛假し玉ふことなかりき。

ナポレオンは、此の賢母の德を忘るゝこと能はず、晩年一敗して、百万の兵、蜘蛛の子の如く散り、拔山の英傑しばし、セントヘレナの配所に最とさびしくさすらふと爲れりし比、つら／＼過來し方を追懷し、母を想ふて感慨禁ずること能はず、此時に至る迄で、小止なく書狀を鴻雁に托して、孤島漂流の此の末路の英雄を慰さめ玉へる其母を慕ひ思ひ、或る時、配所の窻の下に沈吟し、獨り言して云ふ、

あゝ、吾母は、吾爲めとあらば、黒き麵包（麥飯もつそうめし）を食べ玉ふとも、一語の不平を漏し玉はざる也、高大にして崇むべき思想今尚ほ母の御胸の内に滿ち充たり、而して此の高尙偉大なる御思望は、嘗て私慾の爲に屈服せしことあらずと。

（二）アウガスチンの母

有爲卓犖の才を懷きて、而も品行放肆なりける一豪傑、遂に其賢母の德に化せられて古今の大聖となりたるは、セント、アウガスチンなり（何ゆへ初め放埒なりしやと云ふに、其父の惡しき感化ありしゆへ也）。

アウガスチン、淸聖神潔の書を遺し、百世の下、人をして發起善に進ましむ、其德化千才に流れて、長久に盡きざるべし。而して、此の淸流の大根源は、其賢母モニカにあり。

アウガスチン、嘗て、其懺悔の記に告白して曰く、

神よ、吾母は、汝に忠なる婢なり、亦吾爲めに汝が台前に泣きたる婢なり、吾母が泣くは、世の多くの母が其子の肉軆の死したる時に泣くとは異なり、吾母は、吾一身現に肉に於て生きたりとも、尙ほ死せるに均しとして泣きたるなり。然るに、神よ、汝は、彼女が淚を輕んじ玉はず、彼女が淚流れて何處の地を潤ほす時も、其地には汝の惠降りた

り…………彼女は遂に勝ちぬ、神は祝福を與へ玉へり、ナイソの寡婦が其子を奪ひたる熊を追へるが如く、彼女が痛泣遂に「吾汝に言ふ、起てよ」の御聲を神より得たり…………あゝ吾が持てる惣ての物は皆な母より得たり。ヲゝ吾神よ、吾いま汝の子たることを得るとせば、そは汝が斯る母を吾に賜ひしによる、吾が眞理を重んずるに至りしは、母の敎示による、罪と不運との爲に早く吾が死せざりしは、母が余の爲に久しく信實の涙を流し、之を謝し、之を償ひ玉ひしによると。

（三）カーライルの母

道德の大敎師、慨世の豫言者、沈痛鬱勃、火山の火を吐くが如く、大江の逸決するが如き大文豪、カーライルは、其母の恩を謝して云く、

余が母は惣ての母の中の尤とも善き母なりし、余は母に對して限りなき謝恩の情を負へり、神の惠により余が母は、今も尙ほ余が頭、余が心として遺されたり、若し神許し玉はゞ、願くは余が多くの困苦の間に於て、母が恭敬なる英氣によりて余を慰さめしめ玉へ、と。

家政

早起

（社員）山下石翁

嘗て中村敬宇先生の塾にて、「早起快然」と云ふ文題を出し玉へりしことあるを記臆す。此先生は早く眠り早く起くるの習ひにて、早起の益を主張せらるゝこと、何人にも讓り玉はざりき。今や夏の盛りに近く、早朝これ一日の最とも愉快なる時にてあり、常に增して之を珍重すべき所以を思ふにつけ、坐ろになき人の遺風を追懷するなり。

早く起きることの第一の益は躰の上に關す。「早起快然」と云ふものは、躰の健康を助くるが故なり。何故に、早く起くるときは、健康に宜しきやと云ふに、固より是れ朝早く床を出でゝ新鮮の空氣を吸ふが故にもよれど、尤とも大ひなる元因は、「光」と云ふものゝ事に關するなり。

光とは日光の事なり、日光は躰の上に至大の影響を及ぼす。こは啻に人躰のみならず、多くの生物は皆な日光によりて榮ゆるなり。例へば、日當りの好き木は茂り、日當りの悪しき

木は自然に枯る、又た牛馬の如き家畜も屢ば日當り好き所ろに出して運動せしめずば、遂に衰ろへ倒るゝが如し。人も亦た同様にて、日に當らざる人は自づと病人となるものなり。ロシヤ陸軍省の官吏、ゼームス、ワイリーと云へる人の調べに、兵卒に同じ食物を與へ、同じ取扱を爲すに係はらず、日當りの惡しき方に立番したる兵卒は、日當りの好き方に廻りたるものより病の多きと三倍なりと。又名高き佛蘭西の外科醫デゥパイトレン氏の經驗に、或る一婦人多年鬱々として様々の病氣に罹り何如にすとも治しがたかりしを、ふと思付き、其平生住息せる暗き部屋より日當りの極めて好き部屋に移したるに、病氣久しからずして全癒したるとぞ。されば、彼のナイチンゲールは言はく、凡そ人に無るまじきもの、第一に新鮮なる空氣、之に次ぎては日光とす、日光は直接の日當りを最良とす、病人は之が爲めに速かに快復すると多し、久しく癒えざりし重病の人が、之によりて速かに全治せし例し、一々數え盡しがたしと。

扨て日光は斯く斗りに健康に入用なる者なれば、日光に當らずして働らくと多きものは、亦甚しく健康を害するものなり然るに、夜遲く眠る人は、自然朝遲く起るが故に、日光に當る時間甚はだ少なくして、暗室孤燈の下に頭腦を難ますと多く、隨つて身躰を害すると大ひなり、然るに、朝早く起き出づるものは、自づから夜も早く眠るものゆへ、日光に當る間亦隨つて長く、之が爲め其健康に益する至大なるの理は、既に前に述たるが如し。

かゝる次第により、早起は健康に大益あり、早起せざる人は、日光を受けず、夜暗々の裏に勞苦して自づと其身躰を害す。故に、長壽の元因を取調べて、一大著作を爲したる有名のゼヨン、シンクレーア氏は、古來各國の長壽の人を一々研究して、其要理を概括して云く、古より早起せずして長生せし人は一人もなし、又多少不養生を爲せし人にて不思議にも長生せし人の事を取調ぶるに、かゝる人は必らずや早起せしなり即はち早起の一事が何如に長生に大切なるかを知るとを得べしと。

以上生理上の理由によりて早起を大切とす、次には、一家取締の上より極めて之を、緊要とす。凡そ朝早く起き、朝飯を手まわし好く片付れば、終日手順よく、萬事都合宜しきもの

なれど、若し朝に於て一二時間を遲延するときは、終日斷えず追かけられて、用事の捗取らぬものなり、朝は何人も心地よきものゆへ、下婢下僕も勇み喜こびて働らくべし、此時は、何如なる婢僕にても、決して主婦の取締を要せざるなり。然るに斯る好都合の時間を寐床の中に過ごし、笑めるが如き、覩するが如き朝日の快然たる光を半夢一睡の中に消し、露かわき、草うなだれ、大方の働らき手は早くも仲休みする比ほひ、やうやくにして起出づるなんどは、家内の不取締言ふ計りあらし。

學校にて朝たの第一の課業に欠席する生徒は、大抵朝遲く起くる家より通學す、而してかゝる生徒に限り万事亂雜にして自づから靜肅あらず。

西洋には「義の太陽」など言ひ、赫々たる日輪を慕ふ言語多けれど、我國人はたゞ月をのみ慕ふ。故に、トルストイが言へる、「朝日てる間に働らく」などの味ひは多くは人の知らざる所ろにして、孤燈の下曉に徹すなど言わば自づと高尙げに感ずるの習はせあり。西洋人は兎角、光を好み、東洋人は兎角暗を好む。この習慣の根底を一變せざる可らず。

朝早く起出れば、東の天紅なゐし、鳥躍り、雀囀づる、小川の流れは嘻々として笑聲を發し、草は澤々として潤ほふ。起出し人の身は輕ろく、心氣爽快にして比へん方なし、此時に於て家族打より、先づ朝たの集りを開き、天地を、贊美して終日の仕事に分勞せんには、幸福それ如何に多き哉。

批評

吾黨の女子敎育

右は編者の著なれば固より是非を評せず、世上彼此の惠評も茲には轉載せず。たゞ、其序文を左に掲ぐるものは、本書の爲にあらずして、同主義の吾女學校の爲め也、

「吾黨の女子敎育」成る。巖本善治君の演述又は起草に係るものを編せしにて、大抵、女學雜誌が一と度び掲けて世に公けにせしものなり。然るに、吾校敎育の精神、期圖、大率れ之に同じく、現今實施する所ろ亦之に異なることなければ、此書亦用ひて「吾校の女子敎育」を代首するものと謂つべし。故に、君と計り、吾校之を版にして、世の同志に示すとさし、爲めに序首を加ふ。抑そも

明治女學校設立の主旨

は、道德の基礎堅固なる文明流の女學校を本邦人の手にて管理せんと欲するにあり。故に、明治十八年の設立主旨書の文に云く

抑も女子の教育を要する、此の如く夫れ急なりと雖も、顧みて其教育の場たる學校の寥々たるを見れば、誰れか此間に憾なきを得んや。然るに我輩は未だ我國の紳士有力者にして、自ら奮て女學校を設立せし者あるを聞かず、而して今日府下に於て華士族平民の別なく、小學以上の女生徒を教育し得べきの學校は多く外國基督信徒の慈善を以て、成立するものなるを見る。嗚呼邦人自から此緊急の務に任ぜず、却て外人をして資を損て之に從事せしむ、我輩は深く外人の厚情を鳴謝すると同時に、亦邦人の爲めに忸怩たらざるを得ざる也、邦人豈獨り外人の力に依賴して自ら爲に謀る所なくして可ならんや。況んや外國女子の教育法は、未だ直に移して以て我國に用ふ可からざる者あるに於ておや。夫れ東京は、全國文化の集點紳士富豪の輻輳する所なり、而して女子教育の道に缺くるあると尙且此の如し、地方の事推して知る可きのみ、是れ速に補濟の道を立てざる可からざるなり。我輩此に感ある事久し、茲に同志者と相謀り、一の女學校を設立して、名くるに明治女學校の稱を以てし、聊か力を此に致さんとす

此故に、

學科の配分

も、和洋漢の三を、相應にし、勉めて、守舊、邀進、西洋風、舊弊風の一方に僻せざるを旨としたり。學科表を一覽せらるゝ人は、蓋し此を諒せらるゝならん歟。而して躰育には、躰操、女禮、武道を用ひ、教育は專ら、發啓練磨を主として、甚たく暗誦の風を斥け、心して創見を養はしむべき工夫をと念せり。德育に至ては、基礎を基督教に置くと雖ども、世上の所云る傳道方の如きは、斷じて採らず、專ら精神上不知不識の脩業を要させり。

本校の成立

は議員、校長を撰擧し、校長、教頭以下諸役員諸教員を撰擧すと雖ども、全躰中心の維持は、一に同志評議會員なるものに任ず。此會員は、一生を女子教育に托するとき、本校の教育主義に同ずるとき、基督教を信奉するとのみに於て、同志一意の友、盟約して、本校に共力同勞す。貧富苦樂を分つて、斯の道に獻身するものの團躰なり。此團躰評議會を作り、此會、本校の万事を會議會談して決す而して、生徒中より撰出せられたる惣代も亦た此會中に列するものなり。而して

此の同志會

は、啻に、本校の爲に共に勞するのみならす、志は本邦一般の女子教育の爲に盡すにあり。故に、日常本校に來り力めざるの君子と雖も、亦此會に列するものあらんとす。此の會員は、實に眞誠なる同志者を廣く世上に求むるものなり。

女學普及の經綸

に至ては、此書の卷末に記する所を覽す。思ふに、方今國家の勢趣尋常ならす、之を救ふ最大最好の方途は、實に女子教育にありと信ず。天下有志の君子、希はくは、吾黨、吾會の精神を察せよ。

明治女學校評議會長記

拔萃

どもり(吃)の匡正法

衛生療病志第二十九號に、醫學士賀古鶴所君が、右の題の說を委しく載す。何人にも吃はつらけれど、特に女の身には心ぐるしきものゆへ、專一に匡正の法を盡すべし、其法は、

吃は治すべからずやといふに然らずこれに教ふるに法を以てすれは癒ゆべき病なりされとも偏に藥石の力を藉りていやすべきにあらず蓋し吃の病根は呼吸の正しからざるに在るを以て吃を癒さんとせば呼吸を正さゞる可らずこれを正すを一、呼吸の操錬といふ又字音を明にいひ出で語を明朗に發せんことを教へざるべからずこれを二、發聲の操錬といふ此の二法を以て吃に教ふる正科とすこれに副ふるに次の法を以てす三、朗讀法韻文散文等を緩に聲高に讀上げて聲音の抑揚を正うし訛をさけ假にも自然ならぬ音調を生ぜざる樣になすべし四、諺草、逸事、短き物語等の中曾て誦せしことある文或は諳記せしことある文を撰びて緩に聲高に演べしめ而して自然ならぬ演へ方に陷らぬ樣に注意すべし五、戯曲又は謠曲の一役にならせ對手を作りて其役の言葉を演べしむべし且つ此習の傍ら柔軟躰操を行ひて全身の營養を盛ならしめ胸廓腹壁の伸縮を營むべき筋肉の作用をして壯ならしむべし身心に害ある事は勉めてこれをさけしめ呼吸器に病あるはこれを療し腺病質なるには强壯劑を與へ人によりては山海に遊ばしめ或は每朝攝氏の二十度乃至十四度なる冷水浴を取らしめ或は按摩法を施し或は電氣を用ひ或は肉食を勸め或は素食を勸めなさす。

寄書

○脚氣豫防法實驗　都の假りの住ひ人

追々脚氣の多き頃と相成候、其豫防には、滋養食する事、青皮の肴を食べぬと、奥州邊の濕り米を用いぬ事、など色々の法有之候よう承はり候へども、貧しき人々は何れも容易すく行ひ難く候。私の經驗は、好く働らき、夜早く眠り、万事に不養生をせぬやうにすれば、脚氣は大抵起らぬものと獨り定め固く信じ居候。

○無錢御馳走の秘傳　ある主婦

入費を別段に掛けず、品物を別段に加へず、さりとて別段に苦勞をせずして御馳走を殖す妙法は、切り方を巧みにし、麗はしく盛り、そして仲好くお話しをしながら樂しんで食べるのにあると固く存じ候かしく。

○臭氣と泥棒との關係の考　家内用人

近頃或る所に招かれたる節、ヨキ御工風と感服いたし候は、男用のハヾカリの筒の内に、ユーカリ樹の葉（思ふに此樹なき所は杉の葉を度々更ゆるか、松の葉かを用ゆべし）を折まげて入れてありし。その處香り高く立ち、得ならぬ心地し、ちと長くハヾカリの内に住ひ度存じ候ひき。その節又よく考候ば、大抵の家の結構、ハヾカリは至つて盜賊の入込み易き樣に出來居候とに候、之は餘程注意すべきものにて、恐らく今時の少し考ある盜賊は是非ハヾカリより入込むべきものと存じ附候。たゞ盜賊も是迄閉口せしは、臭氣の甚はだしきゆへにて候ひけんが、前申す如く、ユウカリ樹の葉などにて其内香氣馥郁たらんには、最早安心しがたしと存じ候。前の改良法に引つゞき、盜賊の用心肝要と被存候。

○夏はジヤム　神奈川の農家の妻

近頃は西洋いちごの季節にはべる。之を煮て砂糖をまぜ、ジヤムを製し置けば、年中の經濟莫大にて、大抵の家内の菓子は、之をパンにつけたるにて結構至極と存じ候。冬はカキモチ、夏はジヤムを御忘れなき方と祈り候。

○米の直段　田中まさ遣

米の直段追々下るやうには候へども、銀貨の下落甚はだしく此の下落は大勢とも申すものにて仲々急に取かへし附き不申候へば、此よりは米價も物價も概して上り申すべく、又た

都は損をして、田舍は大ひに得をすることとなるべく候。隨つて田舍の赤毛布（都見物の人）が段々と都に多く出かけ申すべく候。其邊も家の經濟に關係いたすべく、心得置きて宜しきことと存じ居候。

○夏を涼しくする法

一女生

夏の內にあまり暑がらぬ工夫は、今の內に余り薄衣をせず、躰をならすことに候。之は多年私の經驗せしとゆへ申上置候。

○節儉貯金

井上三郎

貯金の工夫は、先づ貯金を樂しむ心を起すにあり、此の樂しむ心を起すは、先づ少しにても貯金するにあり、既に一度び驛遞局に多少の貯金を爲すときは、何となく貯金が樂しみなるもの也。又、人の心を落付け、儉約の念ひを引起すには、地面を買ふに若くものなし、地面を所有する時は、心自から落付き、一層節儉の心を起すものなり。

○淸書の用紙

取締某

半紙を今以て用ゆるは損にて候、此比は半紙よりも廉價の紙類おびたゞしく多く有之候、淸書なども今時、半紙にするなどは至極不經濟と存じ候。

開書

○米國よりの通信

左は、米國マウント、ホリヨーク大學にある山脇花子が其友人に寄せたる文の大畧なり、かゝげて開書となす。

妹當校に參り候てよりもはや七ヶ月にも相成候へば今日にては畧ほ學校の精神さするさころ敎師生徒の氣風も大方相解り申候當校々長ミセス、ミードは誠に溫厚篤實の人にて校のため非常なる熱心を以て働き居られ候每朝の祈禱會に於ての敎諭感話は實に全校に權威もて命を傳ゆる樣にかんし申候其主意は元より日每におなじからねど精神は創立者メレーライチン孃の如く高貴にしてかつ献身的にしかもおさなしかれさの事なり元より日常の風俗習慣は異れども婦人の德さか申事に於ては西も東も區別なき樣考へられ候日每に此敎を受くる生徒われらよく夫人の熱心に化せらるゝを得ば誠に幸さ存じ候生徒全躰に三種の別あり日夜の勉學のかたわらよき模範をあらわし多くの未信徒を化し業を終へなば或は外國に或は米國內地に於て献身主のために働かんさ或は傳道會なるものを組織し或はバランデンなどゝ熱心に勉め居る人あり是第一種のもの第二は信者には相違なけれどたゞ自ら其信仰を保つのみにて傳道敎話などをなすとを好まざるもの第三は未信徒なり未信徒の有樣を全躰より申せばさすが基督敎國の婦人なれば主の新など知らぬ人は稀なり元より敎理に反對する人も稀なり只身に慣れて宗敎心起らず冷淡に過し居る人なり併し幸にも小妹の懇意に致し居る友のうちには一人の未信徒を除くの外は多くは第一種に屬すべき人なればこの人々より受くる信仰上の益少なからざる樣にぞんぜられ候この夏の卒業生中には外國傳道に志し居る人五六名有之候小妹入校前耳にせしさころ及他の大學にある友達等の通知に相違せしとを當校內にて發見せしこさあり他にあらず生徒の學問に熱心なるとなり時々姉等より報知

せらるゝ有樣によりても多くの生徒は學業を勉むるに汲々たらんより先づ good time さか happy time をたのしみ居る者多き樣子に候へ共當校生徒は大率れ質業をむれさし只管に學に勵むもの多し小妹今日に至りて漸くこの相違ある原因を發見いたし候即ち生徒の過半は數年間教授の任に從ひ貯へ得たる金を學資にあて盡れは再び教授を試み學資を得て歸校する人なり中には暑中休中は或店の book keeping をなし其の得たる金をもて衣服小遣にあて月謝月俸は卒業後幾年間中に於て返却するの約定にて貯金なし居る人もあり或は休業は人の爲に炊事洗濯なさをなして貯金する人も多きよし斯の如く自ら苦しんで勉學する人多きが故に衣服の素なるも學問に熱心なるも道理ならめさ思はれ候米國の富は元より日本の比に非ざるもそれに準じて物價も高ければ、學資に苦む人の多きさころは少しも變るとなしさ存候たゝちがふ處は婦人の働き多く貯金の道を得るは吾が國よりいさ安きとに御座候小妹も平素安閑外人の補助をうくるといさ恥かしければ其の成否は保證しがたけれさ來る暑中休にはなにか一奮發して資金を得んさ企て居り候

度々敬愛する兄姉よりの御注意を受くるさころは米化せぬ樣にとの事なり或時はその胃語あまりにひろき故茫然さして意を得る能はざるの感も有之候併し先に歸鄉せし姉妹方の過ちし處また人の嫌忌をうけし處ろなどをみききしまゝ會得する所ある樣に思はれて意志の弱く信仰足らざる妹自からの力に恃む能はざれど思ふに神の御助兄姉の補助により前に姉等がふみ玉へし過ちには陷るまじと信じ居り候妹此地に在り日を追ふてます〳〵其風俗習慣の悉く日本に適當し難きを悟り申候只わが國にもかくありたしと思ふは家族の組織子女の教育のあまれき等なり銀のスプンや金のホックは羨ましからず杉わりばしにて妹等貧民を養ふにたるを知ればなり妹の願ふさころはわれ〳〵主による國の先導者たる者は銀のはしも杉わりにかゑ輕き絹衣も綿布にかへ國財家財不相應なる生計を斷ち獨立國の名に恥ぢず外國傳道會社の腦をわづらはさず獨立自知立派に宣教を試みて我が愛する日の本が光りの源となる事こそげに望ましと存し候愛兄よ數ふるに足らぬ小妹も明治の御代の信者の一人なり助け導きて十字の旗下に立たしめ給へ十字架の前に已れを殺さしめ玉へ世の名利のわなを脫せしめ玉へこれ妹が朝夕に森の木陰のいのりの句なり。

當地に參り候以來見聞するさころ大抵は新奇の事柄にて其風俗慣習の如きも三千里對岸の寡はしき孤島さは自ら異なりたるもの多く御座候なかにばわが日本のならはせこそむしましまらめさ思はるゝふしも御座候へどもまたこの國特長の美風もさより少なからずさ存ぜられ候まづ第一は婦人の働きにて至るさころの大商店にして婦人の手代なきもの少く學校教員等は多く婦人の務めさなり居り其ほか名高き書物をあらはし或は學位を持てる婦人も少なからず候又米國の父母は學術實業等其子女に適當したるものを擇び獨立の生計を營むるにたらしむる丈の教育を怠らず故に豊富の良家に生れたる子女も成年に及びて父母の膝下に坐食するをこよなき恥ぢ思惟するの風あり察するさころこれらの俗のこの國の富に及ぼす影響僅少ならざるべしさおもはれ候今小妹の春休中招かれ參り居候家は農家にて主人は日々二人の雇人さ畑にいで或は耕し或は牛馬を扱ふことのいかにも鄙遜なる有樣はほさんど日本の百姓さ變りたるさころなき樣なれど其以前はエール大學に修業せしとのことにて二人の妹も小妹の學校の卒業生にして母親もゐながらしき樣子あれど談話するさころ子女を勵ますさころなどは餘程學力ある婦人ならんさおもはるゝ所有之候概して農夫にても商人にても男子にても女子にても普通教育を受けざる人は甚た稀に見受けられ候母の教の子供に力ある事は申すまでもなけれど米人の智識のすゝみ居るも全く婦人の教育に歸するもの多かんさかんじ申候妹の愛姉に望むさころは日本に於て女子教育に反對する人のまどひをさかんために働き玉はんとなり日本にては女學校創立以來猶日淺されば其効能も目立たず甚た益なきものゝ樣なれど數十年も過行なば隨分見ざましき働も出來るならんさ思はれ候姉には愛孃をもち玉はれど母の如くに慕ひ居る孃達多ければこれらの人を勵まして一かどの働き人さなさしむるは隨分愛姉のために方ある働さ存候

さる冬は當地にて初めての寒ばらし故人々も案じ呉れられ候へ共家中は蒸氣にて暖め居り候故少しも寒さをかんじ不申寒中橇遊びも面白く御座候へし數週間前はワシントンの誕生日にて學校も終日休み其夜は四年生の催しにて講堂にてたのしき遊び會御座候多くの生徒は髮の毛を白くそめ老人のまれし殊にワシントン時代の髮をゆひきものむかし風にこしらへ又一人はワシントンの母さなり氏か戰爭にいでんさする時の教訓より留守中の有樣女丈夫の摸範を示したり其他多くの遊びありて十時頃閉會致し候

斯如き遊び度々なれど時をおしまるれば余り參り不申候先日は十字軍さ名けて諸方の教會をめぐり傳道致し居る一むれの青年來り申候三名の婦人さ四名の男子なりし彼等はキリストのために一生を捧げんさ決心し別に何處よりも月給を受くるにあらで最後の集會に於て寄附金をあつめそれをもて氣車賃さして所々を遍歷傳送するのみ其熱心にはかんじ申候數日間當地に滯在して家々をさひ弱き信者を起たしめ不信者を導きいつこにても余程たしかなる働きをなし居る由に御座候當校中にも不信者有之候妹の交友のうちにもまた一人御座候いかにかして彼を導かんさ祈居候不思議にも小妹入校後は數學科毎期同女さ同し組になりかつこの期は食台も同じく相成候へば同女史を導くの任おのれにある如くかんせられ候愛姉よ願くは妹がため祈り玉ふていづれにあるも信徒たるの責を全からしめ玉へ。

女報

可愛子編

●皇太后陛下の行啓　陛下は去る五月二十六日上野公園内日本美術協會へ行啓あらせられたり此の日　陛下には最も御熱心に御觀覽在らせられ、屢々巨細に御尋ねありしに付、下條正雄、前田健次郎、今村長賀の三氏より詳細說明を申上げたれば、最も御滿足の御氣色なりし、又御買上品は左の如くにして、同會へ御土產金として金百圓を下賜されたり、

御買上品

香箱(三十六圓)、手鉑(三十六圓五十錢)、香箱(十七圓)、七寶香合(九圓五十錢)、七寶花瓶(七圓)、合計百六圓。

●又　同陛下には、五月三十一日朝、別仕立の滊車にて鎌倉へ行啓あらせらる、北白川宮妃殿下は御隨行として御同行あらせられたり、午後六時新橋着にて御還啓。

●四女王殿下の歸邸　久邇宮榮子、絢子、素子、篤子の四女王殿下は、曩に奈良、大坂地方へ旅行中の處、去る二十三日京都へ御歸邸。

●有栖川妃殿下の御招待　婦人共立育兒會は會員千餘名に達し、益々盛大に赴けるが、五月廿七日午後總裁有栖川宮御息所殿下には、會員一同を霞ケ關御邸へ御招きありて、會頭鍋島侯爵夫人を始め會員無慮三百餘名參邸し、總裁殿下には會員一同に叮嚀なる御挨拶あり、終て茶菓の饗應あり、邸内を拜觀して午後四時三十分頃一同退散したりと聞けり。

●安生堂產院慈善會　本所横網町二丁目十四番地安生堂產院は、貧家の產婦を救助治療するの目的にて、從來紳士淑女の之に贊成するもの少からず、露國皇太子殿下よりも若干の金圓を贈與せられ、其他慈善踏舞會等の寄附金等もありしが、過日歌舞伎座を借受けて慈善會を開き、寄贈の物品を販賣し、又た其餘興として團洲一座の狂言を演ぜし由。

●大日本婦人衞生會　は每回第一土曜日開會せしが、過般は出席講師の通合により、去月八日午後一時より麴町區一番町十二番地保育園に於て例會を開き、盲啞學校長小西信八、醫學博士緒方正規二氏の演說ありたり、出席員大略三四十名。

●海外醜業者取締の建白　東京婦人矯風會は、風俗部の發議にて、海外醜業者取締の建白を爲す事に議決せり、右建白書を呈出するとに付き、過日湯淺はつ子、德富しづ子、及び竹越竹代の三氏は、兼て海外醜業者禁制の事に付き盡力ある田口卯吉、添田壽一氏を訪問し、種々注意を聽きたりと。

●琴曲合奏會　琴の名家山勢松韻氏の門人今井慶松子は、技藝秀抜既に師より奥儀を傳へられ、今般名弘めの爲め淺草鷗遊館に於て、來る十二日京濱間の紳士顯客を招待し盛なる琴曲の合奏會を催すとの由。

●香蘭女學校卒業式　は五月十三日執行せり、今回卒業せし三好とも子は、該校創立以來第一の卒業生なりと。

●看護婦卒業證書授與式　府下南豐島郡下澁谷村なる日本赤十字社病院に於ては、去る五月三十日午後三時、第一回、第二回看護婦生徒十九名の卒業證書授與式を舉行せり、右に付同社篤志者看護婦人會幹事長小松宮妃殿下、同副長北白川宮妃殿下、華頂宮郁子殿下、及び同社監督石黑軍醫總監、又前田、鍋島の兩侯爵夫人、小笠原伯爵夫人、其外婦人會員參會する者十數名、又同社役員には佐野社長、花房副長、鍋島常議員、清水幹事、橋本病院長、看護婦養成委員長三條治子、足立寬、同委員櫻井子爵夫人、花房夫人、同教員等の人々、孰れも式場に列せり、當日卒業生徒の人名は左記の如し、

第一回

竹中スヘ子　川村モト子　俊野イワ子
皆吉ナカ子　曾我鐙糸子　塚本トミ子　野村チヨ子
大越タマ子　川越タマ子　今井ワカ子　市川エイ子
貞末マキ子　青柳ナオ子　太田ナミ子

第二回

西澤ミチ子　淺井ウメ子　中村アイ子　高木ハル子　神藤タイ子

●明治女學校の地久節　五月二十八日、例の如く午前同校にては　皇后陛下御誕辰のために集會を開き、教頭巖本善治氏の談話ありたり。

●ミス、デピス氏　女子學院の教師なる同孃は、下谷日本基督教會の囑託に應じて、瀧口孃と共に、小兒の日曜學校のために盡力せらる。

●慈善看護婦會　は今度本郷區森川町一番地に起りたり、其主旨は醫師又は病家の依頼に應じて、看護婦幷に產婆を派出せしむるにありと。

●女子を伴ふて參觀するもの多し　近頃議員にして往々婦人を携へ議院を參觀に來たるもの多しとのことにて、日に二三名乃至五六名づゝもありて、衆議院は午後より開會にて差したることはなかるべきも、貴族院は恰も開會時刻、即ち十時前後、此連中に來られては自然院内取締上にも關することなきにしもあらず、甚だ迷惑の限りなりと某官人は語れり、と、六月二日の讀賣新聞に見ゆ。

●山梨縣甲府小學校教員の任命　去る五月三十一日内藤きよ子、守屋まつよ、橋本やほ子の三氏は、甲府尋常高等小學校訓導に拜命せりと。

●信州上田婦人協會　は全地基督信徒の婦人數十名を以て成立し、每週一日の勞働を寄附し、毛糸細工又は書翰袋其他裁縫等の仕事をなし、製造物品を貯ふること既に數十圓の價格に登る、而して之を慈善事業に支出す、故に同町信徒以外の妻女令孃等も之を聞き傳へて寄送品を爲すものありとぞ。

●工女の募集　横濱屑繭紡績會社にては、業務擴張の爲め、新潟縣下越後國魚沼、三島の各地方に於て、專ら工女雇入れに奔走中なるが、日給は十五錢の由にて應募者少なからずと云へり。

●越後婦女の買出　とは怪からぬ話しなれど、先頃横濱、東京、信州、福島、青森、北海道函館の各地方より、越後女の買出しに來りしもの二十餘人に及びしが

買出の方法は、娼妓鑑札の下付前に於て半年期の前借金を渡し、鑑札下付の上は殘半金を渡すの約束にて、東京地方は上玉三百圓、乃至二百圓（三ヶ年期）、信州は二百圓内外なり、殊に割合の宜しきは函館、青森等にて、此の買出金額の豫算一萬圓位なりさか、右の内十余名は已に仕入の約を整ひ夫々歸國したり、さ、新潟新聞は記載せり、慨歎何ぞ堪へん。

●婦人會を設置せんさす　三重縣津市上野町に於ては、近頃婦人會を設置せんさて、心ある人々の頻りに奔走せしも、其甲斐なく、暫く中止の姿なりしが、此度は某夫人の發起にて、婦人慈善會を設置せんさ、目下計畫中の由。

●神戸多聞教會少年會　は又々婦人傳道者小野安子を但馬出石に派遣せりさいふ、一昨年及び昨年の夏期中は覚りき子を遣りしが、今回は即ち第二の婦人傳道者なり、因に記す該地の教狀も稍進歩的に向へりさいふ。

●美人の醫者　今回京都に行ひし關西各府縣の醫術開業試驗には、五百有餘名の志願者あり、及第者は前期にて僅に五十四名、後期にて廿二名、齒科にて五名なりしが、岡山縣の東いは女（二十六年）は全科を及第して開業免許狀を得たり、仝女は容姿婦妍たる美人にして、殊に學術の優等なるこさ志願者數百の男子をして三舍を避けしめたる由（讀賣新聞）。

●女學別課設立　宮城縣仙臺市私立元寺小路高等尋常小學校にては、學齡外の女子に須要なる學術技藝を教授し、淑徳才藻の女子を養成せんさの目的にて別課を設立する由、當分生徒は五十名を以て一學級さし、小學訓導二名をして之を擔當せしめ、音樂及び外國書は、外國教師四名をして擔當せしむさ云ふ。

●紀州和歌山の正教婦人會　は小人數なれざ、會員皆熱心にて、毎水曜日には必らず出席し、二名づゝ巡番にて聖書及び聖人の傳記などを講話し、終りて質問會を催し居れりさ云ふ。

●山口高等女學校卒業式　私立山口高等女學校にては、本科第一回卒業生十人、手藝專修科第六回卒業生四人に、去る四月七日卒業證出を授與し、又卒業生の試驗品及び手藝品等を陳列し、翌日より三日間展覽會を開き衆庶の縱覽に供せしに、來觀者二千百二十九人ありたりさいふ。

●瓦礫中の双璧、星野姉妹　南高來郡深江村字池平星野某の長女秀、平素兩親に事ふる尤も孝順なり、今を距る四年前某大患に罹り半身不隨さなる、秀晝夜傍に侍して之に事へ看護百方醫に就て其療法を問ひ、聞くさして之を行はざるこさなし、然れざも病魔執拗更に其効を見ず、秀痛哭長歎自から村社に訴願し爲めに朝食を斷ち毎夜深更社邊の河流に全身を洗ひ、以て母の本復を祈る、風雨寒暑、敢て之を廢せず以て今日に至る、四年一日の如く隣り、隣保其孝を稱せざるものなし、鄕人始め秀の祈願を知らざるに當てや、或は社邊の河流深更妖怪現出すさ傳へ或は狐狸の所爲さず、一夜壯夫二三相謀り梶棒を携へて河邊の樹陰に隱れ、以て其實を窺ふ、深更人跡絕へて犬吠遠く聞へ、小星三五輝々さして四面寥々たるのさき、履聲遙に聞へて一婦人の河邊に來るあり、合掌默拜するこさ數時、衣裳を解て全身河水を被ふる亦數時次で再び衣裳を襲け徐々さして社頭に向て去らんさす、壯夫忽ち躍り出て特に之を拿捕せんさす、女歔欷して曰はく妾は妖怪の類に非ず請ふ之を許せさ、壯夫其名を誰何す、女曰く妾は此村に住するもの、星野某の長女秀さ呼ぶ、母の宿痾本復を祈り當社に祈願し毎宵全身を此河に淸むさ、是れより村内の聲譽益盛なりさ雖ども秀却て謙讓し、自から孝の足らざるを歎き、熱心祈願の志益堅く今日に至るも敢て一日を怠る事なしさ云ふ、秀一妹あり芳さ呼ぶ、日夕訓戒して孝順を勵まし、共に家政を整理す、毎春蠶種七枚を飼養して家計を助け、更に兩親をして顧みる處なからしむさ云ふ、秀今年二十七才、芳十二才、瓦礫中の双璧さ云ふ可し乃ち特に掲げて世に其孝を彰表す。（鎭西日報）。

●鹿兒島縣下に於ける就學女兒　昨二十四年末、鹿兒島縣下に於ける就學兒童の數六万四千百八十六人の内、男兒五万五千六百八十七人にして、女兒は僅かに八千四百九十九人なりさいふ、甚しき相違なるかな。

●函館に於ける正教會女徒親睦會の十年期　我日本各地の正教女徒親睦會にて、創立の逸早きは函館女徒親睦會の由にて、本年は其創立の十年期なりさて、函館ゝ露館内にて盛なる會を開きたりさ、同會は是迄天變地災疾病其他の不幸に罹める者あれば顧みて其人を慰め、祈禱に參拜せざる者あれば勵まし、不和あれば和睦の勞を執るなど其功少なからず、又月々に白米若干を函館市内の貧人に惠みたるともありさいふ。

●柳原遊廓の全燒　堤川を隔てたる遊廓柳原は全たく燒失烏有に歸しぬ、今ま左に燒失せる戸數の概畧調を記さんに、堤町八十四戸（借家寄留未詳）、博勞町、松森町、本戸數三十二戸、古茶屋町本戸數三十戸（借家寄留未詳）、柳原（巡查駐在所共）四十三戸、總計殆ど貳百十有余軒にして、内半燒せる者三戸なりさ、北海道新聞に見ゆ、國民よ、ソドム、ゴモラの昔を思へ、何ぞ爾が迷夢を一覺せざる。

●密賣淫撲滅策　五月二十七日の上毛新聞は之が論ぜり、其方法たるや、矯風同盟會を設くべしさいふにあり、其規約案なるものを左に載す、

（一）一市町村の區域内に於て有志者を集め一區域内必らず一の矯風同盟會を組織する事

（一）會員には有志者のみならず可成其の市町村の人民を擧げて加入せしむる事

（一）會員は密娼の嫌あるものを宿泊せしめ若くは雇人等の事を爲さゞる事

（一）會員は密娼の嫌あるものを宿泊せしめ若くは雇入置くものには地所、家屋等を貸與、讓渡、賣渡するとを爲さゞるべし

（一）會員は右の所爲あるもの若し其區内にあるさきは懇篤に勸告して之を廢止せしむるとを務むべし

（一）會員は再三勸告して尙從はざるものは之さ對等の交際を爲さゞる事

而して之を行ふは、其人に在りさ結論せり、吾人は地方の新聞紙が追々さ道德、教育、矯風等の問題を論ずるを見て、深く心に喜ぶ。

●靜岡通信

◎五月廿八日は皇后陛下の御誕辰につき、靜岡尋常師範學校女子部生徒及附屬小

學校に於て祝賀の式を擧行す。

●京都通信

◎同志社本年度の卒業生　は九十三名なり、之を類別すれば、別課神學校（十八名）普通學校（四十三名）女學校（十七名）看病婦學校（九名）。

◎山城國紀伊郡には、從來伏見に一の高等小學あるのみにて、尋常小學校卒業の女生徒は通學の便惡しく、北部にては入學せるもの少なかりしが、此度北部に城南高等小學校開かれ、高等小學の教育を受けるの便さなれり、去月廿八日開校式を擧られたり。

◎六月二日、京師尋常師範校の創立紀念會を開かれ、卒業生男女百餘名來會あり、引續きて同窓會を開き、實に盛大なりき。

●三重縣通信

◎永井よし子女史　同女史は松坂町の豪家さして茶人さして聞え高き永井同玄齋氏の妻君にして、若き頃より夫なる人の茶道に心をよせ、東京西京大坂などを遊歷し、三、千家を初め、藪の內、堀の內諸先輩さ交りそが奥義を極むるにも、必ず良人に附從しければ、夫妻さもに此道の眞味を樂めり、又よし子は糸竹の道にも達し、且敷島の道にも通じたれば、その派に於ても常に稱し居りしが、去月廿二日松坂天神の茶會後、圖らず病床に臥し、終に六十六歲を一期さして逝逝せられぬ惜むべし。

◎四日市婦人會　同會はこれ迄兎角美服を粧ふの風習あるを以て、例會の節に出席する人いさ少きにより、心ある人は憂へ居りしが、この度會員には例會に出席する節は必ず綿服を着用すべしさいふ一の規約を結びしにより、本月の例會には出席會員殊の外多かりしさいふ。

◎根本貞路女史壽碑　一志郡の根本貞路女史は一方ならぬ盡力を教育上になせし人故、そが効勞を長久に傳へんため、一の壽碑を建設せんさて、有志者は其の撰文を渡邊碩也氏に請ひ、揮毫を伊東代議士に乞ひし處、この程落成したれば、いよ〳〵協議の上結城神社の民有地に建設するよし。

◎溫故堂產科私學校　同校にては看護婦甲種十名乙種十名、本縣免許產婆二十名、內務省免許十名、貸費五名、開業產婆にて手術研究のもの五名を、目下募集中。

◎賤業を營まんさするもの減少す　昨年冬より本年に掛け、米價の安からざるさ麥作の惡からざるより、何さなく縣下の農家一般緩るまるを以て農家の若者などの花街に足を入るゝ多く、隨て縣下の五花街も可なりの繁昌なれば、定めし新規營業者を增加するならんさは、矯風に志す者の竊に憂さする所なりしが其結果たる意外にて、孰れの遊廓に於ても新規營業出願甚だ稀なるよし、是は畢竟農家の豐なる故さはいへ、又一方には近來三重紡績會社始め縣下の各ハンカチーフ裁縫等に於て、絕へず女工を募集するより、此處に雇はれ行けば、自己の活路は勿論尙幾分か家計の助をもなし得る事ゆへ、自ら好んで娼婦たらんさするお轉婆にあらずんば、娼妓などゝなるものなきに至りしさは、誠に喜ぶべき現象なりさ、某官吏は物語れり。

●仙臺通信

◎產婆開業　仙臺市第二回產婆講習所の卒業生、石川もと子（二十五年）、笹川こま子（二十三年）、小々高たけまつ（二十年）、大內こはる（十九年）、庄子うさし（三十年）の五名は、今回開業を出願せり。

◎看護婦人會　は五月十五日午后一時より仙臺東一番町本願寺別院にて開會す、來會したるもの講師、木村、茂木、菅野の三軍醫正、守住軍醫を始め、會員三十餘名、宮城縣書記官本部泰氏は高橋屬を從へ臨席されたり、先繃帶の溫習をなし、次に血液の循環に付て談話あり、午后三時半退會せり、本部書記官には會員諸氏の熱心勉强なるを賞讃せれらたりさ云ふ。

◎女學生の奮發、一郷の龜鑑　福島縣地方は從來教育不振にして、女生徒の遊學思も寄らぬ事なるに、此程同地の女生徒四名は一大奮發をなし、當市宮城女學校に入學し、素志を貫んさて日夜勉强中なりさ、爲に同地の教育無頓着なる父兄の目を覺ませりさ云ふ。

◎女學校新設の計畫　仙臺市に女學校なきに非ずさ雖、其首なる者は皆宗教擴張の目的を以て設立せられたる者にして、國家主義の者なしさて、羽生正氏は一の女學校を設立せんさ、昨今奔走中也。

◎同窓會の養蠶　仙臺市東二番町小學校女子同窓會本年の蠶業は、大立目謙吾氏の蠶室にて飼養するとさなりしが、去月十日午后二時を以て掃立（此蠶兒四匁三分）しに、昨年に勝りて良好なりさ云ふ、目下該會員は、三四交互教育に從事し居れり、因に用ふ、該蠶種は宮城縣伊具郡角田小學校生徒鈴木さつ子の寄贈に係るさいふ。

●朝鮮國元山に於る西陣織　元山に於る西陣織は、昨年初めて輸入せしものにして、大幅中幅小幅の三種あり、長さ各鯨尺九尺なり、元來該品は綾紋ありて女帶地に仕立たるものなれども、見掛け甚だ奇麗にして其價廉なるを以て、輸入以來絕へず賣れ行けり、使用は重もに腕貫き、巾着及襦袢等に供するものにて、將來益々輸入增加の見込ありさ云ふ。

●支那福州の鬧教事件　四月二十七日福建省政和縣に設け在る英國某教會の禮拜堂に對ひ、地方の無賴漢を煽動して妨害をなす者あり、該堂は縣署を距る僅に一里に足らざる場所に在れば、宣教師は直に人を縣署に走らしめ其の暴狀を急報せしも、官吏直に之れに應ぜず、匪徒は亂暴狼藉を極め、堂前に掛けたる上年夏間の諭旨を焚毀し、進で會堂に亂入し手當り次第に家屋器具等を破毀し、火を放て會堂を焚き、宣教師等を捕へて罵詈暴行を極め居りしが、官吏の出張に遇ひ、二人の女教師は僅に其の保護に由て轎を雇ひ城內の衙門に送らるゝを得たり、翌日匪徒は署前に群集し、喧騷惡罵して官吏に女教師を城より出さんとを逼りければ、女教師は縣署の保護恃むに足らざるを知り、城を逃れ出でけるに、幸に該堂に關係ある親切なる支那人有り、幸に無事なるを得たりさ。

●ダホメーの娘子軍
亞弗利加ダホメーの娘子軍は、其の起原頗る古く、同國陸軍中の要部を占むる者なりとぞ、抑もダホメーの地たるや、西亞弗利加の一州にして、ギユニヤ灣に沿ひ、其の海岸は長サ三十五哩、全國の人口二十万に過ぎず、されども其の國力はアッシヤンチーに次ぐの國にして、首都アボシーは、海岸を去る七十五哩の所にあり、其の周圍は八哩にして、人口僅に一万二千なり、而して娘子軍は遠く千七百二十九年に起りたる者なり、當時に於ては嚴然たる一軍隊にあらず、初め某の戰に於て其の軍數の少なるがため、婦人に軍裝をなさしめて以て僞兵を張り敵を威嚇せんと圖りしに、其の計當を得て大に敵を惱したるより、婦人も亦軍人たるを得べきを曉り、遂に之を軍隊に編入するに至り、其の後ギゾー王に至り、大に娘子軍を擴張し操練をなし、以て兵士たるの資格を養成し、降りて今王ベヘンヂンに至り、佛國と戰を開くの必要あるがため、再び其の兵數を二倍したれば、今やダホメーは六千以上の娘子軍を有するに至りたり、而して此の娘子軍の勇氣は男子に優ることあるも決して劣ることあらず、千八百九十年ポルトノボに於て、佛軍と戰を開きたる時、見事に佛軍を蹂躙せしを以て證するに足るなり、是れ蓋し勇氣養成法の然らしむる者ならむか、抑も全國に於ては兵士の出陣に先て、數十人を殺して犧牲を軍神に供し、神前に於て數千の敵を斬殺して再び神を祭るべきことを誓ふの例なり、且婦人にして卑怯なる擧動をなし、或は操練を怠るときは、之を斬殺するによる者ならむ、而して其軀幹は長大にして、其身躰は健全なりと雖、其の容貌決して獰惡ならず、されども其の精神は決して婦人的ならず、其の兇暴殘忍なる野蠻男子より優ること數等なり、敵と戰ひて之に勝つや、彼等は其の面皮を剝ぎ、其耳を殺ぎて功名の證となし、又敵人の血を啜り、或は其の血を以て銃及身躰に塗り、或は血を以て彼が殺傷せし敵の何人なるやを銃臺に記す、其殘忍なる殆ど人間と思はれざるなり、而して常には口裝銃を携ふと雖も、時に毒箭を射ることあり、其の衣服としては同國產の布を以て製したる藍及白色の長衣なり、而して其の容貌の美なる者は、王の妾となりて王宮に起居し、王の寵を蒙らざる者は兵士となりて兵營に起居し、老年に至れば王宮の侍婢となり、或は兵營の從者となり、常には溫和の如くなれども、一旦戰に臨むや、暴虎馮河進むありて退くを知らず、彼等が亞弗利加に於けるの地位は、スパルタ人の希臘に於けるが如く、オールド、ガアードのナポレチンに於けるが如くなりと云ふ。(每日新聞)。



●瑞士ツーリッチ　には米國の女學生五人あり。

●巴里諸專門學校　に於て專門の學を修むる婦人の數は、千八百九十年に於て百五十二人なりしも、現今は二百五十二人に至れり、其內醫學校に於て醫學を修するものは佛人十八人、英人六人、ローマニヤ人三人、土耳古人二人、希臘人一人、露國人百三人以上なり。

●戰餘の老媼　巴里にポリユーと云へる老媼あり、先日行商の免許を得たる由、今此老媼の履歷を聞くに、此女は獨佛の戰爭未だ其の端を開かざるの以前に當て、頗る富裕の生活を爲し居たるものなりしが、夫の戰爭の破裂したるに及んでは、愛國の熱情制すること能はず、身を軍中に投じて戰時行商婦となり、最も激烈なる八回の戰爭に、九死一生の危險を冒して、負傷したる佛軍の兵卒數百人を看護し、且つ此等の兵卒の爲めには數千弗の私財を費し、シヤンペインの戰に於ては自ら砲擊せられて其左腕を失ひ、其後間諜の嫌疑を受けて捕獲せられたるも、其胆力の壯んなりしとて敵將の爲めに宥赦せられ、僅かに其生命を全くしたる程の功勞ありしが爲め、其當時に於て一の勳章を受領せり、其後は久しく何の爲すこともなくして貧窮の生活を爲し、勞働者をして每日の服役時間を失はざらしむるが爲め、每朝勞働者の眼を醒し廻るを以て僅かに糊口の資と爲し居たるも、今回前記の免許を得て其生活を營むものなりと云へり、國を愛するの佛國人たる者は、此の老媼の爲めに一臂を添ゆることなくして豈に夫れ可ならんや。(日本)。

●不思議の法律　千五百二十八年蘇格蘭土の國會に於ては男子に建言するを得るの權を婦人に許與するの法律を可決したり。

●ペンシルバニヤの齒科專門學校　に於て近頃九人の婦人卒業せり其の中ウァヂニヤのヘーレー孃はウイリアムソン校の教授に任ぜられたり。

●米國中男女教師に同等の給料　を給する所唯ワイチミングの一州のみ。

●加那太の紅裙隊　亞弗利加ダホメーに娘軍あることは別項に記す所なるが、今回加那太に於ても婦人砲兵隊を編制したり、蓋し此の砲兵隊はクエベック市のダアンバアー孃の編制せし者にして、同市の少女四百人より成る者なり、されば操練を見むとて集ひ來る人多く、操練觀覽券はなかなかに得難しと云ふ(每日新聞)。



孤兒之友

左の一編は、在同志社山室軍兵君が寄贈に係るものにして、一讀價値あることを覺ゆ。石井十次君が同志社病院に入院せられて日久し、君が治療中も尚ほ孤兒を思ひ給ふの深き、又孤兒が君を否な彼等が慈父を慕ふの切なる、嗚呼吾人自問し來れば、瞑默一思凝りて君が溫容に接して藹々語るが如し今や病癒て故山に歸る、君に謝せむと切に、亦君が同志者の爲に健康を祈り、且つ孤兒の爲めに讃美すべし。

藤井米八郎識す

同志社病院に於ける石井十次君

山室軍兵

石井十次君同志社病院にあること四週去る三十日病稍癒るの故を以て一先つ岡山に向ふて歸らる

君入院するの後數日余に語て曰、僕深夜屢々目醒む四鄰寂邃頗る默想に宜し

一日又余に告て曰昨夜僕夢に我孤兒院の一炭礦を某の海濱に得、衆多の孤兒之を採掘すると同時に、海上にも亦我孤兒司る所の汽船ありて直に載せて之を遠國に運ぶを見たり、蓋し日夜想像希圖する所の覺えず夢中に現せしなり　、因て孤兒院に關する將來の希望など語り出らる、夫れ基督教は來り聽けよと云はずして來り觀よと云ふべき宗教にあらずや、余は此時切に君が此等の希望の一日も早く我國に成就し、大に來觀よ底の宗教が光りを天下に放つに至らんことを願ひ「それに付けても肉體は成るべく大切になし玉はざるべからず」と云ひしに、君は答て然り、最早今後は容易に死に瀕する如きことはなかるべし、曩きに屢々出血するごとに因て苦みし時の如きは到底餘命三年には越えずと覺悟し居たり云々

一日余が平生愛讀せる鴻鵠志、淸狂詩稿（二書共に吉田松陰の編する所）など攜行きて、君に示せしに君は言へり嘗て東京にあり切に吉田松陰一流の氣風を慕ひ多く彼の詩文など集め居たることありしが後、故鄕日向に歸りし際、計らずも當路者等の僕が言行自ら慷慨の風を帶び來りしことを注目し、遂に國事犯の嫌疑を以て暫く拘留するに遇ひしことあり云々と、浮田和民君嘗て我先師を評して曰、新島先生は吉田松陰の受洗したる者なりと、何ぞ計らん我石井君も亦實に此種の人にてありしならんとは

一日君の病大に宜し即ち手を携えて御園の邊を漫歩す、行々余語て某の事に及び切に當今基督敎徒の冷淡なるを慨す、君靜に余に告て曰、僕平生深く彼のすゐ風呂のとに感ず、若しすゑ風呂の一隅に小さき炭火の只一つだも存する間は全風呂の水決して全くは其溫度を失はずと、

日々岡山、名古屋の兩孤兒院より端書もて其日の出來事を報告し來る、君は病床にありて獨り爲に祈り、又た企つる所あり今其端書一葉宛を寫して左に掲ぐ、又た兩院目下の狀を詳にするを得べきが爲なり、

明治二十五年五月二十日分報告

理髮部

一金十八錢六厘

印刷部

一孤兒院報告書摺りました

裁寸部

一金壹圓拾八錢八厘（各組工料）今日は一噸餘出來ました

開業後今日迄五日間の出來高三噸六分　代價四十六圓八十錢

但一噸の代價十三圓と見積り

參工部

一三十三丈一尺六寸（一本八分）十七人

右及御報告候也

岡山孤兒院

京都同志社病院

石井十次樣

五月十七日報告書

就業者　三十五名

日小計　二百〇八枚（ハンカチーフノ口）

工料　四十一錢六厘

本日十枚以上の者四名にて最多數者は宮本キノサンナリ

右之通に御座候

昨御報告申上し後寄附金壹圓有之候間左樣御承知被下度候也右御報告申上候也

震災孤兒院内

加藤六太郎

京都市同志社病院にて

石井十次樣

（以下次回）

小橋勝之助君

播州明石に於て暫時止まり、病痾を醫せし君、彌々本月四日同地を發して神戸に來られ、夫より順路各所に立寄り、東上せらる希は君を知る人君のために祈り給へ。

大坂救兒院

同院は聖約翰婦人會の附屬にして、全く婦人の手にて成れり。目下拾數名の男女孤兒を慈育したまへり、此頃同院の規則を得たるも、紙面の都合により之を次回に掲ぐべし。

孤女學院報告

第四月中寄附金

金三拾錢	王子村	小寺氏
金壹圓	築地傳道女館	中川關子
金廿錢		無名氏
金卅錢		高亙子
金五錢		星野氏
金壹圓	明治女學校教師	齋藤音作氏
金壹圓	仝	愛乃睦會
金廿錢		無名氏
金壹圓		渡邊澤次郎氏
金拾圓		松本婦人會
金五圓	橫濱	無名氏
金八錢	小學生徒	無名二氏
金壹圓		婦人老人會
金壹圓	瀧布	寺尾氏（老人會）
金卅錢		高亙子
金廿錢	老人會	小田川氏
金五十錢	明治女學校	宮島、日高、松澤、村瀨、伏見諸氏
金四十錢	老人會	草野氏
金五十錢	慶應義塾	志知宇三郎氏

合計　金廿四圓三錢

四月中決算表

●收入

金五百二拾六圓九十三錢一厘　合計

內譯

金二拾四圓〇三錢　四月中寄附金高

金五百〇二圓九拾錢〇一厘　孤女學院所有高

●仕拂

金四百六拾九圓七拾八錢八厘　合計

內譯

金四圓	屋賃
金七圓六錢	炭薪其他八百屋物
金四圓	職業部費用
金四百拾五圓六拾五錢九厘	建築費
金二圓四拾九錢	器具代
金七圓四拾錢五厘	垣根用植木代
金拾貳圓	米四俵
金五圓七拾四錢四厘	教育用具
金三拾錢	新聞代
金拾圓	給料　三四月分乳母其他
金六拾三錢	藥舖拂
金五拾錢	郵稅

差引殘金高金五拾七圓拾四錢三厘

●四月中物品寄附

衣類廿八枚其他雜品		牧カチ子
シメシ廿七個	王子村	小寺氏
石盤硯各六十餘		明治女學校
草紙古筆類其他　習字手本十六		
教場用机五十脚		女子學院
單衣壹枚	明治女學校	無名氏
筆、草紙、帳簿類	明治女學校	愛之睦會
衣類十二枚		松村氏
單衣一枚		星野氏
額一面草紙類	明治女學校	有志者
教場塗板壹個	立教女學校	林歌子
女學雜誌每週		女學雜誌社

道　銀の紐は解け金の盞は砕け吊瓶は泉の側に壞れ轆轤は井の傍に破れ、
の　而して塵は本のごとくに土に皈り靈魂はこれを賦けし神にかへるべ
書　し。

第拾六號目次

早稻田文學定價

一壹部	金九錢	郵稅二錢
一六部	金五拾壹錢	仝十二錢
一拾二部	金九拾六錢	仝二十四錢
一廿四部	金壹圓八拾錢	仝四十八錢

仝　廣告料

一五號活字二十三字詰何行ニテモ一行ニ付金七錢

但シ學校書籍新聞雜誌ノ廣告ニ限ル

第三高等中學教諭田村初太郎君序
成瀬仁藏君著

第三版 増補

婦女子の職務

定價十錢 郵税二錢

成瀬先生の女子教育に熱心にして且熟練なるは普く諸君の知らるゝ處なり本書は第三章に分ち第一章に婦人の眞價直は如何なるものか且如何にして之れを得らるるや云々第二章には我國女子教育の弊習を説破し今後女子教育の方針を説明せらる第三章家庭順逆の源は婚姻にあり故に輕々敷行ふべからざる理由且良夫を撰ふの方法より良夫に從ふべきと其他婦人に緊要なる事柄を列記せらる本書は文單にして意盡せり諸婦人の解し易きを旨とし委く傍訓を以てす苟も心ある婦人諸氏は老若の分ちなく愛讀を賜へ裨益する所少々あらさるべし

米國女敎師ダッレー氏著

育幼草（こそだてぐさ）

前後合本 定價貳拾錢 郵税四拾錢

本書は前編に母親たるものか其子によき習慣をつけ心術を正しくすることのたいせつなる理由と其方法を子細に述べ後編にいたりて身躰のそだてかたの最肝要にして母親たるものは細々も心を用ひ健康に成長するやうにせねばならぬ理由と其攝生法を詳細に説明あり

エチ、チー、ローヅ氏著
星野光多氏序

信仰の事實

定價拾貳錢 郵税二錢

星野君序文中に曰

世に名高き作者が困膽して著はせる稗史を讀に。その人情を寫し。世態を描きた所ろ。如何にも感心いたしますが。併し彼の冥々の裡に人間萬事を統制し給ふ上帝が。攝理てふ神筆を以て記し玉へる實際の歴史幷に目前の事實を目撃しましてからは。如何なる小説も蟬の脱衣と同じこと。見るの價値はござりません。聖書の非常なる感化力はその中に高尚卓絶なる教義が多く示されてあるがためのみならず。新約にも舊約にも多く實際の事實や人物の事が記されてあるからであります。實事は議論の及はざる勢力を有して。千言萬語の空論は。その人心に貫徹する感化力に於て。たゞ一個の實事に及はざるものでござります。此書は信仰上の事實を記せるものであつて。此等の談話を玩味し。その中に含まれ。また證明せられたる事柄。即ち人力以上の力。理屈以上の秘義等に注目せられなば。信仰上益する所ろ多かるべし云々大方の諸君乞ふ一讀の榮を賜へ

發兌所 大坂西區土佐堀 福音社 東京市新橋出雲町一番 警醒社書店

生徒募集廣告

本月廿日午前九時入校並ニ上級編入試驗執行ス志願者ハ前日迄ニ申込有之度候

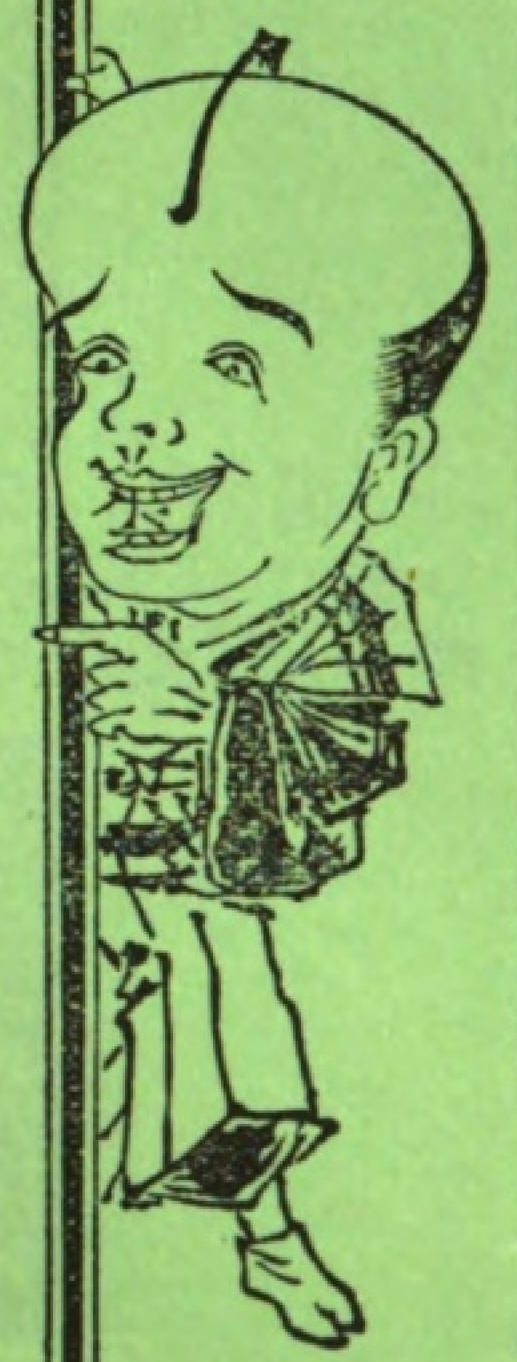
政治科 邦語一年二年前期 英語一年前期
司法科 邦語一年二年前期
行政科 邦語一年二年前期
英語文學科 一年前期
專修英語科 二年三年前期

規則書ハ通知次第送致ス

廿五年六月

牛込早稲田 私立 東京專門學校

イヨー…………別品の玉そろいダワイ



○玉掌露（ぎよくしやうろ）

一名玉のはだ　大瓶金拾錢　小瓶金六錢

抑この玉掌露は玉の如く透明にして中に香氣を含み皮膚を潤し艶を生する効能ある故に人々常に此露を手掌にたらし面部其外にぬりつくれは○のほせることなし○はだあれず○日にやけることなし○きめこまやかになり白粉のなしみよく○にきび○そばかす○あせも○づさう其外総て悪きふきでものせす○しみを生することなく又寒氣風あらき時は此露を常より多く用ふれば水つかひするとも○ひゞきれず○しもやけせず四季ともに皮膚の艶美をたもつこと誠に無類佳品にして實に掌中の實玉と云ふべし殊に三能しやぼんお遣の跡にてお用ゐれは尤も効能多し



きめこまかになる



笠原堂謹製　壹個　金壹錢五厘

此玉子ぬかは御婦人方つねに御用ひのぬかへ藥を加へ玉子にてねりたるものにて御用ひの節はゆにても水にてもしめし手のひらにすりおとし其手にて程よくはだにすりこみ手ぬくひにてあらひ給ふべしおしろいのゝる事妙なり但しおつかひのあとは紅糸の所をかけさほ又は柱へかけおきいくたびもおつかひなされべし此玉にぬか一ッにて十日位ひお用ひ相成候御徳用第一のぬかなり



懷中良藥

たまかつら

一名上等づゝうこう　紙製一錢五厘

主治○づゝう○はのいたみ○うちみ○きりきず○ひゞしもやけ○やけど○りようまちす○其外諸々の痛所等によし殊に阿娘の頭痛に腦める律液を以て痛所へ用ゆれは即効を顯し暗に清香を發し宛も桃花の朝に露を賤き牡丹の夕に雨を過せるか如く自ら美人の粧を作す實に奇製の良藥也願は四方の諸彦御愛求あらんとを

○元祖色白くなる三能しやぼん　壹個金拾錢

髮のこやし毛のはへる香油一名美人かつら　大瓶卅錢中瓶廿錢小瓶十錢

日本一おしろいいらす白妙一名小町のつや　大瓶廿錢　小瓶十錢

東京銀座壹丁目つやふきん本家

發賣元　佐々木玄兵衞　電話番號四百七十二

特約大勉強賣捌

下谷池の端仲町寶丹本舗守田治兵衞○車坂町さくら香本家堺屋重兵衞○淺草駒形町おなじみ小間物店中島百助○兩國廣小路米澤町五臟圓本舗大木口哲○村松町寶丹水本舗岩涙長造○元大坂町清婦湯本舗高木與兵衞○日本橋瀬戸物町玉のつや本舗玉置金八○馬喰町一丁目小町水本鋪平尾贅平○十軒店本石町藥舗森谷萬次郎○四ッ谷傳馬町小物店山形屋定次郎○芝神明烏居前藥舗岩本新兵衞○新幸町花いかた柳屋

鈴木弘恭大人講述　附錄小倉てびき

第四版 百人一首講義

正價金廿八錢　郵税四錢

御高評を得たる百人一首注文いよ〳〵多く第三版品切に成りたれば茲に第四版を印行し、且つ「小倉てびき」と云ふ、極めて便利の見出を添ゆ、之によりて、百人一首それ〳〵の歌の句の在り處、意味、よみ手などを直ちに見出すことを得る至極重寶なり。

發兌元　東京麹町區下六番町六番地　女學雜誌社

第四回夏期學校

開校時日　七月十六日ヨリ十二日間箱根驛ニ於テ

校費　金三拾錢

滯在費　一日　金拾七錢

入校申込　東京英和學校内　田中儀三郎宛

日本鐵道會社、日本郵船會社、兩毛鐵道會社（照會中）割引切符ヲ要スル諸君ハ學校又ハ教會ノ證明書ニ郵税二錢ヲ添ヘテ田中儀三郎宛申込アルベシ

寄附金ハ福音新報社、警醒社、護教社又は東京明治學院内小倉修吉宛御送附ヲ乞フ

子宮神藥

一日分 金拾錢　三日分 金廿五錢　十日分 金六十錢

子宮病より發する下腹痛。胸痛頭痛。眩暈。立くらみ氣鬱。疳氣募り故なく悲しく涙出物事氣にかゝりて眠れず俗に疳と血の道と云ふ病には服藥して必らず治す又白血。長血。月經痛。或は産前産後の病に即効あり小兒欲き人は早く用ゆべし

貴芳水

大壜 十錢　小壜 五錢

色を白くし肌膚を緻密にし顔手足の艶を光澤するの一大特効藥にして貴婦人かたの白粉下に用ゆれば白粉鉛毒を防くの藥力ありされば。ひゞ。あかぎれ。しもやけ。は一夜にて不思議の効を奏す常に用ゆれば汗疹。彩刺そばかす。たゞれ等の患ひなし此貴女の水は貴婦人慈善會に於て畏くも　皇后陛下御買上の榮を得たり

東京四谷傳馬町一丁目十七番地

本舗　永田義原

特別賣捌店

東京上槙町 安川榮次郎
同松村町 岩涙長藏
同兩國廣小路 大木口哲
同瀨戸物町 玉岡金八
同本石町四、 森谷萬二郎
同四谷御門外 大枝灰吹屋
同麹町十三丁目 中島甚助
同所 河合治兵衛
同麹町六丁目 中村又兵衛

神田小川町 伊澤弘芳
坂本町角 德田多助
芝神明前 岩本新兵衛
牛込築土八幡町 尾澤良助
牛込宮比町 尾澤豐太郎
本鄉五丁目 高島文藏
淺草菊屋橋 山田清兵衛
本所元町 林忠藏
銀座一丁目 佐々木支兵衛

大阪四橋南詰 本林丁子屋
同堂島蜆橋 高橋盛大堂
下谷御徒士町 中島百之助
深川富岡門前 小池佐兵衛
赤城一ツ木町 伊藤吉兵衛
淺草西鳥越三 山田鶴吉

女學雜誌社發賣書籍目錄

書名	著者	冊數	正價	郵税
文法口授	鈴木弘恭大人述	全	金拾二錢	金二錢
邦文學	松山高吉君著	全	金二拾錢	無
雅俗諸體作文口授	鈴木弘恭大人述	全	金二拾五錢	金四錢
徒然草講義	同 講述	一	金八錢	金二錢
淺瀨の波	池袋清風大人著	二册	金三拾錢	金四錢
日本女子讀本初步	吉田利行君著	二册	金二拾四錢	金四錢
日本女子讀本	同 著	三册	金三拾六錢	金六錢
明治女小學躾草	松山敏足君著述	上下	金四拾錢	金六錢
記事祝文女子文例	香月恕經君著	全	金二拾二錢	金四錢
婚姻論	横山雅男君著	全	金十六錢	金四錢
産婦小兒攝生法	船越鼎太郎君著	全	金十錢	金二錢
母のつとめ	三島通良君著	母の巻 子の巻	金七十錢	金六錢
兒育草	女學雜誌社編輯	全	金二拾錢	無
女子生理	同 編輯	全	金二十五錢	無
西洋女禮	同 編輯	全	金十二錢	無
子供のはなし	同 編輯	全	金五錢	金二錢
家政要旨	村木經策君述	全	金五錢	金二錢
束髪案内	渡邊鼎君著	全	金五錢	金二錢
女學叢書 木村鐙子傳	巖本善治君著	全	金八錢	金二錢
貧兒の教育	安東松治郎君著	全	金六錢	金二錢
訓蒙絵双紙 猫と鼠	井上藤平君編	全	金五錢	金二錢
植物學	寺尾熊二君著	全	金十錢	金二錢
演説著作 材料新誌	女學雜誌社編輯	全	金三十二錢	金四錢
倫理之基	對嶽逸人述	全	金二錢	金二錢
妓樓全廢	巖本善治君著	全	金四錢	金二錢
公娼可滅	島田三郎巖本善治同著	全	金四錢	金二錢
廢娼演説	島田三郎植木枝盛同著	全	金五錢	金二錢

女學雜誌大取次所

東京市本町三丁目	瑞穗屋卯三郎
同　錦町二丁目	武藏屋藤藏
同　尾張町二丁目	東海堂
同　彌左衛門町	巖々堂
同　表神保町	東京堂
同　出雲町	警醒社
同　鐵砲町	指金堂
同　元富士町	盛春堂
同　雉子町	開々社
神奈川縣橫濱市	共同新聞發賣會社
同	万字堂
京都佛光寺烏丸	東枝律書店
同　新町竹尾町	便利堂
大坂本町四丁目	岡島支店
同	福音社
神戸元町四丁目	福音社
函館市	福音社
熊本縣熊本	草野門平

女學雜誌市內賣捌店

麹町區上六番町	日盛堂
同　三番町	梅仙堂
同	福音舍
同　飯田町	三文字屋
同	洗心堂
同　神保町	松江堂
同	青柳堂
同　雉子町	大塚書籍店
牛込區神樂町	積々堂
同	正導舍
同　肴町	深田彌兵衛
本郷區弓町	文字堂
同	就本堂
同　富士前町	開明堂
同	盛春堂
本鄉區二丁目	吉河屋
下谷區東黑門町	三一堂
神田區松岡町	山口次郎
同　旅籠町一丁目	櫻本
同　鍋町	清水嘉兵衛
日本橋區本町三丁目	庭花堂
芝區櫻田本郷町	鈴木新兵衛
同　南佐久間町	栗原
同　同	鈴木
赤坂區新町	赤川市兵衛
京橋區尾張町	鈴々木
同　出雲町	金盛堂
同	山口屋
本鄉區天神町	改進堂

其他書籍繪双紙店に於而賣捌く

社告

女學雜誌第三百二十號より改正仕り本號より白赤の二種に別ちたれば五月限り帳簿上も亦改正致度候間舊號迄の**雜誌代金**至急御拂込相成度候。

爲替は**麹町郵便局**へ御振込被成下度候

女學雜誌社發送部

一　新誌及び書籍代金二十錢未滿は郵券代用不苦候、郵券は五厘切手一割增の事

一　雜誌及ひ書籍代金通運便にて御送付の向は屆け賃とも濟にして御送付相成度候

女學、教育學豫約諸君に稟告

女學及び教育學、每月二日を以て發兌致すべきの所、曩に第一號をミ、ヨグラフにて印刷せしに、書中不鮮明の點も有之候に付、今回更に活版に付し印刷可仕候に付今少々延引致候故豫め爰に謝す。

編輯者

女學雜誌代價

○白赤双方合せ講讀の分

十冊	前金	五十八錢	府外	六拾三錢
廿六冊(半年)	仝	一圓四十三錢	同	一圓五十六錢
五十二冊(一年)	同	二圓六十三錢	同	二圓八十六錢

○白赤の內一方講讀の分

六冊	前金	三拾五錢	府外	三十八錢
十三冊(半年)	同	七拾三錢	同	七十八錢
廿六冊(一年)	同	一圓三十錢	同	一圓四十三錢

一冊　金六錢　郵稅　金五厘

廣告料及無料廣告

一行	一回	(廿七字詰)	前金拾錢
同	三回以上		一割引
同	六回以上		二割引

○十行以上一割引。　二十行以上二割引。

○四十行同四割引。

但し不道德なる廣告は謝絕す、慈善の廣告は社議の上無代價にて引受く

○特別廣告は婦女に關する協會會合等の記錄を揭くるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を載する每に右雜誌十部注文を要し以上半頁每に十部增さ定む。

發行所　東京市麹町區下六番町六番地

女學雜誌社

編輯兼發行人　巖本善治

印刷人　堀口庄三

女學雜誌

甲の巻
第三百二拾號

明治二十五年
六月四日發兌

社説第一 **無聲聲不動動** は巨人の眞戰と附題して目下世人が事に當る修養の不足と覺悟の不十分とを論戒し、社説第二は **關西地方漫遊所感** と題し宗教界に對する愚案を列擧し些さか當路者の參考に供すべき長文章あり論説欄内 **俠客論** は蓋し近來非凡の雄筆にして細に俠客の眞情狀を穿ち其長所、任所を明らめ氣焰を吐く万丈の觀あり **我牢獄** は透谷生が沈痛深惰の讀切小説にして悲戀の心緒を滴露し有情者の落涙を催ふさしむ。其の他西行が詠花詞の撰。三十年史及紅葉が二人女の評。若松しづ子譯の序文。六合學人が起草の **天地管見** と題する一家私言の發端は靈養修德の同志者が多少の參考となるべきを信ずる也。

女學雜誌第三百二十號附錄

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 320. JUNE 4th. 1892.

第三百二十號目次

前號目次

次號預告

次の週に發兇する赤表、乙の巻には、今后赤表の方を何如なる風に編輯するやの標本を示す ○迎春行の完結、吾宿の花の續行の外に、櫻井ちか女史の女學の經驗、米國塚本ふじ、山脇花の二女秀才が通信、實用に切なる家政、などを掲ぐ○社說及び論說の何如に平易清秀となるべきかを一讀あらんとを要む

女學雜誌改正廣告

發企の由來

女學雜誌の編者、近頃中國四國九州を漫遊し、つく〲と世の有樣を觀、且つ本誌年來の愛讀者と會談して、會得したること多し。日進の文明を慕へる年若き方々は、女學雜誌が掲載する社會改良の論說、文學上の批評、人物論、または、詩、歌、俳諧、小說、などの類ひを特の外に佳とし、かゝる類を要め玉ふこと切なり。然るに、晩學の婦人、また實際家政を擔任せらるゝ主婦、もしくは、打よりて何ものをか會讀せらるゝ婦人會などの會員たちは、女學雜誌が掲載する家政、兒鑑、理學のはなし、問答、烈女賢婦の傳紀、育兒、看病、小供のはなしなどを尤とも益ありとし、他を省きて成るべく此類を多く掲げよと所望せらる。二種の愛讀者は年來の友にして双つながら吾等が幾久しく交わらんことを欲する所ろのものなり。たゞ其の要求の互ひに相違して、而も各自理わりあるにより、双方の望みに應じ、且は二つの向に對し心置なく力を伸し、存分に長所を發揮せんと思ひて、遂に此度び改正の發企を爲すに至りける。

改正の方法

右の主旨により、下の如く改正す。改正法を一言すれば、即はち、女學雜誌を二種に分ち、一種は青年男女の爲めにし、他の一種は晩學又は老成の婦人の爲めにすること是れ也。發兌の回數は是迄に同じく、依然每土曜日に出版すれば、青年の爲にするものと、老婦人の爲にするものと、隔土曜日に交る〲出づることとなり。大凡そ、一種の爲めに月二册づゝ發兌し、土曜日一月に五回ある時のみぞ、一種の方に三册を出すことあらんとす。代價は元の儘なり。二種を共に購讀するもの、即はち、從前のまゝにて購讀せらるゝ方にとりては、是迄と左して變ることなし。たゞ、殊更ら、青年の爲め、老婦人の爲めと專ばらに定めたるものを、かはる〲に讀み玉ふこととなるべきのみ。異なる所ろは、從前は月四册を通じて購ふべきことと限られしを、今后は月二册づゝ購ふとも差支へなきこととなりたるなり。今ま左に、各種別々に購讀する時の代價、及び双方合して購讀する時の代價を、念の爲め表示す、

女學雜誌(甲號)青年男女の爲にするものは表帋白
同(乙號)晩學又は老成婦人の爲にする者は表帋赤

甲號乙號の中ち、一方のみを購讀するときは

半年前金　七十三錢　府外は七十八錢
一年分同　一圓卅錢　府外は一圓四十三錢

甲乙双方を合せ購讀する時は從前の如し即ち

半年前金　一圓四十六錢　府外は一圓五十六錢
一年分同　二圓六十錢　府外は二圓八十六錢

何れにせよ、一册うり、又は十册前金は如左

一册　六錢　郵稅五厘　府內無郵稅
十册　五十八錢　郵稅五錢　府內無郵稅

見本を要むる人は郵券六錢封入申込あれ

白は青年の爲にす、源氏の如し、自ら武、元氣多し。
赤は主婦の爲にす、平家の如し、自ら文、人情多し。
白も赤も共に題して女學雜誌とす、只だ甲乙に分つ。
二者代價は同じ、合すとも別にすとも讀者の自由也。

白表 女學雜誌 掲載一斑

社說の欄内には、女學の眼光を以て、社會万般の出來事を觀察し、就中、矯風、道德、慈善、敎育、傳道、美術、文學等に重を置て、多年密かに任ずる所ろの吾社中の意見を吐露せんとす。**論說**の欄内には、社外の人に請ふて、注意すべき問題に關する時々の文章を收め、又た海外の新書若くは雜誌に現はれたる有益なる論說の反譯を掲載す。**批評**の欄内には、新刊書及び雜誌等を成るべく公平且つ綿密に批評し、紛々たる新刊書山の如き中に就き容易く撰擇するの便に供えんとす。**摘要**の欄内には、新刊書及び雜誌新聞紙などに掲載したる者の中ち有益と認めたる者の要を摘て記す。**文藝**の欄内には、文學、美術に關する古今の秀でたる論說批評を掲ぐ。**問答**の欄内には、四方の問に對する社中の意見を答述し、又讀者が互ひに問を掛けて討論するの演壇とし、義理を發揮論定するの判所とす。**雜錄**の欄内には、以上の諸欄に收め難き有益有味の雜品を收錄すると例の如く其の他**小說**の欄あり**寄書**の欄あり**時事**の欄あり**史傳**の欄あり其他時に臨み折に觸れて様々の欄を設け極めて眞實に吾社中の意見及び愛好する所ろのものを世上に告白せんとを欲す。

右白表(甲號)女學雜誌六月四日に第三百二十號を發兌し、以后隔週土曜日に追號出版す。一冊六錢郵稅五厘。

編者は從前の如く、社員も亦た變らす、只增加す。社は依然として東京麴町區下六番町六番地にあり。

一冊六錢郵稅五厘、十冊五十八錢、郵稅五錢。府内無稅
廣告料、一行一回十錢宛、三回以上一割引、六回以下二割引

赤表 女學雜誌 掲載一斑

社說の欄内には、折にふれて女の心得べき大切なる事を最と眞實に且つ平易に論じて、斯る時に斯く爲すは當社中の意見なりと云ふとを告げ參らせんとを欲す。**家政**の欄内には、育兒、看病、家内衛生、産前産后の心得、衣食住の事、簿記、經濟、物價、一家の取締方、下女下男の召使ひ様などを追々一々精しく說明さんとす。**兒鑑**には、子供のおはなし、又は子供に見すべき畫撰様などを掲載す。**講義**の欄内には、色々の學科を最と分り易く講釋し、又た書物を定め自宅にて獨修するの便となるやう六かしき所を解き明かし、惣じて靜けき窻の内に獨り物まなびする人の助けとなさんとす。**批評**の欄内には、新版の書物雜誌などの大躰を示し、讀みて益あるや無しやを告げ、無益に時と金とを費やすなからしめんと欲す。**文學**の欄内には、文章の作り方、歌のよみ方などを敎え、且つ折々は、文章を直し、歌に點したる所を示して其工夫を實際に說明せんとす。**史傳**の欄内には、賢婦烈女の傳記又は女の事にかゝわりたる歷史やうのものを掲げ、古に鑑みて今の敎となさんとを欲す。その他**雜錄**には固より、様々の品を面白く取集め、**小說**には清よく益ある者のみを掲げ その外、**拔萃**の欄には、古今の書籍雜誌中より、婦人の心得となるべき者を、そこはかとなく隨つて集め隨つて錄す。惑ひを解き疑を晴し、互に人の煩ひに助けせんとて**問答**の欄を置き人々の自由に問答するに任せ、社員も亦た思ふ所ろを答へんとす。**女報**には、內外の婦人の景況を細大漏すとなく掲載し、各地の通信を確實にすべし。**寄書**には成るべく四方の婦人の實際の經驗又はふと思付きたる事柄などを記したる文章を收錄す。其他は時に臨みて折々に欄を設け、凡そ婦女子に益ある事は遺すとなく此の紙上に掲載せんとを吾等が切望とす。

右赤表(乙號)女學雜誌六月十一日に第三百二十一號を發兌し以后隔週土曜日に追號出版す。一冊六錢郵稅五厘

(明治廿五年三月十五日遞信省認可) 明治廿五年六月四日發兌
發行所 東京市麴町區下六番町六番地 女學雜誌社
編輯兼發行人 巖本善治 印刷人 堀口庄三

女學雜誌 第三百二十號
明治二十五年六月四日發兌

社說

無聲の聲、不動の動

巨人の眞戰を許す

停會一週日夢の間に過ぎ、第八日の曉、慵眼未だ覺ざるの躰なり。星議長、此に於てか議長用邸に移る。開會后、自由黨員の言動莊重を加えたり。吾黨初めて爽快を覺ゆ。

然るに多舌輕調の新聞屋切りに品評すらく、開會后元氣俄然として挫けたり、議塲の光景何となく引立ず、日々の舌戰畢竟睡氣防に過ぎずと。而して、たま〳〵一二大聲を發するものあれば、喝采賞贊し、之あるによりて議會の元氣纔々の余命を保つとなせり。大人氣なき評論なる哉。

曩昔、勝海舟君、和を約して城に歸る時、城中の士、憤厲敵愾、踴躍慷慨す、君之を顧みて曰く、激昂斯の如し、此の淺薄の江戸人を率ひて何事を爲さんやと。吾黨は、此際に於ける君が用意の細愼なるを多しとす。大言壯語は、度量なき臆病者の好みて吐く所ろ、悲憤慷慨は、弱志短見の輩らが、壯なりとする所ろ、沈勇巨膽の人は反つて之を恥づ。淺き瀬に空波あり、識見短狹の人極めて激し易し、此輩を用ひて將た何事をか爲さん。

政黨人の所望は單に批評するのみにあらざるべし、必らずや之を活務に施こさんことを希圖するなるべし。之を常然とす。然れども、之を活務に施こさんとするは、單に内閣の幔幕の内に入るのみにあらざるべし、實に之を施作し、其政策を國利民福の爲に活試せんと欲するにてあるべし。然らば、政黨人は光秀たらんことを欲せずして、家康たらんことを欲せずんばある可らず。早く内閣を乘取つて三日にして忽まち坊守とするは戰ひ勝ちて而して胄の緒を引締め、人望殆んど歸して而して尚ほ退讓するの餘地あるに若かず。自から信ずること濃厚なれば之を早く實施することを掛念するにはあらず、實施する時は則はち眞正に實施せんことを欲するが故に、輕しく取らざる也。輕々しく取らざるは、大ひに取る也、容易く進まざるは、斷々乎として進む也。政黨人は、此般の自重、忍耐なくんばある可らず。

獨り奇しむ、彼の議會内暫らくの間の激語を假つて、少刻の虚勇に大山を引倒さんとするもの丶經綸は何如に。誰かアルクフホールの元氣を眞勇なりとせん。高慢なる大臣の顔を見て疳癪を起すはなみ〳〵の人情なり、此疳癪は何如ほどの勇氣なりや。議塲内に於ける大言壯語は議塲外に責任を負ふとなし、何人と雖ども激論するを得べし、此の激論は何程の勇氣なりや。若し夫れ如此き勇氣を以て直ちに天下を取るとを得ば、酒飲は、一呵して山を崩すとを得べし。

國務大臣が議塲に於ける演説は、甚はだ禮を欠くもの多し、之れ天下万目の認むる所ろなり。須らく万目をして彌よ明らかに之を熟視せしむべし。此時に當りて、議席より又欠禮の辭辨出づ、之れ暴を以て暴に報ゆるなり、士君子は此に於てか絶念して他に向つて望む。國務大臣が質問書に對する答辨は、瞭解しがたきもの多し、之れ天下万衆の從ふ所ろなり。須らく万衆をして彌よ深く之を察疑せしむべし。此時に當りて、議席より、切迫せる、短氣なる、野心あり〳〵と見ゆる氣なる駡詈攻擊を聞く、之れ至誠を以て邪を討つにあらず、邪に對するに一種の野望を以てするなり、温厚忠貞の士は此に於てか、失望して他に向つて待つ。

爲政の最大要素は治安なり、而して治安は信と服とより生ず。今の政黨人にして實際施政の任に當らんとを欲せば、先づ國民の信望を博し、異日之をして心に服せしむるの修養なかる可らず、此修養の爲に過ごす一年は、廟堂に立つて治術に計畫する一年と異なるとなし。修養未成らず、乍ち廟堂に立つて沐猴早く冠を落すとあらば何如ん。奇觀として一笑すべし、邦家の爲には三歎せずんばある可らず。

吾黨は、今の政治家の余裕なきを見、其の健康と壽命との爲に心配すると切なり。日本には尚ほ鐵道なき都府多し、鐵道ある處ろも滊車の速力遲緩なり、街上には馬車のひゝき少なく、人力車のうねりにて大抵間に合ふが如し。然るに今の政治家のみは何故にかく忙々騷々たるや。チヨルチヒルが椅子に憑りて假眠するの間もなく、グラツドストンが老眼鏡下に微笑してホーマーを朗吟するの余裕もなく、米國大統領が、白壁館に惣ての來訪者を無紹介にて會見するの閑日もなし。彼等には安息日なし、否な安眠すべき一夜だになし。顏色悄々、形容枯薄、つねに戚々焉として煩悶す。前途に追ひ掛

くるものは名利なるか。后ろより、追掛らるゝものは、事務と多忙と片付かざる用事となり。吾黨は彼等が余りに多忙なるにより、深く其健康と壽命とに心配す。

文化行渡り、學術進み、信仰高まれは、政治世界に身を投ずるもの追々に減ずべし。今日すでに其の兆あり。高潔大志の人之に入るを快なりとせざる也。故に吾黨は政治界の需要の爲に、現今の政治家の壽命を長くせんとを希ふ。

敢て一言を寄す。當今第一流の民間政治家は、年齡大率ね、三十乃至四十にあらずや。而して君等、グラッドストンたりビスマークたらんとを期する時は、君等が壽命少とも八十に達せずんばあらず。現に三四十にして、前途、八　を以て期する時は、諸君が生涯は尚四五十年あり。四十年、五十年、は快ちよき長日月なり。諸君は此の長日月の間に其保藏せる經綸を實施すべきなり、多望悠々、心胸自づから淸風の吹とくあらん、吾黨は深く諸君が淸健を祈るが故に、此の淸風の吹かんとを願ふや切なり。

奪はんとするは、棄てしむるに如かず、取らんとするは獻げらるゝに若かず、手を袖にして供物を受ると、手につばきして取ると、卽はち佛となると泥棒となるとは、一心の覺悟何如んにあり。覺悟何如によりて乍ち淸俗の違ひを生ず。一方に於て乘取らんとするの語氣現はるれば、他方に於て死守せんとするる暴勇を激成す。之れ君子の戰ひにあらざるのみか、亦た智者の戰ひにあらず。むかし、細川幽齋、田邊城に籠る。一小城を枕して西軍二十万に對せんとす、雄意知るべし。城門固く閉して一矢をだに入れざる也。此時に當りて悠々城門内に入り温語して遂に之を解降したるものは、源氏物語の注解を要むるの使者にあらずや。夫れ、猪は人に劣る、相撲取は柔術者に劣る、激語奮闘は必らずしも眞の勇にあらざる也。戰はずして勝ち、袖手して天下を取るは、卽はち上の上なるものにあらずや。今日の政治家何をとるか何ぞ匹夫に倣はんとする。

故に吾黨は、停會以后の議場の光景沈々肅々たるを見て大ひに祝す。喩えば、大兵枚を含んで夜行くが如く、深林風吹き止み、樹頭輕動せず、たゞ天の一方に黑雲の種點し、暴風激雷將に至らんとして而して少時敢て晴るゝの狀態ならんか。吾黨爽快の念湧くが如し。

關西地方漫遊所感

(一) 左は東京一番町教會に於て或夜其會員に諮詢したる意見の大意なり。

フランデヤ、ザビエー、一舟に乘じて河を下りつゝ、京市及び大坂の都を戀々顧反し、ダビデが「撰民出埃及」の詩を朗吟して、日本人民の救はれんとを祈りたる當時は、果して何如程の預算ありしや。久しからずして、數十万の信徒起り、尤とも美なる熱信を現はし、日本の戰史に比類なき主義の戰を以て迫害中に耐え、其確信今に尙ほ永續し四百餘年後に及んで當年の信仰依然として生存し、長崎近邊尙數万の舊信徒あり。

(二) 明治五六年の頃ろ、數名の新教徒初めて橫濱に起り、最と小さき會所にて祈禱せられし當時の預算は何如なりし乎。爾來二十年に過ぎずして新教の傳播今日の如くなれり。都の傳道は流るゝ水に文字書くが如し、確かに墨を點したれど、流水の移り行くによりて染色目立たず。左れど地方に行て之を見るに、宗教の感化意外に透徹せり。

(三) 日本人は宗教に淡泊なり、冷淡なりと云ふものあり。此は日本の歷史をも、近代の事實をも知らざる迂論なり。昔しに於ては、ゼスイト派の傳道、近世に於ては新教の傳道に、我日本に於ける如き成功を爲したる所ろ何處にありや。近代二十年間の新教の傳道を、たゞ日本人の通例の事業の一つとして考ふるとも、凡そ此の事業ほど成功したるもの他にあるとなし。二十年間に其受くる評判を一變し輿論を根底より動かしたると、此の宗教の如きもの他にありや。二十年間に團結者の數追々增加し、且つ其團結彌よ固まりたる如き團結他の何處にありや。二十年間、一定の方針を以て、年々數万圓の金を善用したる永續せる事業他の何處にありや。二十年間に人物の修養段々進步し、二十年間に元氣かつて沮喪せず、つれに活氣ありて進步したる、此の宗教の如きもの、何處にありや。又、凡そ健全なる文明的の事業にして、此の宗教の關係せざるもの何程ありや。女學校も婦人會も禁酒會も、廢娼會も、もろ〳〵の矯風會も、靑年會も、夏期學校も、皆な我宗教社界の發起に成りたり。余は信ず、二十年間の新教の事業は、他に比類なき大成功の事業なりき。

(四) 日本に於ける宗教上の結果如此し、日本人は宗教に冷淡なり淡泊なりと云ふは、何の事實によるヿ乎。日本人が宗教に冷淡なりと云はゞ、余は斷じて然らずと論ぜん。然し、日本人は万事に冷淡淡泊なり。之れ其の格別の性格なり。ゆへに當然の人情に比べては、宗教にあさ〳〵しきものあらんが、此は、日本人が宗教なるものゝみに淡なるにあらざる也。されば、此迄の傳道は、日本人にとりて實に行なひ易かりき、其結果は眞に良好なりき、たゞ此上一段の進步に至りては、甚はだ容易ならず。基督敎の贊成者となる迄では容易かりき。されど、之をして、基督教的の品性を打立しむると、教會を山の城の如く、岩の上の家の如く、世の光の如くならしむるとなどは、万事に淡如たる日本人中の働きとして、餘程の勞苦を要すべきもの也。

(五) 今日教勢衰ろへたりといふは、何の證兆によりて判定する乎。受洗者の殖えざるによりてか、教會に來るものゝ減ぜしによりてか。此の二つを以て、直ちに教勢の衰退せし證據となさんとせば、其前に左の二問題を決し置ざる可らず。即はち、今日の洗禮を受るとき、受けざるとその間には、明白なる大なる相違あると、並びに今日の教會は來るとき、來らざるとその間には、明白なる大なる相違あるヿ。此問題に於て、二つ乍ら、大相違ありとならば、即はち教會に來らざるとき、受洗せざるとによりて、教會の進まざる證と爲し得べけれ共實際もし、かゝる相違なきほどの景況にてあらば、彼の二事をもて直ちに教勢の進退を卜す可らず。今の教會内には、クリスチアンにあらず、贊成者多し、教會内にて信徒不信徒の區別あるものすらあり。此時に於ては、受洗せざるもの、又は教會に入らざるものが、教會員と大相違ありと認知す可らず。かくて堂外に居り、會に來らざるものもあらん。故に受洗者なきとき、來會者少なきとによりて、直ちに教勢を衰ろへたりと斷定す可らず。

(六) 近頃ろ切りに悲しき聲きこゆ。基督教徒にして基督教の成功せざるとを疑ふものすらあり。教勢振はずとて歎息落膽するものすらあり。余は、基督教が成功せざるこ と を言ふは、一種の自語相違に同じきほどに感ず。天下万國何處にゆくとして、基督教の成功せざる所と時とあらんや。基督教は何の地、何の時に於ても、進步し成功すべし。今日の我國に於ても余說亦然　は、今日の教會が衰へたりと思ふと能はず、又教勢が故なく振はざるとありと信ずると能は

す。新教今日に至る迄の經歷は大成功なり、今日も亦た決して衰退せず。たゞ世間大抵贊成者となり、教會內亦た贊成者位ひの格のもの多かりしかば、內外溶混して區別を曖昧にし、外見上、教會の進步せざるやうに見ゆるに至りし也。

（七）　余は今日の教會にても益を爲すと思ふ、之に對して毫も失望落膽せず。されど、今一段の進步を必要と思ふヿは甚はだ切なり。此迄と現今とを失敗と思ふにあらず今一段進步せしめんヿを要むる也。

（八）　今后一段の進步を爲さしむる所謂ころ、今日迄の傳道に優りて骨の折れるわざなれと思はる。淺く一躰に傳道するヿは、新しきヿを好む日本人の上には行ない易きなり。之より熱實深刻なる結果を生ぜしむべき傳道に至りては、此迄になき難事なり。

（九）　此進步を爲さんとするに妨害たりと信ぜらるゝ、教會內の通情慣習にして、甚はだ誤まれりと思はるゝ點を左に列擧すべし。

（十）　其一は、事業と云ひ傳道と云ふ事なり。基督教徒が世に存する間は、傳道と云ふヿより外に義務はなかるべし。傳道心より發せざる仕事を爲すに於て、基督教徒たるもの何如で熱心を起すヿを得ん。近來段々「事業」を起すと云ふ觀念教界內に行わるゝが、所云る事業も傳道の主意に出でざれば、信徒の事業にあらず。事業を爲し、錢をもうけ、夫を教會に寄附して、信徒の義務を盡せりと思ふものあり。かゝる人は收益の一二割丈けを教會に收む。然らば殘の八九割は錢として信徒が追い求むる所のものなりや。之れ驚ろくべき不信的の覺悟なり。信徒の爲す仕事は商賈にても、車を引くヿにても、皆な傳道の主意より發し、何如なる仕事も、クリステアンたるの資格を養ふヿと、其の感化を人に施こして傳道するヿとの主意より發せざる可らず。口にて傳道するは、傳道の一つの方法のみ。其傳道者は、かの車ひき、商人と同列同格なる一の傳道者たる也。

（十一）　信徒に坊守くさくなるなと云ふ說あり、余は極反對なり。余は今一層坊守くさくならんヿを要求す。坊守くさしとは、脫俗超然として、世の外に出る風采也。凡そ、眞に天國に屬するものは、地の事に執着す可らず。地の事を輕んじ、世を厭ふにはあられど、之に從事すると共に、其上に超出する所なかる可らず。其脫俗して世と離るゝ所ろ、坊守くさきを要す。貧しきものこそ神を見るなれ、富める者は天國に入るヿかたし。世の事物に執着せずして、之に貧しきものならずば、靈の事を知るヿ難し。クリステアンたる前には、一度び西行法師たらざる可らず。

（十二）　汝等食ふと衣るとに思い煩ふなかれ、天の鳥を見よ、野の百合花を見よとの教訓は、カーライルが言へる如く千古に卓秀せる麗はしき教訓なり。而して、此の教訓は信徒惣躰が守り行ふヿを能はざる乎。まづ、牧師諸君の如きは第一に此教訓を實行すべし。其給料は豫じめ定むべきものにあらず、働くものゝ糧として天より賜わるべきもの也。其他、如何なる信徒にても、衣食はすべて天より賜わるべし。食前の祈禱には、眞に賜わるものとして感謝すべし、自から之を用意すべからず。君子の仕ふるや其義を行ふ也、道の行はれざる豈一毫だも爵祿を獲取すべけんや、とは儒教の人すら夙に主張せり。吾等が衣食は眞に道を行ふ爲におのづから與へらるゝものなり。

（十三）　神學上の道理の研究は必要也。近年、自由說の研究ありしは祝すべし。去年來波瀾靜まり、又た確信を得たりと云ふ人多し。同じく祝すべし。されば、之を研究するにも、亦た研究后安んずるにも、ともに陷いり易き誤解あり。研究は何處までもすべし。ポール曰く、ユダヤ人の熱心は智識によるにあらずと。智識に據るヿも肝要なり。左れど、學問上の意味にての研究にあらず、宗教上の意味に於ける研窮は、煩悶要望する所ろあり饑渴の如く眞理を求むるものありて、之に對し研窮し研窮したる所を信愛するにあらずば、宗教上に益なし。基督は神子なりと斷定するも、宗教上に救ひ主を求るの煩悶なき人に取りては、此の神子なりと斷定したるは、太閤は英雄なりと斷定せしに均し、一種の人物論に過ぎず。內に煩悶あり、クリストの慰さめによりて、之より救はるれば、此の救はれたる丈けに於て、クリストを救ひ主と認めたる也。生命の說も亦然り、たとひ、其說を明らめたりとも、もし自己の死せるヿに歎きて、靈の生命を求め、之を得たるにあらずば、生物學上のライフの研窮に異ならず、宗教上の研窮にあらず。宗教上の神學研窮とは、實に內情に切に求る所ありて初めて効ある也。

（十四）　近來犧牲獻身、愛、理想などの事に付き、異教的に傾むくもの多し。犧牲獻身とは、愛ある人の行を他人より許したる旨にて、當の人は困難を忍びて敢て勉め爲したるにはあらず。自から樂しみて爲したる也。たゞ其行爲を他

人より窺がひ見て犠牲獻身と云ふ片くるしげの形容詞を與へたる也。又、愛を増さんとて勉むるものあれ共、人に「愛」と云へる特別の一つの性あるとなし、人眞人となりて其天然の美しき性質を發露するときは、其行ひ自づから愛となる也。初めより愛を増さんとを勉むる時は、寧ろ僞善となるべし。近頃は信徒の青年中にても、ブライト、コロムエル、松陰、王陽明、ナイテンゲール、ウイラードなどを理想とする人多く、直接クリストを理想とする人少くなりぬ。之れ大ひに注意すべく警戒すべきと也。

(十五) 最后に考ふるは、教會及び役者の事なり。前年、ドラモンド氏は、自然界の法則を靈界に適用して無形世界の理法を判然せしめたるとあり。兩界万事に於て一つにて無きは無論なれど、具躰を以て抽象を推論する時は漠然たる道理の發揮するとを覺ゆる也。如此く、教會の事を學校の事を用ひて推論せば、同樣に明白となるものあらん。教會は一種の學校なり。故に近來學校にある多くの短所欠點は依然として亦た教會にもあり。其の教會に於けるものには注意する人少なきゆへ、注意し易き學校の方の欠短を擧て考ふる時は明白となるべし。學校には、人物上の模範となり、風を造り、人間としての教導感化を與ふべき先生と、一學科の教師と、生徒等の撰定する委員の如きものとあるべし。教會に於ける、牧師、教師、傳道師に類す。然るに學校にて、教師あれども先生のなきが如く、教會に於ても、神學を講じ、基督一代記を弁ずる教師と云ふ一の專門家はあれども、牧師は少し。其傳道師は、會員一統皆な傳道するに列び、言論を以て傳道する一つの役を委任せられ、一汎の會員と同目的を異手段にて行ふ同列の人に過ざれど、今日の學校に生徒の委員ならで幹事風の人多き如く、教會の傳道師も一汎會員と列を異にせり、其人のみ傳道するものゝ如くなれり。學校に於ける注入教育尙ほ除かれざる如く、教會の教育も注入的なり。學校の先生は雇はれて行くべきものにあらず、生徒來りて學ぶべきもの也(必らずしも足にて行くの謂にあらず、心もちを言ふ也)先生の月給は、生徒が奉つるものにあらず、其人が中心にて他は皆な來り集まる可きものなり、其給料は會員が喜んで義捨奉捐するものなるべし、若干と定むべきのもにあらず。若し斯る關係を生ぜざる時は、學校に於ても教會に於ても、先生たり、牧師たるにあらずして、一學科の教師たるべし、其つもりにて雇ふべきなり。必らずしも羊かひと羊、先生と弟子などの關係を以て初めより望む可らず、初めより斯く無理に定むるゆへ多くの弊を生ずる也。學校に入校せし生徒は勉强して后に卒業するものなるに、教會に入りし信徒は入會后怠漫なり、何如でか進歩せん。學校にて生徒をして直接テーチゥアに接はらしめんことを要する如く、教會にては、直接神に交通せしむるとを大切にすへし。故に、教會の役者は、牧師、教師、傳道師の三を置き、若し其人なければ、牧師を置く可らず、牧師となる人は之少し、一教會一牧師と定むるは到底出來ざると也、況んや今日の如く教會多き時に何如でか夫々の牧師あらんや、一學校に一先生なきが如し。名前は何れにても好けれど、牧師と云ふ名に種々の觀念を附し、羊かひの如く、魂の保護者の如く、クリストの代表者の如く、洗禮晩餐は此人のみ行ふものゝ如く思はんとするゆへ、左樣なる意味の牧師は多くある筈なしと初より覺悟し、一教會一牧師を置くの制度を止むへし。教師に至りては、一種の學者なり、其講談を聞くとを主とす。三四會を受もちて巡回講談を爲すの仕組にて宜しかるべし。傳道師に至ては、一教會に成べく多きが善し、一教會に大工の多きが如く、亦傳道師の多きが善し。注意せよ、會員皆な傳道者たる也、たゞ言論を以て傳道する其傳道師を成べく多く置たしとの意也。名前は何にても宜しけれど、遺傳したる舊慣を變へるには、一段、覺悟を變ゆるとを要す、即はち一教會に一牧師を置くとを得ずと決心し、又た教師は教會を受もつとを得ると規定し、傳道師は、一汎會員と同樣の傳道者なりと覺悟すべし。教會はそも〳〵四つの性質を備ふべし。一は禮拜の處なり。二は修練の處なり。三は兄弟姉妹の親和の處なり。四は蟠風傳道の本陣なり。禮拜の爲にはクエーカー、監督派などの教制を參考すべし。修練の爲には、儒教師弟の關係、禪僧の坐禪、武士の道場などの有樣を參考すべし。親和の爲には、會堂の築建法を一變し、教會を一の小公園の内に置くべし、其入費をつくるとは決して難きものにあらず、教會を完全にする爲に金を出さざる如き氣風は、信徒の惡しきにあらず、一汎の教會の風、特には率先者が足らざるゆへ也、人はさほど金を惜しむものにあらず。蟠風傳道の爲には、種々の仕方あり、ブースの救世軍の法を參考すべし、又教會の管理する種々の慈善事業を起すべし、會員一人々々傳道するは固よりなり、相合しては教會と云ふ一團結の力を以て此の砂漠界に働らくべし。教會をかゝる樣に變へ、役者をかゝる風に

望むべし。教會今に於て一變せずば、教會は遂に寺院の如く、有れども、無きものとなるべし。役者も亦一種の僧侶の如く無用の人となるべし。之れ今后に於ける日本傳道の良策にあらず。吾黨は、据拮して教會を固き清き一團結と爲さざる可らず。

(十六) 但し方法經綸は末なり、本に反ることを要す。近來、經綸と云ふ語流行す。經綸は好き事也、經綸なきは短命なり、人に於て恥かしきこと也。されど經綸のみにて事行はるべしと考がえ、特に道德宗教上の進歩が、經綸にて行はるべしと思ふ人は、十九世紀の末に當りて、スポンテナス、ゼネレーションを信ずるもの也。生命は生命より來る。法則より人を生ぜざる如く、經綸より信仰を進むることなし。尊德先生云く、麥より米を生ぜずと。至誠なき人より、至誠の人を生ぜず、不熱心の人より不熱心の人を生ぜず。最初に先づ生ける一人の主動者を要す。凡そ信仰の生命は基督より來る。基督之を弟子に傳へ、弟子之を傳道者に傳へ傳道者之れを吾日本人に傳へたり。其微妙の關係を言はゞ、以心傳心なり。故に、教務を振起し、教風を一變せんと欲せば、人と相ひ談ずる前に、先づ自から決心し、覺悟し、修養し、而して后ち山を出ることを要す。自己一心に適用して其眞なるを知らば、之を万人に適用すべし、主張すべし、擴張すべし。ザビエーは、印度に於て日本鹿兒島の人一人に傳道し、日本人は傳道すべしと決意したり。吾一人に當はめて確信することを得、眞理なりと堅認することを得ば、最早万人をして信ぜしむる基礎を打建たり。最初この根底定まらずば、喃々して、傳道すとも効なし。ポウロは不便極まる世の中にて、三十年間に、單身獨行して、日本全國に二倍する諸地方に傳道したり。吾黨は人を頼まず、仲間を要めず、先づ自己一身の修養出來上れば可なり。吾黨何ゆへにポウロの事を爲しがたきや。日本は狹き國なり、ことに近頃は便利の爲に一層小さくなれり。此全洲に傳道するは、一人にても可也。吾等はポウロよりも、クリストよりも、更に多く傳道することを得べし。何故に一日に、三四千人を悔改せしむること出來ざるか。吾等は先づ其信仰の養を爲さん。一騎當千を要す。たゞ相談して多くの仲間を造るを要せず。教勢振起などの相談は無益なり、吾黨先づ人々修養することを第一とす。吾黨は神を信ず、神を信ず、神を信ずるは、天地の主權者は、正しきものなりと信ずる也、正しき主權者の下に正しきことの廣まらぬ理由なし。吾等は基督を信ず、基督は人が神の如くなり得ることを實際に證明したり、吾等が人物は基督の如くなり得ることを確信す。吾等は、后ろに歷史を扣へ目前に人の本性を見る。到る處ろ、勝利の兆候歷々たり。少しも逡巡し狐疑すべき所なし。吾等はアレキサンダーにあらず、前途に廣漠なる働き場を有す。快氣勃々として禁じがたし。

(十七) 基督教徒は、皆な傳道者たるべし、万づの仕事は皆な傳道心より發すべし。左れど、今日は特に、言論文章の上の傳道者を多く必要す。もし、當ることを得ば、吾黨之に用ひられたし。而して日本の傳道者は、四百年前に、ザビエーが言へる如く、普通必要の資格の外に更に四つの資格を要す。ザビエー師、云く、日本の宣教者たらんには、第一品行公正ならざる可らず、第二多智多才ならざる可らず、第三あく迄で勇猛ならざる可らずと。實に然り、日本には、儒佛及び其他の教により、品行の公明正大なるもの多し、田舍には特に多し、宣教師の品行は之に冠する所ろなかる可らず。又日本人は才智あり、其智識上の疑を解き得る程に十分の學識なかる可らず。又、日本の武士は、義烈なる勇膽あり、傳道者は此が心を呑むの沈勇なかる可らず。此の三者の養ひを添えずんば、傳道上の成功遲し。而して、第一に必要なるは信仰也。されど、信仰とは、淡泊のものにあらず、人間の總ての美性、人間の道德上のあらゆる修練皆な信仰と云ふことの中に含まる。語ばの單純なるによりて、其事の至つて容易なる如く思ふものあり、大なる誤なり。信仰の中には、義を慕ふと、邪を退くると、德を樂しむと、偉大者を崇敬すると、敬長すると、非常の勇氣、非常の熱心、世俗の誘惑を一切拋棄する事等、多くの道德を含む。信仰に强き人は、元來偉人物なり、大道德者なり。信仰と云ふこと決しく輕々しきことにあらず、多くの修練を要す。信仰一と度び定まるか、吾れ何如に言ひ何如に述べんと思ひ煩らうことなく無意識にして、其最上の眞心の言語を發すべし。詮方つくれども望を失はず、前途に防害横たはり途を塞げども、尙進む、信仰は此の山をも移すなり。この信仰ありて后ち傳道するものは、論理にあらず、辨說にあらざる、一種の靈光其上に加はりて、直ちに人の心を奪ひ取るべし。之れ聖靈の助け也。吾黨は、之を受るに足るものとなるを第一の用意とすべし。

論說

俠客論

（社員）　天知子

天知子先きに「女學生」誌上に一度俠氣を論す、然れども僅かに想ひの一點を漏すに過ぎす、俠の深味は到底說き易からずさ雖ども、再たび玆に氣を勵まし硯に呵して其粗漏を補ひ、無俠社會の頭腦に敢へて之れを紹介すさいふ。

俠客を解釋せんとせば先づ俠氣の本躰を知らざる可らず、而して又俠氣を知らんとせば其最も銳く現はれたる現象を觀察するを要す、俠客は實に此現象たり、决して他に求むるとを得ざるなり。

天下俠客を誤解する者極めて多し。彼の松脂墨に頰髯作り角鍔の大脇差を閂に佩て高臂張り獵皮の皮巾着ほこりがにぶら付かせ「喧嘩買ひ申す」と威張りたる腕力專務の破壞的人種は未だ以て俠客の理想とすべからず。數百の客を養ふと塵埃の如く財を散らすと瓦礫の如く、人の尊敬服從するを以て一世の快樂とし、位置を以て名を賣り資財を以て俠を鳴らす恰も風に順ひて呼ぶ如し聲疾からずと雖ども其勢ひ僥倖にも高く鳴るのみと史公が論じたる此等一種の人物は未だ全く俠客の理想とす可らず。彼の私利に汲々とし非義に齷齪とし、財を掠め人を殺し、道を懼れず德を知らず、殺伐粗暴にして社會を害毒する博徒一流の人種を以て、俠客の理想なりとする者あるに至ては、三度慨嘆の涙を捧げずんば非ず。史公は詳かに遊俠者を解釋して言へらく、書を讀んで獨り君子の德を行ひ義として苟も當世に合せず、……行ひ正義に不軌なるとありと雖ども、其言や必ず信、其行ひや必ず果、已に諾すれば必ず誠、其身を愛せず士の阨困に趣く、……而して其能に矜らず其德を伐るを羞づと善いかな言や先づ吾が志を得たるものなり。

俠客の種類極めて多し、然れども其何れを問はず皆「俠」なる一原素が他の原素と抱合し、以て種々なる變躰を現はすものたり、其任俠と言ひ、豪俠といひ、健俠といひ、鋒俠といひ、一諾俠といひ、伉俠と言ひ、氣俠といひ、儒俠といひ、遊俠といひ、義俠といふ、種類自ら同からず、而して大俠なるものは最も圓滿なる俠にして、「俠」と愛との抱合物なり、愛良く俠を發達せしめ、俠良く愛を消化して大器を爲す、此に於て大俠は靜かなる時君子の如し、豈漫に爭ふを好むの人な

らんや、嚮きに好小說として軟骨文壇を愕かしたる

三日月治郎吉は大俠に非ず

彼れは好俠漢なり、然れども大俠なりと言ふ可らず、未だ輕々しく幡隨院長兵衞と比較すべき者に非ず、季布の任俠に及ぶ可らず、況んや朱家の大俠に比するに於てをや、地位と財產とを與へなば孟嘗信陵の徒たるを得べく、眼光を高めあば張建の豪俠とや成るべし、豪俠の理想を寫さんとして能はざりし托塔天王晁蓋よりは正しく數步の上に居れども、唐犬權兵衞の兄分に過ぎざりしのみ、多くの評者が大俠の誇言を非難せざりし所を以て見るも、社會にいよ／＼俠の觀念衰えたるを知るなり、此に至て余は益々紹介の勞を取らずんばあらず。

凡そ社會が非常ある不權衡を生ずるに當てや、必ず之れを整ふるの必要として、非常の平均策を非常の手腕に假らざるを得ず、殊に君子厄に苦しみ大人迫害に陷るに至り、賴みて手腕を借らんとする者、唯一の非常的手腕あるのみ、而して

俠客は實に此非常的手腕なり

故に非常物をして尋常の眼光もて論ぜんとせば、其誤解や固より多し、是れ史家をして「當世之れを笑ふ」の句あらしめ、任俠者が每に軟骨を嘲罵するの鬱語に「鈍眼淺光豈鐵胸に射込むことを得んや」と呼ばしむる所以に非ずや。彼れが歷史は非常なる血文字なり、不權衡の大刺戟は彼れの生立ちをして殆んど狂せしめんとし、終に其氣風は必要の急流に乘じ、先づ社會の下層に一種の慷慨を叫んで弱者の身方となりし者は彼れなり。德川武斷政府の壓制に士は權を弄して町人を虐げ、國家の衰運萌して士道地に墮るに當てや、慨然として町人社會に一の義旗を建てゝ大に矯正の氣焰を吐き、陰然暴士を畏服せしめしもの豈社會反動の好結果に非ずや、故に此等のものが現はるゝの時代は必ず道德極衰し天下互ひに相犯すの暗黑時代ならずんばあらず、周の戰國時代に最も多く之れを出し、德川末世には殊んど江戶の氣風を變化せしめし程に多數の俠客を現出せり、彼の花川戶助六、野晒悟助、水髮長五郎及び長兵衞等の劇場が最も隆盛を極めし頃は、當時其人民の嗜好力が俠客の上に傾向せしや知るべきなり、

此に於て益々知るならん、此變則なる非常物は實に非常時期の救濟者にして、其束縛を切放つの利刄なることを、されば

俠客は熱心なる警醒者なり

而して又社會不權衡の需要に驅られて反動激發せる火花の如し、彼れは少なくも人民の好みに暗合して機會に投じ以て雄飛せるの怪物なりし。

嗚呼彼れは不幸の者なり、其大俠の俠たる本性は平穩微笑、言はずして能く語り動かずして能く人を動かし、端坐靜默懷を寬くして善惡を包み、膽を張りて威力を呑むの時にあり、而して彼れが銳く叱咜し猛く動く所の燦然たる光輝は、實に其激發せる變躰の一側面のみ、例へば慈善溫柔の基督が鞭を揚げて鳩賣る者を堂内より驅逐したる時の如し、彼れは極端の性よりして其發表せる時は極めて強く發表するを好むと雖ども、常には勉めて隱したる善德義擧を爲さんヿを欲す、是れ彼れが愉快とする一種の習慣より買得たる名譽心なり、彼れは實に廉潔を好むの餘り

極端の隱蔽を以て名譽心と爲せり

故に多く知られざりしなり、其人目に觸れ傳紀者の筆にかゝる部分は僅かに發作せる火花の一點光に過ぎざるものを、何を以てか大早計に評定するヿを爲すぞ。

俠氣は一大氣節なり

動く時は必ず激氣と成り、靜かなる時は必ず濃愛の氣と成る、例へば、溪澗を見る如し、流るゝ時は岩に激して万雷の聲を發し、流れざる時は漣波だも動かさゞる無聲深沈の淵を爲す、或人が英雄を評したるの言を以てせば、俠は實に多角形なるものなり、其見る所ろに由りて種々の觀察をヿにす、故に一度誤解の眼こを以てせば最とも非難しやすきものにして、一度會得せる眼を以てせば最とも劇賞し得べき性質を有す。

故に世人が、俠に愛なし快あるのみと冷評せば、吾人は其正反對に立て斯くし答へんとす曰く

俠の活命は一他愛にあるのみ

と、強く言へば犧牲獻身にあり、然れども圓滿なる他愛に非ずして、寧ろ濃厚なる偏愛なり、故に誤評すらく、俠は淚なし感情冷かなり唯自己の愉快を買んが爲めの嗜好心ありと、此大誤解こそ俠の俠たる所以にして胸間複雜其深さを知り得ざる所とす、那んぞ知らん彼れが全身は多淚多感を以て網羅せるヿを、彼れが鬱勃たる情感は之れを遣るに所なく、一度

は煩悶憂愁の淵に沈むべかりし者が、其強健なる意志ありしか爲め、之れを壓迫して内部に禁錮し勤めて色に現はさゞるの習慣を養ひ以て益々鬱勃の情感胸底に激するに至りし也、恰も好し俠者の本領として好む所の平民的主義は、此鬱勃せる激氣を載せて終に充分の騁足を暢べしめたり、此に於てか彼の本性は「強きを挫きて弱きを助くる」てふ矯激者と成りしなり。彼は弱き者に向ふては涙脆き慈愛の處女にして、強き者に向ふては鐵血の虎將軍なり、後進者には無二の愛友にして先進者には不屈の攻撃者なり、高慢僞飾を飽まで憎みて、熱心に權勢と人爵とを打破し、極端に名利を叱咤するの人なり、此點より見れば總て極端なる平民主義てふ舟に一身を投じて急流に棹すものゝ如し、是れを以て見れば俠は實に平民的の主義なり。

故に此場合に於て見る時は純粹なる破壞的の人なり又爭鬪を好むの人なり、然れども實に保護主義を以て成立つ者なり、其破壞的の性を現はす時は必ず一方に保護すべき必要の迫り居るものあるが故なり、其爭鬪を好みて勇めるの時は必ず一方に助くべき者存するが故なり、故に保護せんが爲めには最も好まざる破壞者たるべく而かも烈叫せる爭鬪者と成るとは彼れが濃厚の氣質を現はす所にして、感激殆んど狂に近く、或は情實を蹈破るの改革的人物と成ることあり、此時に至りては眠れる獅子の立つ如く、白刃の首に望むも莞爾として知らざる如し、韓子が所謂儒は文を以て法を亂り俠は武を以て禁を犯すと評せしものは、蓋し此際にあり、俠を知らざる者多く此點に於て放狩粗暴の評を降す、誤れるかな謬れる哉、之を以て見れば

俠は實に保護主義なり

俠は「大」を好み「潔」を愛す、其粗剛と放大と恬淡なるは蓋し之より來る所なるべし、彼は又迅速なる變轉を好む、或時は最も謙遜辭讓の温順者にも係はらず或時は極めて無禮放埓の擧動を現はす、或度までは最も柔順の忍耐者なるにも係らず壓すれば忽ち凜然たる氣慨を爆發して一歩も退かざるの一徹者と成る、而して彼れは大刀を腰にして肩を聳やかすよりは懷中見へざる所に短刀正宗を藏むるの性あり、一擧一動一端より一端に劇變して極まりなきものは、彼れが人の意表に出でゝ膽を拉がんとするを好むの性より餘義なくせられたる習

慣なり、是彼が戰國的の人物と評せらるゝ所にして、恰も

彼れは戰國の策士に似たり

俠は盲目なる義あり、又是非を頓着せぬ慣氣なりとは爭ふ可らざるの評なり、彼れは正義廉潔の文字に束縛せられたる如く、禮節と自重の習慣に餘り多く浸染せられたる者の如し、其一諾は千鈞より重からしめんと欲し、其賴まれたるをば万難を犯しても爲さずんば止まず、是れが爲め往々時と場所とを打破らんとす。彼れは恥辱の二字を額上に烙印して生命も爲めに擲たんとす、彼れは友愛の念非常に強く寧ろ「人」に盡すを以て善德の第一快樂とす、故に味方には必らず刎頸の友と成り敵には最も困難の驍將と成る、太史公評して曰えらく俠は私義廉潔退讓なり……名は虛しく立たず士は虛しく附かずと、蓋し之れを言ふなり、其身を殺して仁を爲すを潔しとして往々死を輕んずるに似たるとあるは止むを得ざるの弊なるべし、總て常に行ひを修し名を砥ぎ、武士道を欣慕して道を此所に修し人物を此所に修養せんとす、其自重自任の格外に強とは以の俠に働きを爲すの要素なるべし、之を以て見れば。

彼れは武士道の變則修養者なるかな

英雄に非ずんば英雄の魂膽を知ると難し、太史公は大俠なり、彼れが俠骨稜々たる大筆鋒を以て、多くの史家が無殘にも埋歿し去りし地下の俠者をして、僅かに紙面に相微笑しむるを得たりしものは、實に彼れが俠たる所以に非ずや、余は公が遊俠編に向ふて其勞を感謝せずんば非らず、噫余も不幸の人なるかな、未だ俠の活眼なくして俠を叫ぶの塲合と成る、俠が不幸か、余が、不幸か不幸の塲合たるが故に俠たるを得るは、否、寧ろ社會が不幸たるの故のみ。

今や社會俠氣なく卑劣不德の者白晝に橫行し、金と權とは正義の口を噤まば得らるべしと認定し、腕と威とは弱を凌猊し遂ぐべきものと信じ、強に媚び弱を犯し、昔への壯士は俠客にして今の壯士は不義暴人と成りぬ、志士は傷けられ有爲の子女は蔑如せらる、殊に其女子を冷遇して之を助くるの涙を注がざる者多きに至ては、吾人は殆んど其無俠利己の卑劣者たるを罵倒するに狂せんとす、義俠の骨相は青年の容貌に消へ去んとするもの、德も華著を裝はんとし人も深刻凄絕の風を珍重せざらんとする時に當り、赤手の英雄たる任俠者何ぞ立

ざる、汝の氣概は今や需要に疾驅せらるゝを知らずや、硬骨者活きよ、軟骨者去れよ、强健博大なる愛の眞理を以て涙胸鐵腸の勳爵士出でよ、愛を誤解唱道して無腸柔軟の氣風を隨一とせる一派の青年は、放蕩惰弱と粗暴僞善の青年中に立て上流の位置を占むる今日の形勢に於て、吾人は叫んで義侠なる硬骨男女の一微光を玆に紹介せざらんとするも得んや。

英雄豪傑彼れ何者ぞ

（社員）山月子

甚しい哉明治青年の自信に乏しきや、彼の青年中の粹ともいふべき基督敎徒の青年にして、猶現時の洋行歸り、博士、學士等の虛名虛譽の下に拜跪する者あるは何ぞや、嗚呼是れ亦一種の偶像信者、豈深く猛省せざるべけんや、

英雄豪傑彼れ何者ぞ、世人よ、徒らに其事業の偉大なると、其功名の赫奕たるとに眩暈すると勿れ、靜かに彼れが人物の何故に偉大なるや、彼れが事業の何故に成功せるやを熟考せよ、余は信ず、眞英傑の衆人に卓立して、巍然、聳然、人をして仰慕に堪へざらしむる所以のものは、彼の裏にある眞神の光に由るなりと、此光實に彼をして美ならしめ、彼をして偉大ならしめ、彼をして――死すとも――成功の冠を戴かしむるに至るなり、既に然らば、吾人は同じく、自らの精一ぱい、出來るだけ、己を棄てゝ神に從ひ、以て其榮光を我に十分に受くべきなり、我れ十分に受けて十分に與ふ、即ち英雄豪傑に對して耻ると無きなり、嫠婦のレプタ二つは、富める人々の捐輸よりも、却て多しと稱せらる、そは富人は其羨餘ある所より捐輸を神にさゝげ、婦は其足らざる所より其所有を盡く獻げたればなり、乃ち知る神の前に於ての大小は、實に自己の精一ぱいを盡すと否とにあることを、若し英傑にして十の力を持ち、而して其五を用ひ、我れ三の力を有して其三を盡く用ゐば、我れ却て英傑よりも多く用ゐたるなり。

青年よ、敢て自ら世に對して卑屈なると勿れ、たゞ當に神に對して柔順なるべし、ヤコブ書に曰く『自らを主の前に卑くせよ然ば主なんぢらを高くせん』卿等が自重に乏しく自重に薄きは、未だ神に對して柔順ならざるが故なり、神に對して卑からざるが故なり、

歷史の運動を天國に向けて回轉せる眞正の英雄は、誠に信と

望と愛を持ちたり、其職分に忠實なりしなり、此美なる心事發して美なる言行となり、美なる事業となり、美なる名聲とはなれるなり、吾人其結果を學ぶは愚なり、之を見て驚嘆自失、爲す所を知らざるは更に愚なり、宜しく其原因——心事を察すべきなり、

ピリピ書に曰く『爾曹キリスト、イエスの意を以て意とすべし』と、能く此意を以て言ひ行ふ者は眞正の英傑なり、さては吾人罪惡を殺し、誘惑を退け、祈りつゝ求めつゝ、信仰の善戰を戰ひ、基督の意を意とすべきなり、此意を以て英雄を觀、現今の人物を觀る、其崇拜すべき光を崇拜し、其未だ足らざる點は、之を知り之を補助するの心を生ずべし、此意を以て弱き婦人を觀、幼き小兒を觀る、同じく崇拜の念補助の思を生ずべし、是れ自然なり、然るを覺へずして然るなり、即ち基督我儕をして然らしむるなり、地上十數億万の人、貴賤となく、智愚となく、貧富となく、老幼となく、凡て我が敬を乞ふべきの師なり、凡て我が與ふべき盡すべきの友なり、嚴肅、敬虔の思、是に於て乎發し、責任あるの言行、是に於て乎生ず、コリント後書に曰く『われら恩慈を蒙りて此の職を受けたれば敢て臆せず、耻べき隱匿たる事を棄て詭譎を行ず神の道を混さず眞理を顯して神の前に己を衆の人の良心に質すなり』是眞正英傑の語、吾人若し眞實に祈禱し、眞實に基督に賴らば、豈此境に至らざらんや、何ぞ自ら卑々屈々、學位を盲拜し、洋行歸りを盲拜し、古英雄を盲拜して、自己の進歩の遲々たるに甘んずるが如きとあるべけんや、

昔しは司馬德操、徐元直に謂て曰く『英雄豪傑今ま眼前にあり』と、敬愛する青年諸氏よ、單に書籍上にのみ英雄を求むると勿れ、卿等の眼前に求めよ、更に卿等の心裏に求めよ、基督曰く『神の國は爾曹の裏にあり』と、斯の如く英雄の卵は、吾人の心裏にあるなり、たゞ吾人は神に謙遜に、人に慈愛なるを要す、神の士卒は世の大將なり、神の小羔は世の眞英雄なり。

小説

我牢獄

（客員）脱蟬子

もし我にいかなる罪あるかを問はゞ我は答ふる事を得ざるあり、然れども我は牢獄の中にあり。もし我を拘縛する者の誰なるを問はゞ我は是を知らずと答ふるの外なかるべし。我は天性怯懦にして強盗殺人の罪を犯すべき猛勇なし、豆大の昆蟲を害ふても我心には重き傷痍を受けたらむと思ふなるに法律の手をして我を縛せしむる如きはいかでか我が爲し得るところならんや。政治上の罪は世人の羨むところと聞けど我は之を喜ばず、一瞬時の利害に拘々して空しく抗する事は余の爲す能はざるところなればなり。我は識らず我は悟らず如何なる罪によりて繫縛の身となりしかを。

然れども事實として我は牢獄の中にあるなり。今更に歳の數を算ふるもうるさし、兎に角に我は數尺の牢室に禁籠せられつゝあるなり。我が投ぜられたる獄室は世の常の獄室とは異なりて、全く我を孤寂に委せり、古代の獄吏も近世の看守も我が獄室を守るものにあらず。我獄室の搆造も大に世の監獄とは差へり、先づ我が坐する、否坐せしめらるゝ所といへば天然の巖石にして、余を圍むには堅固なる鐵塀あり、余を繫ぐには鋼鐵の連鎖あり、之に加ふるに東側の巖端には危ふく懸れる倒石ありて我を脅かし、西方の鐵窓には巨大なる惡蛇を住ませて我を怖れしめ、前面には猛虎の檻ありて、我室内に向けて戸を開きあり、後面には彼の印度あたりにありといふ毒蝮の尾の鈴斷間なく我が耳に響きたり。

我は生れながらにして此獄室にありしにあらず。もしこの獄室を我生涯の第二期とするを得ば我は慥かに其一期を持ちしなり。その第一期に於ては我も有りと有らゆる自由を有ち、行かんと欲するところに行き、住まらんと欲する所に住まりしなり。われはこの第一期と第二期との甚だ相懸絶する者なる事を知る、則ち一は自由の世にして他は牢囚の世なればなり、然れども斯くも懸絶したるうつりゆきを我は識らざりしなり、我を囚へたるものゝ誰なりしやを知らざりしなり、今にして思へば夢と夢とが相接續する如く我生涯の一期と二期とは懵々たる中にうつりかはりたるなるべし。我は今この獄室にありて想ひを現在に寄すると能はず、もし之を爲すこと

あらば我は絶望の淵に臨める嬰兒なり、然れども我は先きに在りし世を記憶するが故に希望あり、第一期といふ名稱は面白からず、是を故鄕と呼ばまし、然り故鄕なり、我が想思の注ぐところ、我が希望の湧くところ、我が最後をかくるところ、この故鄕こそ我に對して我が今日の牢獄を厭はしむる者なれ、もしわれに故鄕なかりせば、もしわれにこの想望なかりせば、我は此獄室をもて金殿玉樓と思ひ了しつゝ、樂き娑婆世界と歡呼しつゝ、五十年の生涯誠とに安逸に過ぐるなるべし。

我は我天地を數尺の大さと看做すなり、然れども數尺と算するも人間の業に外ならず、これを數萬尺と算ふるも同じく人間の業なり、要するに天地の廣狹は心の廣狹にありて存するなり、然るに怪しくも我は天地を數尺の廣さとして己れが坐するところを牢獄と認む、然り牢獄なり、人間の形せる獄吏は來らずとも折々に見舞ひ來るもの是れ一種の獄吏に外ならず、名譽是なり權勢是なり富貴是なり榮達是なり、是等のもの我に對する異樣の獄吏にてあるなり。

彼等は我に對しては獄吏と見ゆれども或一部の人には天使の如くにあるなり、彼等が人々を折檻する時に人々は無上の快樂を感ずるなり、我眼暈れるか彼等の眼盲ひたる乎、之を斷ずる者は誰ぞ。

デンマルクの狂公子を通じて沙翁の歌ひたる如くに我は天と地との間を蝠ひめぐる一痴漢なり、崇重なる儀容をなし、威嚴ある容貌を備へ、能く談じ、能く解し、能く泣き、能く笑ふも人間は遂に何のたはれごとなるべきやを疑へり、然り我が五十年の生涯に萬物の靈長として傲るべき日は幾日あるべき、我は我を卑うするにあらず、我自ら我を高うせんとするにもあらず、唯だ我が本我のいかに莊嚴を飾らしむるも遂に自らを欺くに忍びざるなり。

我は如何に禪僧の如くに悟つてのけんと試むるとも我が心宮を觀ずること甚深なれば、なるほど我は到底悟つてのけること能はざるを知る、風流の道も我を誘惑する事こそあれ我をして心魂を委ねて趣味と稱する魔力に妖魅せらるゝに甘んぜしめず。常に謂へらく人間はいかにいかなる高尙の度に達するとも必竟するに或種類の偶像に翫弄せらるゝに過ぎず、悟るといふも、悟ること能はざるが故に悟るなり、もし悟るといふことを全然悟らざるといふ事に比ぶれば多少は

靜平にして澹平たる妙味ありと雖是も一種の階級のみ、人間は遂に多く辨ぜざれば多く默し、多く泣かざれば多く笑ひ、一の偶像に就かざれば他の偶像を禮す、一の獄吏に笞責せられざれば他の獄吏の笞責に遭ふ、これも是非なし獄吏と天使とを識別することを能はざる盲眼をいかにせむ。

奇しきかな我は吾天地を牢獄と觀ずると共に我が靈魂の半塊を牢獄の外に置くが如き心地するとあり。牢獄の外に三千乃至三萬の世界ありとも我には差等なし、我は我牢獄以外を我が故郷と呼ぶが故に我が想思の趣くところは廣濶なる一大世界あるのみ、而して此大世界に我れは吾が悲戀を湊中すべき者を有せり。捕はれてこの牢室に入りしより凡ての記憶は霧散し去り、已れの生年をさへ忘じ果てたるにも拘はらず我は一個の忘ずることを能はざる者を有せり、啻に忘ずること能はざるのみならず數學的乘數を以て追々に廣がり行くとも消ゆることはあらず、木葉は年々歳々新まり行くべきも我が悲戀は新たまりたることはなくしていや茂るのみ、江水は時々刻々に流れ去れども我悲戀はよどみよどみて漫々たる洋海をなすのみ、不思議といふべきは我戀なり。

もし我が想中に立入りて我戀ふ人の姿を尋ぬれば我は誤りたる報道を爲すべきにより、言はぬ事なり言はぬ事なり、雷音洞主が言へりし如く我は彼女の三百幾つと數ふる何の骨を愛づると云ふにあらず、何の皮を好しと云ふにあらず、おもしろしと云ふにあらず、樂しと云ふにあらず、我は白狀す我が彼女を相見し第一回の會合に於て我靈魂は其半部を失ひて彼女の中に入り、彼女の靈魂の半部は斷れて我中に入り、我は彼女の半部と我が半部とを有し、彼女も我が半分と彼女の半部とを有することゝなりしなり。然れども彼女は彼女の半部と我の半部とを以て彼女の靈魂となすと能はず、我も亦た我が半部と彼女の半部とを以て、我靈魂と爲すと能はず、この半裁したる二靈魂が合して一になるにあらざれば彼女も我も圓成せる靈魂を有するとは言ひ難かるべし。然るに我はゆくりなくも何物かの手に捕はれて牢々たる四牢の中にあり、もし彼女をして我と共にこの四牢の中にあらしめばこの四牢も四牢にあらずなるべし、否な彼女とは言はず、前にも言へりし如く我が彼女を愛するは其骨にあらず其皮にあらず、其魂にてあれば我は其魂をこの四牢の中に得なむと欲ふのみ。

日光を遮斷する鐵塀は比しく彼女をも我より離隔して雁の通ふべき空もなし、夢てふもの世にたのむべきものならば我は彼女と相談る時なきにあらず、然れどもその夢もはかなや始めに我をたばかりて後にはおそろしき悪蛇の我を巻きしむるに終る事多し。眠りを甘きものと昔しの人は言ひけれど我は眠りの中に熱汗に浴することあり。或時は我手して露の玉に濕ふ花の頭をうち破る夢を見、又た或時は春に後れて孤飛する雌蝶の羽がひを我が杖の先にて打ち落す事もあり、かつて暴らかりしものを彼女に會ひてより和らげられし我心も度々の夢に虎伏す野に迷ひ獅子吼ゆる洞に投げられしより再び暴れに暴れて我ながらあさましき心となれり。眠りはしかく我に頼めなき者となりしかど、もし現の味氣なきに較ぶれば欺かるゝ丈も慰めらるゝひまあるなり。

現に於ける我が悲戀は雪風凛々たる冬の野に葉落ち枝折れたる枯木のひとり立つよりも激しかるべし。然り、我は已でに冬の寒さに慣れたり、慣れしと云ふにはあらねど我はこれに怖るゝ心を失ひたり、夏の熱さにも我は我が腸を沸かす如きことは無くなれり、唯だ我九腸を裂きて又た裂くものは我が戀なり、戀ゆゑに惱ゆるにあらず牢獄の爲に悶ゆるなり、我は籠中にあるを苦しむよりも我が半魂の行衞の爲に血涙を絞るなり。雷音洞主の風流は戀愛を以て牢獄を造り、己れ是に入りて然る後に是を出でたり、然れども我が不風流は牢獄の中に捕繫せられて然る後に戀愛の爲に苦しむ、我が牢獄は我を殺す爲に設けられたり、我も亦た我牢獄にありて死することを憂ひとはせざれども我をして死す能はざらしむるもの則ち戀愛なり、而して彼は我を生かしむることをもせず、空しく我をして彼のデンマルクの狂公子の如く、我母が我を生まざりしならばと打ち喞たしむるのみ。

春や來しと覺ゆるなるに我牢室を距ること數歩の地に黃鳥の來鳴くことありて我耳を奪ひ我魂を奪ひ、我をしてしばらく故郷に歸り戀人の家に到る思ひあらしむ、その聲を我戀人の聲と思ふて聽く時に戀人の姿は我前にあり、一笑して我を惱殺する昔日の色香は見えず、愁涙の蒼頬に流れて紅ひ欄干たるを見るのみ。

軒端數分の間隙よりくゞり入るは世の人の嫦娥とかあだなすなる天女なれども、我意中人の音信を傳へ入るゝことをあさ

ねば我は振りかへり見るともせず。いづこの庭にうへたる花にやあらむ、折にふれては妙なるかほりを風がもて來るともあれど我戀ふ人の魂をこゝに呼び出すべき香にてもなければ要もなし、氣まぐれものゝ蝙蝠風勢が我が寂寥の調を破らんとてもぐり入ることもあれど、捉へんには竿なし、好し捉ふるとも我が自由は彼の自由を奪ふことによりて回復すべきにあらず、況して我戀人の姿をこの見苦しき半獸半鳥よりうつし出づることの望むべからざるをや。

是の如きもの我牢獄なり、是の如きもの我が戀愛なり、世は我に對して害を加へず、我も世に對して害を加へざるに我は斯く籠囚の身となれり。我は今無言なり、膝を折りて柱に凭れ齒を咬み眼を瞑しつゝあり。知覺我を離れんとす死の刺は我が後に來りて機を覗へり。「死は」近づけり、然れどもこの時の死は生よりもたのしきなり。我が生ける間の「明」よりも今ま死する際の「薄闇」は我に取りてありがたし。暗黒!、暗黒!、我が行くところは關り知らず。死も亦た眠りの一種なるかも「眠」りならば夢の一つも見ざる眠りにてあれよ。をさらばなり、をさらばなり。

透谷庵主透谷橋外の市寓に倦みて近頃高輪の閑地に新庵を結べり。樹幽に水清く尤も淨念を養ふに便あり。適ま女學雜誌の擴張に際して主筆氏の許すところとなりて舊作を訂し紙上に載せんとす。こは其第一なり、もしそれ全篇の拮掘贅牙にして意義も亦た諒し難きところ多きに至りては余の文藻に乏しきの罪として深く責め玉はざらんことを願ふ。たゞ篇中の思想の頑癖に至りては或は今日の余の思想とは異なるところなり、友人諸君の幸にして余が爲に甚く憂ひ玉はざらんことを。

（著者附記）

吾宿の花

若松しづ子譯

右のつゞきは、赤表、乙の卷にてかゝぐ。同人筆

人の樣々

を、白表、この卷の次の號よりかゝぐべし。

迎春行

終末の一篇

右は、赤表、乙の卷の次週發兌の分にて掲載せん。

文藝

西行詠花詞十八首（寄贈）無名氏撰

願はくは花の下にて春死なん
　そのきさらぎのもち月のころ。
思ひやるこゝろや花にゆかざらん
　霞こめたるみよし野のやま。
おしなべて花の盛になりにけり
　山のはごとにかゝるしらゆき。
花見ればそのいはれとはなけれども
　心のうちぞくるしかりける。
花ちらで月はくもらぬ世なりせば
　ものを思はぬわが身ならまし。
花にそむ心はいかでのこりけん
　すてはてゝきとおもふ我身に。
佛にはさくらの花をたてまつれ
　わが後の世を人とふらはゞ。
何とかや世にあり難き名をしたる
　花に櫻にまさりしもせし。

いかでわれ此世の外の思ひでに
　風をいとはで花をながめん。
惜まれぬ身だにも世にはあるものを
　あなあやにくの花のこゝろや。
うき世にはとゞめおかじと春風の
　ちらすは花を惜むなりけり。
思へたゞ花のなからん木のもとに
　何をかげにて我身すまなん。
こずゑふく風の心はいかゞせん
　したがふ花のうらめしきかな。
木のもとの花に今宵はうづもれて
　あかぬこずゑをおもひあかさん。
木のもとの旅ねをすれば吉野山
　花のふすまを着する春かぜ。
雪と見てかげに櫻のみだるれば
　花のかさ着る春の夜の月。
おぼつかな春の心の花にのみ
　いづれの年かうかれそめけん。
たれかまた花をたづねて吉野山
　苔ふみわくる岩つたふらん。

雜録

基督の模範の序

此書の原本は四百年前の昔より熱信なる教徒の爲に其慰籍の源となりたるのみか「世のさま〲なる人」に普ねく持て囃やされたる者なりといへば今更余が新たに其價値を紹介するを須たず。ルッソーの如き、モリエーの如き、コーヂルの如きサミユエル、ジヨンソンの如き、先哲をして深くこれに注意せしめたる一事は以て能く此書の凡ならざることを證して餘りありと云ふ可し。

博士ライプニッツ曰く此書は、古今に比類稀なる論文なり、啻に其言語を賞讃するに止まらず、謹んで其訓ふる處を行ふものは幸也と。詩人ラマルチンは此書を喩えて溢るゝ斗り福音の甘味を盛りたる鉢の如しと云へり。イタリヤなるヴァチカンの書籍館に版を改めたる度々の原書、幷に此書のあらゆる譯本を秘藏せり。そが中に日本文の譯書をも見たりと傳ふる者あれど、此館に貯藏せる書は得て本邦の益とす可きに非ず、故にタマス、ア、ケムピスが述しといふ貴重なる宗教思想の譯書を今試みられたるものは老成なる基督教信徒の爲に、必然幸福となること疑を容れず。

聖經に明らかなる人は、此書を繙きて過まつこと尠かるべし。されど、總て是を手にする人に對して余は使徒ポーロの言を寄せんとす、

凡てのこと考へて其善きものを守るべし。

千八百九十二年四月廿九日

ヴー、エス、ヴェーベッキ記

若松賤子譯

天地管見

六合學人録

○小引

暗室に潜みて思を凝せば、天理あり〱として明けし。狹座に蹲こもりて心を固むる時は、世界ひろ〲として大ひなり。靜念沈思の夕べ、得ならぬ景色を誰と共にか賞め賛えん。早起快然の朝た、雀に傚つて無限の喜びを囀づるべきや否や。

意會し識に了する時、はた何人にか所思を告白せん。わが、學ぶは、文字の爲にあらず、眞や、世の實相を觀じ、人の運命歸趣を確認せんとてなり。穿窮の末、拮据して略ぼ要領を握りたるものもなきにあらず。其儘地中に埋めて沒するは、汲上たる水を直ちに溝内に投ずる心地す。あわれ、書き記して白紙に訴へばや。たとひ幸わひにして、大方の知己に見らるゝとあらずとも、異日自から之を復讀して、故舊に會ふの心地せんと。則はち折々に書き列ねたるものなるを、今ま請はるゝまゝに遂に左に掲げしむるとはなしける。

(一) 鑑識の明

人を知るの明は何の爲に用ありや。君子は道の爲に欺かるゝを恨みとせず。欺かるゝとを懼るゝが故に、人を知らんとするは狹まし。心、天地と合し、氣宇宙を呑む、もし一視同仁の量を有たんとせば、人の性格の何如んあらんは關する所にあらず。たゞ吾道を行ふのみ。此時に當り、何の用ありてか人を知るとを要めん。

人を知るの明は何の爲に用ありや。曰く、人の益を計るが爲に用あり。人は其年齡によりて食物を異にせざる可らず、幼兒は乳を要め、老者は軟食を欲す。もし其品を撰ばざれば、山海の珍味も之に益するとなし。吾德を人に施こし、吾力を人に給し、以て人の智德を增長せしめんと欲するに於ても、亦先づ其人の性格何如んを知らずんばある可らず。此性格に隨ひて施給する所ろを增減左右するを、眞正の敎育、至當の感化となす。

諸葛丞相曰く、人を知るの道七あり、一に曰く、之を問ふに是非を以てし而して其志を觀る。二に曰く、之を窮むるに辭辨を以てし而して其變を觀る。三に曰く、之に咨るに計謀を以てし而して其識を觀る。四に曰く、之に告ぐるに禍難を以てし而して其勇を觀る。五に曰く、之に醉はすに酒を以てし而して其性を觀る。六に曰く、之に臨むに利を以てし而して其廉を觀る。七に曰く、之に期するに事を以てし而して其の信を觀る。

余は信ず、眞率之に問ふに、其の人の自信自任する所を以てし、而して其の言行の經歷及び將來に合せ鑑みるの法最良なりと。

立脚の地俊傑を産出す

（社員）　畜勦子

提兵百萬西湖上、立馬呉山第一峰と放言壯語せし青年は、今や大に其數を減じたり、殖民、貿易、牧畜の思想は、當今流行の壯圖となりぬ。殖民牧畜素より慶賀すべしと雖も、一に心を之れに傾けて己が立脚の地に注意せざるを歎ず。早熟の青年修養未だ半に達せざるに、早く既に一擧外航を試み、或は踈算の企圖に走り計畫半に至らずして脆くも失敗す。成敗敢て意とせずといふも、輕踏の瘢瘡は二三年にして平愈するものに非ずは又得がたき學年を敗學の下に葬る、惜みても尚餘りあり、吾人が歩若は立脚の地より初まる。韓非子曰、目能く百歩の外を見るも、而して自から其の瞼を見る能はずと。分限を忘れ、職分を今日に盡さゞる者は、是れ俊傑となること能はず。昔は海牙國西班牙と隙あり西の使節和議の爲めに海に赴く、或日海牙の人五人或は十人小舟より陸に上りて、草の上に座を占め、麵包と牛酪を出し中食せり、此時西の使節斯比諾拉は、傍の農夫に彼の旅人は誰なるやと問ふ、彼は和國の委員にして、我等の尊敬すべき主人なりと答ふ。斯比諾拉は忽ち同僚に私語て、我等必ず和睦を成すべし、彼の人の如き者は征服せらるべき人に非ずと曰り、外患多端の日に尚ほ内憂して質素勤儉を守り、太く人民の勞苦を思ひやる海國の士は、敵をも威服せしめたる俊傑なり、故に吾人は斷言す、能く明日を思ふと共に、今日を重んじ、能く進むべき地を望むと共に、立脚の地に注意せざる者は、俊傑となること能はずと。

批評

○三十年史

木村芥舟氏の著なり。謹密の記性を以て現に其路に當られたる人の著書なれば、尋常輕才の士が盲摩臆測を以て舊新變更の大時期を寫したるとは異なる。ことに一部八百葉の記事、悉とく實錄實證にして、妄りに著者の意見を加えざるに、大躰の着想一貫、片々の記事悉とく輻湊して、皆な開國外交の由緣變遷を推明するに歸す。讀者を活益すると極めて多し。而して、記事の材料從來世に聞えざりしもの少なからず、此の著書によりて初めて當時の眞情を悟りたる節々最と多し。

取分け、合衆國使節トウンセンド、ハルリス、堀田備中守と對話の覺書の如き、三十年后の讀者をして汗背驚心せしむるものあり、當日の光景歴々として眼前に現はる。其他、この類擧て數ふ可からず、苟くも日本開國の運移を穿索せんとするものは、是非とも一讀すべきもの也。本編、福澤諭吉氏の文は、眞情俠氣流露して尤とも見るべき價値あり。

○二人女（紅葉山人著、春陽堂梓）　透谷

「むきたまご」と「おぼろ舟」とを合綴して一卷となす。「むき玉子」の書中の主人公なる畫家の技よりも紅葉の硯の花の技めでたかるべし、婬蕩なる社界の現象を寫すのみが紅葉の寫實主義にはあらずして此書の如く風韻の備はりて潔白なる作を爲す紅葉も亦た多能の文士なるかな。

「おぼろ舟」に至りては大に難なり。學海居士の如きは此書を評して其勸懲主義を以て鞭責を加へられたる事ありき。余も之を通讀する際發端より三四回迄は快からざる感想を以て滿され居しが讀んでお藤の落魄より天運彼をして淑節を破らしむるに至り流石は紅葉の整然たる筆法に感じ又た一方に向ひては轉た悽惻に堪へざりし、お藤が輕薄男の玩弄物となり神聖なる愛情を捧げて思ふまゝに遊翫せしむるところを記す何等の妙筆ぞ、一轉して老母の事態を描き再轉して浮世の有樣を寫す、輕薄なる商人は利を重んじて北海に去り汚されつつも神聖なるお藤が彼を慕ひて病に伏すところなど眞に迫りて面白し。滔々たる婬靡の世界恐く輕薄淺膚なる者のみにあらず必らずして斯般可憐の孃子が暗燈の下に萬斛の愁涙を灑ぐもの多かるべし。

輕薄なる男と知らざりしか、知ざりしとも、左程までに人を戀ふにはいかに優しき心の處女なりけむ。われは此書の構想と技とを愛賞すと雖われ自らは多讀するに堪へざるなり。

鮑菴十種、
關原戰史、

は次號にて
批評すべし。

時事

○討論仕合の禮容

士君子の相ひ對するや禮なかる可らず、胸底心裏より發する神聖なる言語は靈美ならざる可らず、文章は千古の物なり下郎匹夫の語調に倣ふ可らざる也。われ近頃の演説と文章とを觀て、遺憾の念に切まるもの多し。むかし、武士の相戰ふや各々禮あり、劔下に花を笑ましめ、死骨に香を薰せしむ、百世の下尚ほ床しげなり。明治年代の士君子何んすれぞ養ふとの足らざるや。夫れ、國會の議員は當世の武士なり、新聞紙上の論客は、文明時代の戰者なり、須からく恥かしき處行なかるべし。方今の言論文章を見聞して、士君子の躰面の爲に歎かざるものあらば、世は末世なり。

○日本治安の文明度

白晝晴朝、劔を揮つて路上に人を切るものあり。暴狀も亦た極まる哉。暗殺は卑怯の至りなり、左れど暗殺は尙ほ路上横殺時代の后に生ず。政府あり、警察官ある文明時代の治下、主府の街上に於て如此きとあり得るとせば、我が日本國治安の開化は何程の階級に存するかを疑ふ。痛恨限りなし。

○學者責任論

法典實施延期の可否は別問題とす。但だ其延期論者の言ふ所に至ては、頗ぶる聞苦しきものあり。新法典は倫理を紊ると云ふの條、基督教を論ずる一段の如きは、もし之をして其の誤解より出るとせば、日本國の學士の品格を下ると少なからず。もし之を一の權略上の立論なりとせば、諸君は外交問題の大事を忘却するものと云つべし。余は、本邦學者の言動何如にも輕々しきとを歎き、平素恨意淺からず、此回の事に至りて、いよ〳〵其の感を深うす。學者は一國最優等の人種なり。其一言一行國民同胞の上に影響するは至大にてあるべきものと自覺せざる可らず。學理に對して常に謙遜なる書生の如きは願はし、國民に對していつ迄も書生らしきは學者の本分にあらざる也。諸君希はくは少しく自重せよ。吾黨は、彼の論文が外國新聞紙上に譯載せらるゝとを思ふて、慚愧にたえず。

○大臣と貴族院

貴族院に於ける法典實施延期案の議事に際し、大臣諸氏の熱

心は感ずるに餘りあれど、其言論の足らずして而も胸中の切迫せるに至ては、少しく憾なき能はす。然れども、貴族院の議事が、斯迄で諸氏をして煩悶せしむるの形勢あるは寧ろ喜こぶべきもの也。

○我日本

敬愛すべき新聞紙、我が「日本」に深く望を寄す。吾黨一々君と所見を同うせず、或事件に於ては正反對の意見を執らずんばあらず。然れども吾黨は君を措いて他の何處に討議の良友を得ん。君希はくば清健にして、いよ〳〵邦家の爲に正論せよ。もしまた評論部内に今一きは莊重の文を增し、彼の冷嘲輕罵の細々語を全く脱除するに至らば、日本の紙上光彩更に一段を增さん。

○政府と保守黨

政府は法典を實施せんとし、條約を改正せんとし、鐵道軍艦を新造せんとす、計畫する所ろ兎に角改進主義の政策にあらざるはなし。保守主義の人、何事に於て此の政府の意見と相合するや。吾黨は、明治政府と保守黨と何の因緣によりて佇睦するやの所以を解せず。

片々

可愛子編

●有栖川妃殿下の御招待　婦人共立育兒會は會員千餘名に達し、益々盛大に赴けるが、五月廿七日午後總裁有栖川宮御息所殿下には、會員一同を霞ヶ關自邸へ御招きありて、會頭鍋島侯爵夫人を始め會員無慮三百餘名參邸し、總裁殿下には會員一同に叮嚀なる御挨拶あり、終て茶菓の饗應あり、邸内を拜觀して午後四時三十分頃一同退散したりと聞けり。

●安生堂產院慈善會　本所横網町二丁目十四番地安生堂產院は、貧家の產婦を救助治療するの目的にて、從來紳士淑女の之に贊成するもの少からず、露國皇太子殿下よりも若干の金圓を贈與せられ、其他慈善踏舞會等の寄附金等もありしが、過日歌舞伎座を借受けて慈善會を開き、寄贈の物品を販賣し、又た其餘興として團洲一座の狂言を演ぜし由。

●婦人會を設置せんとす　三重縣津市上野町に於ては、近頃婦人會を設置せんとて、心ある人々の頻りに奔走せしも、其甲斐なく、暫く中止の姿なりしが、此度は某夫人の發起にて、婦人慈善會を設置せんと、目下計畫中の由。

●女學別課設立　宮城縣仙臺市私立元寺小路高等尋常小學校にては、學齡外の女子に須要なる學術技藝を教授し、淑德才媛の女子を養成せんとの目的にて別課を設立する由、當分生徒は五十名を以て一學級とし、小學訓導二名をして之を擔當せしめ、音樂及び外國書は、外國教師四名をして擔當せしむと云ふ。

●巴里諸專門學校　に於て專門の學を修むる婦人の數は、千八百九十年に於て百五十二人なりしも、現今は二百五十二人に至れり、其の內醫學校に於て醫學を修するものは佛人十八人、英人六人、ローマニヤ人三人、土耳古人二人、希臘人一人、露國人百三人以上なり。

●男女文官試驗の及落　北米合衆國文官試驗委員の最近報告に據れば、及第者の割合は女子に多くして、落第者の割合は男子に多し、即ち寫字部の試驗に於て、女子の落第したる者は六人に就き僅か一人なるに、男子の落第者は總數の半に達せり、之れより高等なる科目の試驗に於て、男子の落第者は三分の一なるに、女子の落第者は四分の一に過ぎず、藥物科の書記を採用するが爲め、前に示すよりも一層困難なる試驗に及第したる者は、男子に於て一人もあらざるに、女子に在ては四人に就て三人を出し、總躰に就て及落の割合を求れば、女子の及第者は男子に比して二倍ありしと。

●昔時の婦人と現時の婦人　醫學雜誌の報ずる所によれば、現時婦人の身躰は、百年或は五十年以前の婦人より强健に赴きたりとのとなり。

◎編者曰す　白表の女學雜誌には、緊要なる女報の大略を掲載す、內外女報の詳細なる記事は、赤表の女學雜誌に掲載すべし。

孤兒之友

北海孤兒院

同孤兒院は素志の酪農は本春より始めり、同院の上に幸なる二兄一姉身を献ぜり、此兄姉は何れも實業に經驗ありて、今や耕作、牧畜、養蠶の三業に着手せらる特に山羊は孤兒の飼養に至極適當なりさの報に接し、欣然さして感謝す余は此の頃 各孤兒院の衛生上に付切に感ずるものあり、各孤兒院の食料に滋養分の甚だ乏しき之れなり、然れども高貴の食料を他より仰ぐとの、孤兒院が旨に應ずさ言ば余は、更に之を他に得るの道あり、牧兎是れなり、寔に飼養の易き繁殖の速なる、蓋し養兎に過るものなかるべし、其飼養法は余別に說あり、其種類に至ては大に選擇せざるべからず、先づ佛國種の俗に「茶ゴマ」さ稱するものゝ雜種最も可なり、然し山羊の如きも又孤兒に好適の產畜なり

東京救育院

同院は假に、築地飯田町一番地にあり、養ふ孤兒拾七人あり、小宮珠君之を監督す、目下立教女學校の近傍に孤兒の校舍新築せられ、昨今爰に移さる、而して此の孤兒が教育は、立教女學校の教員生徒の方々、之に當り給へり、且つ貧兒廿餘人玆に通學せり。

孤女學院

同院の孤女に先頃熱病を引起せし者ありて、追々傳染せしが如き感ありて、大須賀君等之を大に憂慮せられたるが、幸に今や病魔の力漸次減却し、他日全愈すべし、病其の最も重き女兒二名は、堀川、渡邊の兩醫師等の盡力にて、帝國大學に入院せり、因に記す同院に追々力を添ゆる慈善者起り、切に感謝す、且つ米國の婦人勞働會も亦同院の爲め力を添へらるゝとさなれりさ。

九州孤兒院

九州孤兒院は、福岡縣三池郡にあり、宇佐溫來彦君の創設にかゝるものにして、震災地より數名の孤兒を携へて教育さる、同君が事業甚だ至難中に立てり、請ふ同感の人同君の爲に祈り給へ。

震災孤女を養育せむと望む人

曩に一紳士我孤兒の友に來られ、震災地の孤女を貰ひ受け、養ひたしさ申込れたり、其の望めるは七才位にて、血統の正しき者を得たしさ云ふ、若し其望まれたるに應ずる所の孤女あらば、斯る眞家に養はるゝこと、其人にとり幸のとなるべし。

●第二回孤兒の友會報告

●入之部

金壹圓三拾二錢五厘　第一回の寄附　孤兒の友準備金の内へ
金一圓〇三錢　女學雜誌社より紙屑代寄附　同
金五錢　小學校生徒　同
金壹圓　無名氏　同
金五拾五錢　女學雜誌社の紙屑代寄附　同
金拾錢　無名氏　同
金四拾壹錢五厘　女學雜誌社の紙屑代寄附　同
準備金四圓四拾七錢

●出之部

金壹圓〇四錢　第一回仕拂方
金三拾錢　博愛社へ籾種二種寄贈代
金三拾壹錢　右運賃諸掛り
金拾貳錢　仙台孤兒園へ雜誌二册寄附代
金五錢　孤兒の友の帳簿一册
金三拾錢　博愛社へ稲作改良法二册寄贈代
金四錢　右郵便税
金二拾錢　博愛社へ農業講義錄一册贈
金六錢　右郵便税
金二拾錢　北海道孤兒院へ農業講義錄寄贈
金六錢　右郵税
金六錢　博愛社へ金五圓送金費
金二拾錢　孤兒の友の印一個代
金四拾二錢　郵便稅諸雜費

合計金三圓也

北海孤兒院報告

○寄附品（廿五年三月十四日ヨリ四月三十日マデ）

一菓子パン三袋　北海道紋鼈　岩本粂三郎
一饅頭一袋　仝　田村レツ
一菓子二袋　仝　鎌田武三郎
一饅頭三重　仝　菊地森藏
一枕五個　仝　小山田虎
一枕三個　仝　齋藤眞知
一小鳥二十羽
一漬物一重　仝　村木孝英
一菓子二袋　仝　新妻雄一郎
一煎餅一袋　仝　大槻靜尾
一黍團子二重　仝　星野夫人
一生海苔一重　仝　菊地森藏
一雛五羽　仝　某氏
一教塲用机四脚　仝　戸長役塲有志者
一石盤七枚　仝　紋鼈小學校教員中
一石筆七本　仝　増野宗平
一半紙四百枚　仝　青木秀吉
一綿フランネル一丈二尺仝　中村重次郎
一夏芋壹斗　仝　齋藤銕三郎
一鶉豆三升　仝　同人
一菓子一袋　仝　仝ツヤ
一女學雜誌三百九號一册東京　女學雜誌社孤兒の友
一仝三百十一號ヨリ三百十三號マデ東京同
一夏芋三升其外人参等北海道紋鼈　村木孝英
一五升釜一個　仝　齋藤眞知
一雛一羽　仝　村木清之進
一菓子一袋　仝　森夫人
一菓子パン四十　仝　森時定
一牛蒡一把　仝　鹽野宗平
一種物色々　仝　大槻宗之進
一農業講義一册　東京　女學雜誌社孤兒の友
一鶉豆三升　紋鼈　中澤正

一石盤二枚石筆三本鉛筆二本毛糸手帳二冊　函館　岩谷よしの
一シャツ　一枚　仝　無名氏
一菓子　一袋　永田礪

○寄附金

一金廿錢　北海道紋鼈　兵頭眷野
一仝貳圓七拾錢　岩手縣花卷　佐藤榮太郎取次
一金拾五圓　名古屋　名古屋基督教徒救濟事務所
一金壹圓　北海道紋鼈　村上恒三郎
一金壹圓　埼玉縣　天沼恒三郎
一金壹圓　北海道紋鼈　鈴木雅彥
一金壹圓拾三錢　函館　有志者
一金壹圓　岩手縣　多田クラ

○賣上代金

一金拾九錢貳厘　雞一羽
一同五拾五錢　靴下

總計金貳拾三圓七拾七錢貳厘

○支出金

總計金六拾五圓九拾八錢六厘

內

一金拾六圓六錢　白米及雜穀
一仝貳圓拾六錢貳厘　炭薪油
一仝壹圓五拾九錢　端書切手及電報
一仝三拾三錢壹厘　紙類
一仝拾壹圓四拾六錢　家屋修繕
一仝七圓八拾錢五厘　家具及什器
一仝三錢　種痘料
一仝三圓九錢五厘　敎育用具
一仝三拾四錢　下駄類
一金四拾貳錢四厘　魚類
一仝廿九錢六厘　野菜類
一仝貳圓三拾貳錢六厘　味噌鹽砂糖
一仝三拾三錢　種物
一仝九圓四拾五錢五厘　農具
一仝貳圓九拾三錢四厘　衣類
一仝拾四錢八厘　勝手用雜品
一仝貳圓四拾六錢　毛糸三斤及運賃
一仝七拾四錢　秣
一仝三圓五拾錢　肥料
一仝五拾錢　家賃

○現在員

拾五名

內

孤兒九名（內新入生二名）

預兒二名　農員四名

明治廿五年五月

北海道膽振國有珠郡東紋鼈村百廿九番地

北海孤兒院

廢物利用救助會趣意書

本會の設置は愛憐會治療所の施療を爲すに當り貧民社會に醜鼻の事多きを實視するに起因す茲に一患者あり施療の爲に服藥或は手術を受くるさ雖ども家には既に賣るべき餘財なし悲哉其兒孫は患者の枕上に聚り氣息の奄々たる者に飢餓の苦を訴ふ其實況を視る者は實に斷腸酸鼻の情に堪へ難し本會は玆に視るありて爲に廢物利用の道に由り貧民施療に加ふるに其家族の飢寒の苦を脫がれしめんさ欲す誠に思へ其妻其兒の飢寒を叫ふに當りては患者豈獨り藥劑を服すの情あらんや破衾の下涙の慘々たるもあらん希ば江湖の諸君よ諸君が一家の廢物を（例せば紙屑或は空瓶の如き）賣りし些少の金錢を此の慈惠の道に利用し給はん事を噫、此の零碎の物品厘毛の錢貨諸君の家に於ては殆ど寸毫も家に利する者あらざる可しさ雖も若し之を蓄積して本會の救助に充つる時は數百の兒子數十の家爲に炊烟を上げて粒食するの樂あるを思へ之を見るの患者之を食するの貧兒其快樂や諸君の測り知る可き事に非ず偶次此の稿を草する時に或家より金拾八錢を寄送せり此金は其家の少女二人去年の冬より小き紙屑籠を壁間に懸け日々其弟妹等が室中に散亂せしむる紙片を聚めて花簪を購求めんさ計りしものなりしが本會設置の事を聞き此の少女等が愛心は其粧飾の念を止めて其金額を寄送せしものなり昔時「キリスト」は奇跡のパンの屑を拾はしめて十二の籠に滿たしめたり試に思へ諸君が家に在る紙屑又は破瓶を集むる者は之を以て既に一家の業を立つる者にあらずや之を推して考ふる時には廢物を賣りて一戶の金錢は僅少なる物さ雖も之を百戶千戶に計る時は細流の合する所終に茫洋無邊の洪河を見るの理なり一戶さし一年に拾錢の金を寄送せらるゝ事あらば千戶にして百圓の金を見る事を得べし一家三人の家に於て一月三錢の紙屑等を得るに難からさる可し況や其家は中等の生計を爲し其家族は十人の上にあるものをや若し諸君にして廢物利用の方法を以て本會を助け給ふ者あらば一年に千圓の救助を爲すも決して至難の事に非ず嗚呼此の千圓は幾多の貧民に與へて病床の親を慰め凍飢の兒子を救ふもの也

明治廿五年六月

廢物利用救助會發起者

廢物利用救助會假規則

一本會は廢物利用救助會と稱す
一本會の目的は無告の貧窶孤獨を救助するにあるも愛憐會治療所施療患者危急の救助を爲すを以て主とす
一本會の事務所は愛憐會治療所內に置く
一本會は會長一名評議員五名幹事二名を以て諸般の事を辨理す
一本會は每月一回救助金受取人を會員の家に派出せしむ
一本會は救助金の額を定めず一ヶ月一錢以上受納す但し一時皆納又は臨時寄附金をも受納す
一本會は春期に救助集金收支及び執務の報告を爲し又總會を開き會則を更正し役員撰擧會務擴張の協議を爲す事あるべし

正誤

第三百九號孤兒の友報告、博多帶一本寄附者湯淺氏は○○氏の誤り又第三百十五號北海孤兒院第一回報中、金三圓也盛岡婦人會とあるは盛岡婦人慈善會の誤りにつき爰に正す

交詢案内

養兒

身元正しく健康なる三歳の孤兒（男）あり若し實子なきを憂ひ収養を望まるゝ仁あらば御相談可申との事詳細は下名宛御問合せあらば御回答申すべし

東京本郷 帝國大學寄宿舍 **高根虎松**

看護婦派出廣告

看護婦入用の節は御依頼に應し本會より派出致可申候
但地方へも差出申候●貧困者は無給の事

東京本郷區森川町壹番地第百九十號
慈善看護婦會

本會ハ從來滿十一年以上ノ少女既婚未婚晩學ノ婦人又終日修學ノ餘暇ナキ者ニ至ル迄來學シ得ラルヽ便ヲ計リ少女會員撰修手藝ノ四科ヲ設テ授業シ來リシ處今回各級**臨時募集**ス望ノ方ハ至急申込ルベシ欠員アリ

道修町八百屋町角
大坂婦人學習會

文學雜誌 城南評論

第三號

五月廿一日發兌（每月一回）
一冊定價六錢六冊前金三十三錢府外郵稅一冊五厘

發行所 芝區田村町六番地 城南評論社

通信女學第三期生新募廣告

學問隆盛の今日、女學の進步一と方ならず、凡そ年頃の娘君にして奮發學に就かぬは最と〳〵少なく、既に一家の妻となりし方にても晚學の勉強をさ〳〵年少の人に劣らぬも多し、概して何處の婦女子も皆學問と云ふとに心掛け凡そ此心掛なきものは當今の女德に欠けしやう思ふに至りぬ、因りて何處にも女學校の設けあり何處の娘君も玆に入學して日々の進步目覺しきとなるが、既に妻となり母となりて一家子女の掛念ある方々は最早家を出て通學すると出來ず又家に教師を引て教を受るも甚だ手數なれば今日の時世に斯る御婦人のみ此儘無學に終るべきかと心配する人も少なからず、此類の御婦人は何か家に在りて獨り稽古する工夫なきか又獨學に便利の書物はなきかと屢ば問合せあり、吾社之を以て遂に意を決し、昨及一昨年一月通信女學の仕組を新設し、每月一冊の講義錄を出版して、四方晚學の婦人居ながら普通の女學を獨り學びするの便に供へたるが、其十二月に至り、一ヶ年の課業を恙がなく卒へて、快ちよく全科を卒業したるもの八百餘名あり。然るに、去年一月申込の期に後れたる人々も少なからざるを以て、本年更に講義錄を再版し、改めて第三回の習讀者を募る。

教授科目左の如し。

萬國史、日本歷史、算術、簿記、理化學、生理學、動植物學、作文法文例、料理、歌詠方、女禮、和文讀本、漢文讀本、家政學（衞生、育兒、看病と合す）裁縫、圖入地理、英學。

教師は、醫學士三島通良、農學士寺尾熊三、吉田伸子、渡邊辰五郎諸氏其他重もに明治女學校の教員諸君に委賴し、專ら深切鄭寧を主意とす。

代價一冊前金三十二錢（無郵稅）、半年分前金一圓八十錢、一年分前金三圓五十錢、一切前金に非れば發送せず。

明治二十五年一月廿五日第一號を發兌し、以後每月廿五日に出版して翌一ヶ月中の科目となし、其十二月に至りて全科卒業となす。

東京麴町區下六番町六番地 女學雜誌社

林學士 星野愼之輔君著

昆蟲
植物
金石
採集法

小形洋綴美本
正價金八錢
郵税金二錢

目録

木の間青み繁く蝶は野邊に舞ふ今や採集の期となりぬ請ふ一本を坐右に備へ給へよ。

發賣元

女學雜誌社

自今
浪華女學校
ト改稱ス

大坂府東成郡清堀村番外十四番

舊一致女學校事

私立
浪華女學校

毎月二回 （十日 廿五日）

黨報

第十三號目次（五月廿五日發行）

○黨論 ●帝國議會停會

○論説 ●議會は宜しく自ら其解散を奏請すべし……武富時敏 ●機關の調熟……江口三省 ●變節食言代議士を論ず……小室重弘 ●閣臣の責任……岡信之介

○黨報 ●我黨の幹事●我黨交渉委員●代議士總會●關東會●北信會●東北會●關西評議員會●代議士脱黨●三代議士の除名、其理由●第五部々長副部長●義捐金

○帝國議會 ●衆議院●貴族院

○時事 ●上奏案●決議案●白票青票●大臣の揚言●言論の自由●停會●眞相●廟堂和戰議●如何●悠々傍觀●惡慣例●無責任●議事筆記●大權侵蝕●路說●再開の日●善後策●逐臣●社鼠、猛狗●華冑公子政府黨●政府黨の議決●條約改正案●院外運動●天下悉く白票を投せん●伊國內閣の更迭●停會の理由●停會日數●時事日記

代價料 一部六錢●十二部六十六錢●廿四部一圓廿錢無遞送●注文は凡て前金の事

東京芝公園

自由黨々報局

女學雜誌大取次所

東京市日本橋區本町三丁目　瑞穗屋卯三郎
同　神田區錦町二丁目　武藏屋藤藏
同　京橋區尾張町二丁目　東海堂
同　同彌左衞門町　巖々堂
同　神田表神保町　東京堂
同　京橋區出雲町　警醒社
同　日本橋區鐵砲町　指金堂
同　本郷區元富士町　盛春堂
同　神田區雉子町　團々社
神奈川縣横濱市　共同新聞發賣會社
同　万字堂
京都佛光寺烏丸　東枝律書店
大坂本町四丁目　岡島支店
同　福音社
神戸元町四丁目　福音社
函館市　福音社
熊本縣熊本　草野門平

賣捌店は全國各新聞雜誌店に有之候

社告

女學雜誌第三百二十號より大改良仕り本號より白赤の二種に別ちたれば五月限り帳簿上の**雜誌代金**も亦改正致度候間舊號迄の分至急御拂込相成度候。為替は**麴町郵便局**へ御振込被成下度候

女學雜誌社發送部

女學雜誌代價

○白赤双方合せ講讀の分

十冊	前金	五十八錢	府外	六拾三錢
廿六冊（半年）	仝	一圓四十三錢	同	一圓五十六錢
五十二冊（一年）	同	二圓六十錢	同	二圓八十六錢

○白赤の内一方講讀の分

六冊	前金	三拾五錢	府外	三十八錢
十三冊（半年）	同	七拾三錢	同	七十八錢
廿六冊（一年）	同	一圓三十錢	同	一圓四十三錢

一冊金六錢　郵税金五厘

廣告料及無料廣告

一行（廿七字詰）	一回	前金拾錢
同	三回以上	一割引
同	六回以上	二割引

○十行以上一割引。　二十行以上二割引。
○四十行同四割引。
但し不道徳なる廣告は謝絶す、慈善的の廣告は無代價にて引受く。
○特別廣告は婦女に關する協會會合等の記錄を掲ぐるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を載する毎に右雜誌十部注文を要し以上半頁毎に十部増さと定む。

發行所　東京市麴町區下六番町六番地　女學雜誌社

編輯兼發行人　巖本善治
印刷人　堀口庄三